

同類探しの旅に出よう！

廻音 輪廻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比類なき力を持つ孤独だった男が自分の同類を求めて旅をするお話。

目次

運命とは程遠い邂逅	1
初めての執着	11
白銀の従属神	23
法国出立の黄色い朝	34
ビーストマンとポンコツ姫	47
亜人軍と人の戦争	57
虹色の自慰	68
慢心と油断、勇氣と蛮勇	80
マッチポンプ1本 恋の元	90
白黒の反省と金の罪悪感、銀の衝撃	101
従属の在処	110
好き嫌いの感情	118
関係悪化	129
竜の礼	142

運命とは程遠い邂逅

スルシャーナという神を崇める宗教、その総本山スレイン王国。その周辺諸国にはローブル聖王国に竜王国、それに加え何かあるたびに戦争を起こす頭のおかしいリ・エステイーズ王国にバハルス帝国という二つの国が存在する。

これらの国は常日頃から魔物の危険に晒されており、日々の生活には命の危険が伴い最悪攻め滅ぼされそうな国すらもあるほどだ。

しかし、どの国も甚大な被害を受けてはいるものの滅びた国は未だに一つも存在しない。

それは何故か。

六色聖典と呼ばれるスレイン王国が抱える精鋭部隊が存在するためだ。

六色聖典、それは漆黒聖典、陽光聖典、風花聖典、水明聖典、火滅聖典、地核聖典という六つのチームで構成された精鋭部隊の総称であり、スレイン王国お抱えの特殊部隊の事である。

しかし、その六色聖典の中でも役割の分担というものがあり、戦闘向けの漆黒聖典、魔物駆除の陽光聖典、魔法での諜報活動の水明聖典、足での諜報活動の風花聖典、暗殺からゲリラ戦までなんでもござれの火滅聖典。

これらの聖典は神都に住む住民達もその細かい在り様は知らなくとも自分たちを守ってくれる存在が居るといふ事は知っていて、日々自分達の安全を守ってくれている事に感謝を捧げている。

しかし、残る最後の聖典である地核聖典。

この聖典は大事な物を守る存在であるという事こそ認知はされているものの、具体的に何をしているのかという事は六色聖典のメンバー内ですらあまり認知はされていない。

どこるか、その構成員を見たものすらほとんど存在しない。

実はこの地核聖典、五年ほど前から構成員が一名しか所属しておらず、さらに言えばその構成員は特に何かをしている訳でもないニートである。

だが、別にこのただ一人の構成員が仕事をボイコットしていたり、散歩に出て迷子になっていたりするわけではない。

単純にタレントが危険であることと、それに比例して死なれては困る理由があるために城の奥深くに軟禁されているのだ。

しかし、その様な事をして不満を持たれて反逆されないかという心配事は確かにあるのだが、彼を知る者達はそこまで不安には思っていないかった。

何故ならば、軟禁する時に一つの約束をした後に自ら軟禁されてくれたからであり、此方がそれをきちんと守っていれば彼がそれを破る事は無いと思っっているからだ。

そうやって自ら軟禁された彼は、当然自分の能力の危険性は知っているし、なぜ彼らが自分を軟禁しようとしたのかも知っている。

だからこうなった事に理解はしているし自業自得だとも思っている。

だからって……

「あー、クソ、暇だ！ あのクソ爺め！」

不満が一切ない訳ではないのだ。

その手に握られていた本が放り投げられ、部屋の壁にぶつかって落ちる。

はあ、と一つため息を吐き腰かけていた椅子から立ち上がると、まるでここが王の寝室だと言わんばかりの豪華な天蓋付きのベットへとその体を投げ出す。

因みに、ここで言うクソ爺とはスレイン王国の最高神官長の事であり、まず聖典の誰かに聞かれれば剣を抜かれるだろう。

「惚れた女とセックスしただけなのになあ……っっていうか地核聖典が俺以外にいなくなったのは、別に俺の所為じゃねえだろうに」

そうやって何時もの文句をこぼす。

そう、こんな城の奥深くへと軟禁された理由、それは彼が一人の女と性行為をした事にあった。

それだけならば本来このような事にはならないだろう。

むしろその程度は個人的の自由だと黙って見過ごされる。

ただ、問題だったのはその性行為をした女の方であり……

「最近全然来ねえなあ番外席次」

そう、問題の性行為をした女とは番外席次「絶死絶命」漆黑聖典の隊員であり、地核聖典が彼以外にいなかった原因であり、彼と同じく神都城内に軟禁されているスレイン法国最強の女だった。

問題の始まりは自分の持つ力に飽きた彼が自分に勝てる程の強者を求めてスレイン法国へと入り、六色聖典の一つである地核聖典に配属された日である。

聖典に新たなメンバーが加わる時、六色聖典のメンバーには仕事が入っていて出れない者を除き、祝福の儀と呼ばれる新入社員歓迎会のような物に参加することが義務付けられている。

とはいえ、食事や会話を楽しんだりするようなものではなく、漆黑聖典で言えば第七席の占星千里といった、いわゆる二つ名というものを最高神官長により付けられる命名式のようなものだ。

「リビドー・ブレイン。汝を地核聖典第十一席へと任命する。汝が名は「虚無情動」である。これより地核聖典の隊員が一人として精進せよ」

「はっ、ありがたき幸せ。私、虚無情動はこれより一層精進し、地核聖典が隊員として活躍をしてゆく所存でございます」

「うむ」

そう満足げな顔をする最高神官長を傅いたまま見上げる。

その目に光はなく、この世の全てを下らないと見下かのような冷たい輝きのみがあった。

スレイン法国が抱える最強の特殊部隊に興味を持ち志願しては見ただものの思っていたよりも弱い。

六色聖典の全てがここに集まっていた訳ではないだろうが六色聖典の中でも最強と言われる漆黑聖典、その隊長であれだ。

確かに強いとは感じるが、まず負ける事は無いだろうというものも分

かっってしまう。

名高きスレイン法国最強が所詮この程度であるというのならば、目標を達成し終えたらすぐに雲隠れしてしまう。

俺が求めるのは俺の同類だ。それがいないのならばここにいる意味は無い。

そんな事を考えながら立ち上がると、視界に一人の女が映る。

髪が右側が白くて左側が黒く、眼は右が黒くて左が白い。

稀にいる目以外が真っ白な人間かと思っただが、もう片方はちゃんと色がついている。

不思議な配色だ。

まず間違はなく先ほどまではいなかった女だ、あんな目立つ配色の女を見逃す筈がない。

……が、どうでもいいかとそのまま後ろを向き出口に向かって歩き出す。

「ねえ、貴方」

そんな声とともに肩に手が置かれる。声からして女だ、恐らくは先ほどのモノクロ少女だろう。肩を引かれるままに振り返り笑顔を作る。

「はい、なんででしょうか、お嬢さん」

「貴方、実力に自信は？」

作った笑顔が固まる。

……何故そのような質問をする？ 誰にも挨拶をされていなかったという事は所詮神殿の使いっ走りの雑用かなにかだろう？ 顔が良いという自覚はあるが、それならば名前を聞いたりするはずだ。

モノクロ少女から視線を外してみれば目を見開いて此方を見ている第一席と最高神官長がいた。

なにを其処まで驚いている？ 所詮、雑用が新人に絡んだだけだろう？

……まあいい、さっさとあしらって、まずは地核聖典の者達の力を奪いに行こう。

その後は他の聖典もだ。

こんなところで時間を浪費できるほど俺は暇ではない。

「いえいえ、私など。強い者が好みなのですか？　そうなのであれば、あそこにかの漆黒聖典第一席の実力を持つお方が」

そこまで言った所で、殺気を感じた。

いや、これは殺気というよりは死気、殺されるではなく、死んだという感覚だ。

反射的に腰の儀礼用の剣を抜いて構える。

いや、構えようとしたところで全身の骨が叩き折られそうな強い衝撃が剣を通して伝わってきた。

「ツグう!!!」

跡形もなく粉碎される剣を見てこのままだと貫通した衝撃だけで背骨を叩き折られると直感的に理解して自ら後ろに飛び、着地してからも残った衝撃で少し後ろに引きずられる。

腹に走る鈍い痛み、これは直で食らっていたら死んでいたと理解し、肺に残った僅かな酸素^{恐怖}を吐き出して新しい空気を補充する。

目の前、10メートルほど先、先ほどまで自身が立っていた場所で、拳を振り切った体勢でくりくりとした目を見開き驚きの感情を見せるモノクロ女がいた。

「……これは、何のつもりですか？」

「耐えた……耐えたわね！　あの不意打ちを！　やっぱり貴方、強い。見せなさい、貴方の力！」

「人の話を聞かない女だなッ！」

一瞬で距離を詰めて殴りかかってくるモノクロ女の空気を裂いているのが肉眼で確認できるほどの拳を掠らせながらも、なんとか避けてその可愛らしい顔にカウンターを合わせる。

空中で顔面にカウンターを食らったモノクロ女は衝撃を受け流すことも出来ず、そのまま頭から神殿内に設置されているスルシャーナ像へと突っ込んでいった。

それを見ながら自らの拳を見る。

殴った部分は内出血、それに加え痙攣まで起こしていた。

深呼吸をしながらもう片方の手で労わる様に撫でていると、右の視

界だけが赤く染まり始める。

拭ってみれば、少しの肉片と夥しい程の血が付着していた。

先程の拳の所為かと理解して、掠っただけでこうなったのかと冷や汗を流す。

「…………ふふふ、いいわ、いいわあ…………」

「…………なるほどね」

人間であれば、確実に脳震盪を起こすか死んでいるレベルのカウンターだったのだが、まるで気にもかけずむくりと起き上がり、赤くなつた額を愛おしそうに撫でているモノクロ女を見て理解した。

「手加減したら死ぬな」

目に力を入れ、タレントを使おうとして…………すぐ近くにいる存在の事を思い出した。

ちらりと横を見るとこちらを驚愕の目で見ている第一席と最高神官長がおり、後ろに視線を向ければ戦闘音に気付いたらしい一部の六色聖典が入口に集まり始めていた。

このままではタレントを使えないなと理解して舌打ちをしつつモノクロ女に視線を戻す。

「なあ、お嬢さん」

「うふふ、なあに？」

上機嫌に笑うモノクロ女に苛立ちつつも、ふつつと自分の中で湧き上がる喜びに背筋が震える。

「名前は」

「漆黒聖典、番外席次」

「…………名前を聞いてんだがな…………」

「ええ、だから番外席次よ。絶死絶命と言った方がいいのかしら？」

まあ本人がそういうのならそれでいいのだろう。

漆黒聖典というところが少し気になるが、今はどうでもいい。

自身の体が熱く滾り始めていく感覚が心地よい。

今はそれでいい。

「お前、スレイン法国での強さは」

「最強」

その返事に、思わず笑みが浮かぶ。

何が漆黒聖典第一席だ、何が漆黒聖典隊長だよ、俺を落胆させやがって。

こんなところに……いるんじゃないか。

「殺す」

「うふふふふー」

今度は俺から駆け出し、全身に扱える限りの強化魔法を全てかけながら拳を振りかぶった。

その後しばし殴り合ったが結果は敗北。

腕を千切り飛ばして心臓のある左胸に拳を入れたところまでいったのだが、構わずに血を吐きながら殴りかかってきた事に動揺し、その隙を突かれた形となった。

むくりと起き上がると周囲を見回し、地核聖典の寮、その自分用に用意されたベツトルームであることを理解する。

「あー、負けたか」

タレントが使えなかったことなど言い訳にならない、負けは負けだ。

むしろ何故今自分は生きているのだろうか。

あの女の放つ殺気……死気からして敗者は死すべしみたいな奴かと思っていたんだが。

そう思いながらぼりぼりと頭を搔いているとぱらぱらと赤い欠片が落ちる。

拾ってみると血が固まったものようだ。

それを理解すると少し頭が痒くなってきたような気がする。

風呂に入って洗い流すかと考えていると、不意にキイツと音を立ててドアが開いた。

「あら、起きた？」

見ればモノクロ女、いや番外席次がタオルを引っ掛けた桶を持って立っていた。

千切り飛ばした筈の手はちゃんと両腕揃っており、あの戦闘で負っ

た筈の傷も一つとして残ってはいない。

「殺さないのか」

「殺さないわよ」

彼女はそう言って笑い、近くまで来て桶を置くと入っていた水にタオルを浸して絞った。

ありがたいと思いい手を差し出すとその手を掴まれ、あのような戦闘狂ぶりを見せていた女と同一人物とは思えないほど丁寧拭きだした。

「……いや、渡してくればよかったんだが」

「嫌、私が拭きたいの」

「……そーかい、じゃあ頼んだ」

二人とも何も話さない静かな空間に水を絞るパシャパシャという音のみが時折響く。

そうして拭かれるがままにしていると、外からオレンジ色の光が入ってきていることに気付く。

「俺はどれくらい寝てたんだ」

「約五時間ってところね」

「回復は？」

「私よ、起きたら貴方がそのまま放置されていたから死んでないかと焦ったわ」

「……すまん、助かった」

「私が望んでやっているのだから別にいい」

そうして軽く笑うと再び拭く作業に戻った。

あまりに丁寧拭くので、くすぐったい気持ちが強いのだが、今の笑顔を見てふと思うことがあった。

「お前なんで俺の実力に気付いたんだ」

「私を見たから」

「はっ」

見たからなんだというのか。

まさか普通に歩いている姿を見かけただけで、俺の力に気付いたとでもいうのか。

「私は普段から六大神様が遺した宝具を纏っている。その中には当然他人に姿を見られなくなる透明化の物もある。その真価は魔法などで探知されなくなる事にあるのだけれど……兎に角、貴方はそれを無視して一瞬私を視界に入れていた」

つまりなんだ、一定の実力以下の者には姿が見えなくなる筈なのに、そんなもの存在しないかの様に一瞬あの特徴的な頭を見ていたからバレたと。

「……馬鹿やったな」

「私としては貴方に気付けたしむしろ良かったわ」

あーそうですね、貴女戦闘狂ですもんねえ。

散々殴り合ってすつきりしたってトコですか。

ところで

「そんなところに手を入れないでいいからな。後で自分で拭くよ」
ズボンに入れようとしていた手を掴んで止める。

しかし、彼女はそれを無視して無理矢理突っ込もうとしてくる。

「いや、だからやんなくていいって!」

「いいえ、絶対にやるわ」

「なんなんだよその執念!?!」

しかも、地味に彼女の方が筋力が強いのか、振り下ろす側と持ち上げる側だからなのか、徐々に侵入していく。

仕方なく強化魔法を使い、無理矢理引き抜いていく。

段々と引き抜かれていく手を見て彼女は眉を顰め、口を開いた。

「私は貴方の子供が欲しいのよ」

「……はい?」

ふによんつと、呆けた俺の手から力が抜け、振り下ろされ切った彼女の手が俺のリビドージュニアに触れる。

そうして俺が呆けながら彼女を見ているのをいい事にふにふにと揉み……恥ずかしくなったのか止めた。

「……え、俺とお前五時間前に会ったばかりだよな? しかも即殴り合い。それが何故そうなった」

「私は強いオスの子供を望んでる。私を倒せるほどの強いオスのね」

それならばますますおかしい。

「俺はお前に負けただろう。俺は最後にお前に殴られて気絶したぞ」
「引き分け。貴方が倒れるのを見ながら私も倒れて三時間ほど意識を失っていた」

「……どつちにしろ勝ってないじゃないか」

「貴方、本気を出してない。……まあ私もそうではあるけれど」

「は？ 俺は確かに」

「一瞬目に力を入れたくせに、集まってきた奴らを見て舌打ちしてやめてたの、見たわよ」

随分とまあ観察眼がよろしいことで……そう思い呆れていると止まっていた手が再び動き出す。

今度は興味で触るのではなく、勃たせようとする動かし方だ。

慣れていないのか、全く気持ちよくはないから反応したりはしないのだが……

「とりあえず、触るのやめませんか？」

「うるさい、いいから黙って絞られてなさい」

「いや、むしろ痛いんだが……」

「うく……」

タオル越しに無理矢理勃たせようとしているのだが、動きが稚拙な上にタオルがゴワゴワとしていて痛みしか感じない。

そう言うが無理に動かすことはやめたが、今度は今度でソフトタッチ過ぎて殆ど触ることも出来ていない。

段々と焦らされている気分になってきて、ため息を一つ吐く。

折角の据え膳なんだし、もう我慢せずに食うか。

そうと決めると、未だに慣れないのか、顔を赤くしたままフニフニと男性器を弄っている番外席次の腕を掴んで、ベットに引きずり倒した。

初めての執着

ベットへと引きずり倒した番外席次の顔を上から眺める。

「な、なに……う？」

綺麗につむじ部分で分かれている白と黒の髪に手をやる。

その不思議な配色の髪は染められた髪特有のザラザラした感触を感じず、むしろ砂を掴んだ時のようにするりと掌から逃げて行った。

つまりこれで地毛という事だ。

生体の神秘というかなんというか。

そんな髪は目にかかって邪魔なのか、前髪の外側は髪留めを使って固定し、内側が互いの領域を侵すかのように交差して纏められている。

それを退けて、彼女の顔を見つめる。

どちらかといえば綺麗系よりも可愛い系の顔立ちだろうか。

しかしパーツの配置は間違いなく可愛い系なのだがそのパーツが細長の眉に切れ長の目、ツンと立った鼻に若干下向きの唇と綺麗系なために、まるで可愛い少女が熟練の娼婦のような色気を出しているかの様な怪しい妖艶さを醸し出している。

では体はというと17〜8程度であろう年齢にしては貧相な胸だ。

しかし細いくびれに安産型程ではなくともしつかりと膨らんだ尻が巨乳など邪道、むしろこれでよいのだと全力で訴えてくる。

そんな彼女の肢体に触れればゴワゴワとしている服越しであるにも関わらずその白い肌はフニフニと柔らかく沈み、直に触れた時の感触を触れてもいないのに此方に叩きつけてくる。

彼女の肌を服越しに撫で摩りながら、思わず息を呑む。

未だ味わってもいないのに間違いない今まで経験してきたどの女性よりも素晴らしいものだと思わせてくるこの美食を直に味わえば、一体どれほどの快樂を得られるというのか。

思わず襲い来る情動に身を任せて彼女の服を剥ぎ取り食い散らかしたくなるが、先ほどの男性器を恥ずかしがりながらも興味津々で触れていた時の様子を見るに彼女は生娘だろう。

それを無理に襲えば彼女は性行為を怖がるようになってしまいかもしれない。

強いオスの子を産みたいと言っていたし大丈夫だとは思いますが所詮は生娘の言う事だ、セックスは痛いしもう嫌だと言われたら無理強いは出来ない。

「唇、もろうぞ」

「へ、まつ、むぶ」

キス宣言でようやく状況が理解できたのか俺の胸を押しつけてくるが、今度は此方が上で彼女が下というのもあるが強化魔法で強化された肉体に勝てるはずもない。

それに加えて状況に流されているのか殆ど力も入っていないかった為にそのまま押し切り彼女の唇に此方の唇を合わせた。

最初に感じたのはその感触。

兎に角柔らかく、ほんの少しの花の様な良い香りがする。

しかし味わおうと少しでも強く食むとすぐにだめだと押し返し、その代わりにとでもいうように更に強く花の香りで此方の嗅覚を刺激してくる。

その素晴らしい感覚に思わず夢中になって貪る。

もはや性行為などせずこれだけでいい気分になってくる。

「はっ……はあっ……はふう」

少し顔を上げて彼女を見れば、既に顔を真っ赤にして震えていた。

このまま舌を突き入れて深くキスをすればそのまま意識を飛ばして気絶しそうだ。

キスは切り上げて片手で彼女の頭を支えつつ、自分と彼女の額を合わせてゼロ距離で見つめ合い、彼女がそちらに夢中になっている内に少しずつ彼女の服を剥いでいく。

剥ぎに剥ぎ、残るはもはや下の下着だけとなった段階で突き合わせていた額を離し、露になった彼女の裸を見つめる。

そうすると漸く自身を守る装備がパンツだけになった事に気付いた彼女が慌てて両腕で胸と股間を隠した。

だがそんなものは無駄だ。

秘所を守るのに使っている両腕を掴み、頭の上で纏めて片手で固定し閉じられる前にその膝の間に自身の体を滑り込ませた。

感想としては兎に角白い、それに尽きる。

今まで一度も外に出た事が無かったのではないかと疑問になるほど透き通った肌はその下の神経やピンク色の筋肉が若干透けており、その真つ白な肌を薄桃色に染めている。

そんな白い肌の膨らみ、胸の頂点には小さなピンク色が存在を主張しており、まるで砂漠で見つけた水源の様に此方の欲求を刺激する。

彼女の両手を拘束している手とは逆の手で彼女の耳、顎、胸、腹、腰、太もも、ふくらはぎとそれを往復して乳首と秘所には触れないように何度も何度も撫で、揉み、摩っていく。

「あつ、ふつ、んんっ！」

暫くそれを繰り返していれば少しずつ彼女が小さく体を震わせ始めたため、それを切り上げて残る最後の衣服、パンツへと手を伸ばす。ゆっくりゆっくり抜き取っていくと、既にべちゃべちゃに濡れている秘所が遂にその姿を現した。

見ればパンツにもその残照はこべりついており、秘所との間に一つの橋を作っていた。

それを完全に抜き取ってベットの端に置き、彼女の濡れ切った秘所と向き合う。

本来であれば心行くまで舐め回したり弄ってみたりして楽しむたところではある。

だが仮にもスレイン法国最強という目立つ地位にいる彼女が、何時まで経っても神聖な神殿で殴り合いをして荒らすような野蛮な男の部屋から出てこなければ怪しむ奴も出てくるだろう。

そのため、今後も彼女と周りに怪しまれずにセックスが出来る関係になるためには彼女にセックスに対するトラウマを残さぬよう優しく丁寧に素早く致し、尚且つまた何度でもしたいと思わせる程に彼女を満足させる必要がある。

自身の性器を取り出しながら優しく彼女の濡れ切った秘所を撫でると、こんこんと湧き出る愛液がべったりと手に付着した。

それを自身の性器に満遍なくたっぷり塗りと塗りたくると、秘所の入口に自身の性器を合わせる。

処女膜を破るとなるとこれだけ濡れていても凄く痛いだろう。

だが、これ以上濡らしても感じる痛みにもそれほどの違いはないというのもまた事実だった。

なにより破っても痛みを殆ど感じない程に濡らすとなると時間がかかり過ぎてしまうし、それまでの間に何回も彼女が絶頂するだろう。

女は確かに男と違って幾らでも絶頂出来るが、だからといってそれが辛い訳ではないのだ。

彼女にトラウマを残したくはない、しかし時間も掛けたくない。

となると彼女に多少なりとも負担を掛けさせてしまうが、この辺が切り上げ時だろう。

そう判断すると彼女の腰を掴み、腰を前に進めようとする。

「んう、だからっ、待ちなさい！」

そう叫びながら振り上げられた彼女の足が彼女の手を拘束している手に当たり、一瞬力が緩む。

その隙に拘束を解いた事により解き放たれた彼女の両手がバシツツと此方の顔を挟む。

「ふう、ふう、貴方……何を焦っているの？」

「今のこの状況を見られたら不味いと思わないか？」

「思わないわ。貴方は私が認めた。そして認めた相手と性行為をしようとしている。その事に不満など言わせはしないし言うものが居るなら私が殺してあげる。だから、貴方は焦る必要なんかないし、急ぐ必要もない」

「いや、でも、ほら、えーと、その……」

「あら、なあに？」

此方の頬を両手で押さえたまま親指を動かし撫でてくる彼女の微笑に思わず視線を逸らす。

先ほどまで急いでいた理由など所詮はただの言い訳だ、理由は別にある。

しかしそれを言いたくはなかった……が、視界に映る彼女の困ったような顔に思わず口が滑る。

「……………嫌なんだよ」

「なにが？」

「初めての同類だと思ったんだ」

今まで負けた事など一度もなく、出来ない事などなかった。

世の中を舐め腐り、しかしそれでも世界最高クラスの生活が出来た。

これからもそんな決まりきった不可能など無い最高に自由で最低に不自由なクソ詰まらない人生を過ごしていくのだと思っていた。

そうしていつか現れるプレイヤーという存在に対して退屈にしばれを切らして挑みかかり、自身の持つタレントなどゴミの様にあしらわれ……殺してくれるのだろうか。

「それを文字通り殴り飛ばしてくれた。負けなし、孤独、決まりきったクソ詰まらない人生、それを一緒に過ごしてくれるかもしれない仲間に、初めて出会えたんだ」

それはまさしく一目惚れ……いや、一度目は興味などなく見過ごしたがために二目惚れとでもいうべき体験だった。

「初めて出会った同類を好きになっちまって、そいつと今セックスをしている。だったら、ほかの誰にも見せたくねえのが男の心情じゃねえか」

この地核聖典に割り振られた寮のベツトルームに鍵など付いていない。

つまり誰かが怪しいと思ったり気まぐれに入ってきたりする事も出来る。

その結果見られてしまうのだ、そこら辺の名も知らないゴミ共に愛おしい彼女の何も着ていない裸の体が。

そんな事、許せるはずがない。

そんな思いを込めた言葉に彼女は驚いたように目をぱちくりと瞬かせた後、頬を押さえていた手を離してくすくすと笑い出す。

そんな反応にだから言いたくなかったんだと彼女から顔を逸らす。

「ああ、いえ、馬鹿にしてる訳じゃないわ。むしろ嬉しくて」

「そ、そうかよ……」

赤くなつた顔を見られない様に逸らしたままでいると、不意に自身の男性器を掴まれた感覚がした。

見れば、彼女が未だに硬くなつたままの男性器を優しく掴み、もう片方の手で自身の秘所を割り開いて其処に押し付けていた。

「なら、私達専用の性行為をするための場所を作らないといけないわね」

「ば、ばんがいせきじいじい！」

「〜♪」

……で、全然俺の部屋から出てこない番外席次とシートに付いた小さな血痕。

更に股関節を痛そうにしながらもほけほけとした笑顔を浮かべる番外席次を見て何が起きたのかを察した地核聖典の者達は直前に神殿で暴れていた事もあり俺が聖典の名を背負うにはふさわしくない人格の持ち主であると判断した。

その結果、俺を排除しようとした地核聖典は幸せな気分浸つたのに邪魔をしたとして全員番外席次により追^殺出^戮された。

そんな殺戮劇の直後に最高神官長に呼び出された時は流石に少し警戒したが、特に何かされたりといった事は無かった。

しかし何も罰が無いというのは他の者に示しがつかないという事で俺の持つタレントの能力の情報と引き換えに城の奥深くに存在する一室へと軟禁という刑罰を受けているのだ。

……まあこの部屋の中でならば誰と幾らでも性行為をしてもよく、そして番外席次以外は勝手に入ってはいけないという事もあってこれ刑罰として成り立ってんの？ という疑問は浮かぶが。

そしてその肝心の番外席次だが……

「うう、番外席次い……俺が何かしたんなら謝るから早く来てくれえ

……一人は寂しいよお……」

ここ二週間ほど、ただの一度もこのスレイン法国公認ヤリ場、別名牢獄に訪れていなかった。

普段であればどれだけ間が開いても三日以内には性行為はせずとも会話などをしにやって来ていた。

それがただの一度もなく二週間。もういいんじゃないか？ 今が爺との約束の破り時じゃないかな？ などとずっとソワソワしていた。

と、その時。

「入るわよ」

「番外席次い！」

二週間の間一度も自分に会いに来なかったという事実など無かったかのように何時もの様にノックの一つもなく入ってくる番外席次。

それに番外席次に飢えていた俺が飛びつかない筈が無い。

ベットのスプリングを利用して陸に揚げられた魚の様に一度跳ねると宙に浮いたままくるくと回転してベットから飛び降り、着地した瞬間に番外席次に向かって飛び掛かっていく。

飛び掛かった体勢のまま白い物体にタツクルをかますと、そのまま押し倒して頬をズリズリと押し付けた。

「番外席次番外席次番外席……じ？ ……これ、番外席次じゃない」

そうして少しの間抱き着いたまま頬を押し付けていたが、何時も感じている番外席次の肌の感触とは違う事に気付いて頬を押し付けるのを止めて視線を上げる。

すると、そこにいたのは予想通り番外席次ではなく、謎の銀髪の女の子であった。

年齢は番外席次が十七程度だとするならば、この子は十歳程度だろう。

その割には、やけに胸がデカイ。

ピンっと人差し指で弾いてみれば、明らかにおかしな挙動をしてばるばると震える。

偽乳か。

「いきなり抱き着いてこないで」

後ろから聞こえた番外席次の冷たい声にビクツと震え、そろくつと後ろを見る。

「ば、番外席次……やっぱり俺が何かしたのか？　なら謝るからどうか」

「は、恥ずかしい……」

番外席次の羞恥心攻撃！　リビドー・ブレインに10000のダメー
ジ！

「つと、そうだ番外席次！　なんでこの二週間一度も来なかったんだ！？　というかそもそもこの謎の銀髪の女は誰だ！？　なんで連れてきたのん！？」

「この二週間来なかった理由は簡単よ。外に散歩に行っていたわ」

「散歩お！？　あれ、番外席次に出来ない理由とかなかったっけ？」

「それなんだけどね、そも竜王の探知は六大神様の宝具である程度防げるのよ。ほら、あの透明化の宝具。外出禁止の理由は私が外で強そうなやつを見つけて暴れたら流石に透明化の宝具でも防ぎきれないからよ。騒ぎになっちゃうからね……けど、その、今は貴方がいるから、ね」

番外席次の二重の極み！　リビドー・ブレインに20000のダメー
ジ！

「で、この女はその散歩の途中で拾ってきたわ」

「んぐぐ、拾ってきたって……あのなあ」

「恐らくは同類よ、私たちの」

「！」

さりげなく零されるその言葉に、緩んでいた気を即座に引き締める。

同類という事は、この子もそうなのだろう。

何時も一人で出来ない事など無い代わりに決まりきったクソみたいな詰まらない人生を歩む事を世界に強要された理解者なんて存在しない孤独な存在。

「種族は吸血鬼。漆黒聖典と鉢会って、第八席次「巨盾万壁」と第九席

次「神領縛鎖」が死亡、直後カイレがケイ・セケ・コウクを放ち死亡。そしてその結果、中途半端に洗脳が効いているのが今のこの子の状態よ。放っておけば殲滅し終えた後に食事が出来ずに餓死していたでしょうね。私は放置しても良かったのだけれど……きつと貴方はこの子の事を放つてなどおけないのでしよう?」

「ああ」

番外席次の言葉を聞きながら洗脳が効いている所為なのか目に光が無く、何の反応もしない女の子を膝の上に乗せて頭を撫でてやる。

「……今までよく、一人で頑張ったな」

そうして暫く俺が撫でていた姿を見ていた番外席次だったが唐突に此方へと歩き出し目の前でしゃがみ込むと銀髪の女の子の顎を掴んで持ち上げ、その顔を覗き込んだ。

「で、この子を連れてきた理由は三つあって、その一つがさっきの私たちの同類であること」

「ふーん、じゃあ二つ目は?」

「貴方のタレントでこの子の洗脳解けないかなと」

「あー」

確かに洗脳という領域なら俺の得意分野だ。タレントを使えば大抵の洗脳を掛けられる自信があるし解ける自信もある。

しかし、あくまで大抵だ。

六大神、プレイヤーと呼ばれる存在が遺したマジック・アイテム。

その中でもケイ・セケ・コウクのような特に強力なもので掛けられた洗脳となると流石に厳しいだろう。

以前にも似たような事を爺に頼まれたが大変苦労した事を覚えている。

「ちよつと待っていてくれ」

女の子の脇を掴んで持ち上げ、対面になるように膝の上に置きなおす。

その顎を持ち上げて瞳に目を合わせタレントを発動する。

本来はこのような面倒な事をせずとも発動するのだが今回の相手は宝具の中でも特別な位置に存在するケイ・セケ・コウクだ。

万全の準備をした上で全力で挑まなければならぬだろう。

ケイ・セケ・コウクは洗脳を掛ける専門で、掛けた後は一度殺すかしないと一生洗脳が解けないのが面倒だ。

洗脳を掛けるだけ掛けて、自力じゃ解けませんとか案外あの宝具つてポンコツなんじゃなからうか？ 何回かカイレ以外の娘に使わせて実験した時はちゃんと扱いこなせなかったとか聞いたし。

というかその肝心のケイ・セケ・コウクはどうなったのやら。ちゃんとカイレのババアから剥ぎ取って回収できていればいいんだが。

さて、それは兎も角として意識を集中して全力でタレントを発動する。

すると一瞬世界が広がり、宙へと放り投げられた後に落とされたかのような、ふわつとした感覚が身を包む。

それが収まったかと思うと今度は広がった世界が目の前の彼女へと縮小されていき、彼女の中へと侵入していく。

この時点でだいぶ気持ち悪くなってきている。だが此処で止めたら最初からやり直しになるため我慢して続行する。

見えるは赤き情動。

赤いものを飲みたい、美しい女の首に噛り付きたいという強い欲求。

黒い翼を持つ女への対抗心に、巨乳への嫌悪と羨望。

そしてよく見えないが何かに仕えていたいという忠誠心に、何かを失った悲しみ。

先程の忠誠心からして失ったのはそれを捧げていた主であり、黒い翼の女はその妻だろうか？

感情を辿っていてもあまり意味は無いかと考え記憶を辿ろうと其方へと移動しようとした瞬間何処からか現れた数え切れないほどの鎖が現れ、此方の侵攻を阻む。

そうして現れた鎖の所々に何か赤いものを滴らせた真つ赤な鎖が紛れ込んでいるのを見て軽く引つ張つてみるがピクリとも動かず、何かの記憶の欠片が流れ込んでくる事も無い。

その手応えの無さに、こりや無理だなあと諦めて感情へと少しだけ手を加え退散する。

「……ふう、これ以上は無理だ」

「どうだった？」

「とりあえず、俺とお前の存在を大事なものだって刷り込むことは出来たが、洗脳の解除は無理だな」

こればかりはどうしようもない。

魔法や力業でどうにかなるのなら幾らでもどうにか出来るのだが、タレントを鍛えることはほぼ不可能に近い。

それもあるために何か解決手段を見つかるか何回も繰り返し繰り返し洗脳して記憶の鎖が綻ぶのを待つしかないだろう。

それよりも

「この子、もしかしたら六大神の内の誰かの従属神だったのかもな」
「見えたの？」

「いや、漆黒聖典をケイ・セケ・コウクにかかった状態でも殲滅出来る力を持ちながらも何者かに忠誠心を持った存在、そしてその忠誠心を捧げる相手は死んでるらしいからな。そうなんじゃないかと思っただけだ」

俺でも流星にケイ・セケ・コウクを食らった状態で漆黒聖典相手に勝てるとは思っていない。

良くて4割で引き分けと言った所か。

それもタレントである程度洗脳を和らげられた場合の話だ。

それを番外席次は死亡する可能性のある要因が漆黒聖典を殲滅し終えた後の餓死だけだと言った。

それだけの存在が今まで無名であった筈が無い。

だがこの子は無名であった。

もしかしたら少しくらいは名が売っていたりするかもしれないが、俺は知らない。

それに加え、先ほどの忠誠心と喪失感。

ほぼほぼ間違いないと見ていいだろう。

「で？ 最後はなんだ」

「？」

「ほら、三つあったんだろ、この子を連れてきた理由。二つ解決……解決？ うん、まあ解決したぞ。最後の理由はなんだ」

正直今はもう疲れているので、あまり難しい理由でないことを祈りたい。

「それはね」

「？」

「この子、抱いて頂戴」

「……はい？」

拝啓スルシャーナ様、愛しく思っていた女が急に別の女を連れてきて抱けと言ってきました。こんな時はどうすればいいですか？

白銀の従属神

ベットに横たえた銀髪の女の子を見る。

何故こうなったのだろうかとその艶めいた綺麗な銀髪を撫でながら感慨に耽る。

「なあ、本当にやんなきゃいけないのか？ 憶測ではあれども、一応この子従属神なんだぞ？」

「ええ、だから？」

「スルシャーナ教徒としてそれでいいのかお前」

というか、

「俺はお前が居るだけで満足してるし、別に新しい女とかいらんないんだが……精々保護する程度でいいだろ？」

「じゃあ貴方はその二週間溜めた爆弾で私を殺すつもりなの？」

「いや、別に俺は発散しなくてもお前とお喋りしているだけでも十分満足してるんだが……」

「この前そう言って三日丸通しで犯され続けたの、忘れていないわよ。ほら、いいから、さっさとやりなさい」

「いや、あれは一週間放置された上に、誘ったのはそっちからで……まあいいや」

どうやら拒否権はないらしい。

どうにも番外席次相手だと強く出れないのが目下の悩みだな。

まあこれも一種の役得か。

個人的には番外席次が居るだけでも満足しているのだが、可愛い女の子を犯せるというのは男として嬉しいものなのだ。

「すまんね、彼奴に拾われたのが運の尽きだったと思って諦めてくれ」
滑らかな頬を撫でながら、唇を合わせた。

その柔らかい唇を割り開き舌を入れて舐め回す。

すると驚いた事に、洗脳されて意識が無いはずの彼女がそれに合わせて舌を絡め、ちうちうと吸ってきた。

その反応に意識が無くとも合わせてくる程に開発されている事を悟り、今まで出会った女の中でも2、3を争う程の美少女の初めてを

頂けなかった事を少し残念に思いながらも弱弱しく吸ってくる舌を逆に吸い返す。

そうして舌を捏ねくり回しているとチリツと吸血鬼ならではの尖った八重歯に舌が掠める。

瞬間、腰に甘い痺れが走り一瞬全身の力が抜け、体を支えきれなくなって銀髪の女を自身の体で押し潰す。

自身の男性器はズボンを押し上げる程に強く勃起していた。

その事に気付くと、一度重ねていた口を離し、片手で口を覆いながら座り込む。

すると勃起していた男性器が上に持ち上がり、巨大なテントを作った。

(これほど勃起したのは番外席次の中に突っ込んだ時くらいなものだったんだが……八重歯に軽く掠っただけでこれか。もしかして吸血鬼じゃなくて吸精鬼やサキュバスだったりしないかこれ？ 流石にこれは異常だと思うんだが)

とはいっても此処で怖気づいてはいられない、というかむしろ僥倖だ。

いくら美しい容姿をしているとはいええ入れて出すだけならば自分の手でいい。

相手の反応も何の楽しみも無いセックスなどむしろこちらからお断りだ。

この点は悪いが番外席次の頼みでも聞けない。

俺は人形と、死体とセックスする趣味など無いのだから。

その点少し楽しみが増えただけ良しとする。

もしも本当にこの開発され切った肉人形を何の楽しみも無く犯せと言われたのなら即座にベットから放り出し番外席次をレイプしていただろう。

むくりと起き上がり、目の前の吸血鬼の口に手を突っ込んで八重歯に向かって指を押し当てる。

しかし、先ほど感じた全身の筋肉から力が抜けて思わず崩れ落ちてしまうような強烈な快感は無かった。

そこでもしやと思い、吸血鬼の頭を押さえて押し当てていた指を強く押し込んだ。

鋭い八重歯に押し当てられた指は耐えられず、皮が突き破られ肉に食い込む。

瞬間全身を通り抜ける快樂の電流。

しかし今度は先ほどとは違って今度は備えていたこともあり勃起はしたものの全身の力が抜けるような事はなかった。

(やっぱりか)

つまり、この吸血鬼の八重歯は相手の肉……いやこの場合は血、あるいはそれに準ずる体液に触れ、尚且つその液体の持ち主に触れていた時に相手に強烈な快樂を与えるのだろう。

もしかしたら違うのかもしれないが、別に其処まで興味があるわけでもなし、取り敢えずはこの仮定でいいだろう。

この目の前の吸血鬼は開発され切った反応からして非処女だろうし、先ほどのキスで少しくらいは濡れているだろう。後はもう突っ込むだけでいい。

本当は番外席次以外の同類とは初めて会ったのだし、もっと優しくしてやりたいところなのだが、流石に意識もない相手に其処まで丁寧になろうとは俺は思えない。

これで処女だったら流石に彼女に悪いしもっと丁寧にやったのだが。

ついでに言えば、これは番外席次からのお願いだ。

意識の無い見知らぬ同類の貞操と番外席次であれば俺は番外席次を取る。

それだけの話だ。

特に何かの反応もせず、黙って口に指を突っ込まれたまま吸った吸血鬼の口から手を引き抜き、黒のポールガウンを脱がしにかかる。

すると、饅頭の様な形状をした巨大な胸パットがポロリと転がり出てきた。

試しに持ち上げてみると、大体南瓜くらいのサイズと重さである事が分かる。

こんなものを胸に詰めていても苦しいだけだろうし戦闘の時に邪魔な筈だ。

だが先ほど感情を覗いた時に見えた巨乳への羨望からして、そんなマイナスを抱えてでも付けていたい物なのだろう。

ポイっと手に持った胸パットを投げ捨てると、パンツだけになった吸血鬼に向き直る。

顔はその身長と同じくらいに幼さが際立つものの、絶世や傾国といった言葉が似あう程に整っている。

普通の男ならばまず飛びつかずにはいられないだろう。

光が無いため少し濁ってはいるが、それでも血に濡れたような深紅の瞳は吸い込まれるような妖しい吸引力を持っていて、思わず魅了の魔眼でも持つているのかと勘違いしそうになる。

大理石のような病的に白い肌は全体的に彼女を儂く見せ、後ろに流れる長い綺麗な銀髪はその小さな顔とほぼ同じくらいに大きなりボンで纏められており、艶めくうなじがこちらの脳を狂わせようとする。

胸はパットで誤魔化していただけあってほぼまな板に近いものの、腰は少しでも力を入れれば折れそうな程に細く、その下には小さいが掴める程度の尻が付いている。

所謂スレンダー体系、番外席次と同じタイプの体だ。

その磁器の様な滑らかな頬を撫でながら、ふと思った事を聞いてみる。

「こいつの名前って何か知らないか？」

「私が知っているわけがないでしょう」

「だよなあ……」

これから彼女の意識が戻るまでずっと吸血鬼と呼ぶのもあれだし何か名前を付けておこう。

まあ何か考えるのも面倒だし適当に付ければいいだろう。

どうせ洗脳が解けたら本名が分かるのだ、適当でも構いはしないだろう。

吸血鬼だし血、赤かな？ ……いや、深紅だな。

「よし、クリムゾンでいいや」

「もう少し女の子っぽい名前にしたら？」

「俺のネーミングセンスに期待するな。嫌なら適当に略してクリムでいいだろ」

「適当ねえ……」

適当でもいいじゃないか、適当万歳。

大体、女どころか男ですらない役職名の番外席次で妥協して放置しているお前だって十分適当ではないか。

……ふむ。

「よし、俺お前のこと今度からレイって呼ぶわ」

「殴るわよ？」

「5年も呼び続けといてなんだけどぶつちやけ番外席次って呼び辛い」

そう言うため息を一つ吐き、手で口を隠すと小さく首を傾げた。

「……なんでレイなの？」

「六色聖典だろ？ んでその番外って事は七色だろ？ だからレインポーから取ってレイだ」

「……そのまんまじゃない」

「さつきも言ったろ？ 俺のネーミングセンスに期待すんな！」

「……はあ、好きにきなさい」

そう言っただけで顔を逸らすレイ。

その耳が赤くなっていたのを見逃さなかった俺はにやにやしてそれを見つめる。

すると見られている事に気付いたのかレイは少しの間プルプルと体を震わせ、近くにあったルビクキューを手にして此方に投げつけた。

「いいからさつきとその女とやりなさい！」

「ほいほい」

あまり怒らせると後のお楽しみが無くなるかもしれないのでこちら辺でレイを弄るのをやめ、クリムのパンツを脱がす。

少しの間放置していたからか愛液の湧きが止まっており、しかしそ

れでも十分挿入するのに支障はない程度には濡れていた。

処女であれば挿れるこちらにも痛いのもう少し濡らしてから挿れるのだが、生憎非処女相手に、しかも意識の無い相手に其処まで丁寧にやってあげるつもりはない。

しかも、この後にはレイとのセックスが待っているのだ。

なるべくパパッとクリームとのセックスを済ませてレイとのセックスを楽しみたいところであった。

「んじゃあ挿れるぞ〜」

そう宣言をして自身の男性器を秘所の入口に添え、その折れそうな腰を両手でしっかりと掴んで腰を前に突き出した。

「お、おお!？」

一瞬感じた抵抗感、それに驚いて止める間もなくそのまま最深部まで突き進み、子宮に激突して止まる。

その膣は間違いなく名器であった。

初物特有の硬さも勿論あったのだが、そもそも膣全体が硬い。

ひだはゴムかと思ってしまうような弾力を有していて、入って来るなどばかりに男性器が通り過ぎる度にぐにぐにと亀頭、そしてカリや裏筋などの弱い部分を情け容赦なく抉っていく。

瞬間的に叩きつけられた強烈な快楽に思わず射精しそうになり反射的に抜こうとする。

だが、今度は逃がさないとばかりに硬めの膣がひだを固定し、挟られて弱くなっている部分をズリズリと引っ張る。

一瞬間が真っ白になって全身から力が抜けて倒れこみ、抜けかけていた男性器は再び膣の奥へと引き戻される。

そうして引き戻される時にも再び挟られる快感が走り、子宮口に激突する。

だが、こちらにも男としてのプライドがある。

初めての相手に三ズリ半で仕留められるというのは流石に不味いと思いい腰に力を入れて射精しそうになる男性器を引き留める。

だが其処にいままで大人しかかった子宮口がまるで赤子が大人の指を吸うかのようにちうちうと亀頭に吸い付いてきた。

(あー、こりや無理だ)

挿れれば扱られ抜けば擦られ、かといって突っ込んだまま回復を待てば子宮が吸い付いてくる。

息を吐く間もない連続攻撃に、我慢の限界が訪れて情けなくどくどくと射精し子宮の中に精液を注ぎ込む。

射精する、射精する、射精する……レイ相手ですら一回の射精で此処まで出した事はないというほどに精液を注ぎ込み、小さくなった男性器が拡張されて治らない腫からぬぽんと抜け出た。

意識が無くとも快感自体は感じているのか、びくびくと軽く体を痙攣させて息を荒げるクリーム。

その秘所からは子宮に入り損ねた血交じりのピンク色の精液がこぼこぼと垂れ、使っているのか不思議なくらい色が付いていない肛門を通り過ぎてベットのシートに垂れる。

その光景があまりにも扇情的で、萎えた男性器が即座に再び勃起するが今はそれどころではなかった。

(マジか、あの開発のされ具合で処女だったのか。つていうかここ2週間一切抜いてなかったからかなり溜まってたとはいえ、処女相手に三ズリ半って情けねえ……)

その驚愕の事実に関く呆然とした後、そういえばとタレントを発動した。

洗脳とは違うまた別のタレント。

そのタレントで見えたのはクリムの上に浮かぶ【友好度】26／100という文字。

その文字からケイ・セケ・コウクに支配されている時でもちやんとタレントが発動している事に安心感を覚えつつ、気を取り直して再びクリムの股の間に割り込む。

深紅の様な瞳は何かを我慢するかのよういきゅつと閉じられており、大理石の様な白い肌は紅潮し玉のような汗が浮かんでいる。

口は半開きで歪んでおり、その奥にある赤い小さな舌がこちらの情欲をそそる。

足を組んで胡坐を掻くと、クリームを抱き上げてそこに体面で座らせ

る。

横になった状態から縦の状態になったために重力に引かれて先ほどよりも勢いよく精液が零れ落ちてくる。

勃ちに勃った男性器をそうして落ちてくる精液ごと未だ開いたまま閉まらない膣に突き入れ、その唇に口を合わせ舌を入れる。

あれだけ強く抉ってきたゴムのようなひだは柔らかくなっており、そこまで力を入れて我慢する必要もなくキュウキュウと締め付けながら伸縮する膣の感触を楽しめる。

子宮口は亀頭に噛り付きたいのかもごもごと動いてはいるものの、男性器が余って入り切れていなかった先ほどとは違い、クリムの自重で深く突き刺さっているために吸い付く事が出来ていない。

突き上げる事が出来ないが故にゆさゆさと揺らしながら侵入させた舌でクリムの口内を味わう。

手持無沙汰になった手を胸に添えて小さな乳首をくりくりと弄る。

もはやまな板というか断崖絶壁といってもいい胸ではあるが、乳首を弄っていると奥にコリコリとした芯を感じる。

多分成長していればあのような胸パットに頼らずとも同じくらい巨乳になれただろうに吸血鬼となり不老となった所為で一生このままなのだろうなと少しの憐憫を覚えながらその感触を楽しむ。

そうして暫くキュウキュウと必死に締めつけてくる膣や口内を弄っていると偶に当たる八重歯。

コリコリしてはいるものの、弄っていたせいで少しほぐれてきている乳首を楽しんではいたのだが、どうにも盛り上がらない。

気持ちよくなるのだが、心が冷めて来ているというか……

一旦口を離し、クリームを観察する。

艶めく銀髪に吸い込まれるような深紅の瞳。

プルプルした唇にシミ一つ無い肌。

見た目は極上だ、恐らく世界でも10人と居ないレベルの美少女だろう。

吸血鬼ならではの八重歯による快感に、精液を搾り取るような心地よい締め付けの膣も持っている。

これ以上を望むのは強欲というものなのだが……何故か満足していない自分がいる。

なんでだろうなあと疑問に思いながらも取り敢えずパツパと出してしまおうと思ひ腰を掴んで下に向かつて押し付ける。

全て入り切り、どころか子宮に侵入しかけている筈の男性器を更に食い込ませた。

「あつ」

耳元で聞き覚えの無い声が聞こえた。

それと同時に冷めていた心が一気に興奮で燃え上がる。

これだ、これが足りなかったんだ。

その小さな鈴を転がしたような声で紡がれた喘ぎ声に十分に勃っていた筈の男性器がさらに強く勃起し、子宮口を割り開いて龟头が遂に子宮内に侵入する。

(そりゃそうだ、幾ら気持ちよくても人形を抱いて興奮なんかする訳ないもんな)

膝を崩し、乗せていたクリムをベットに横たわらせる。

放り出されたその細い両手を掴みゆつくりと、しかししっかりと奥まで入る様に体重を込めて何度も腰を振っていく。

幾度も子宮口をこじ開けては入り口まで戻り、再び体重を込め挿入していく。

そんな押しつぶされるようなゆつくりとしたセックスにクリムの体はどうやって呼吸をすればいいのか分からないのか、今までピクリとも動いていなかった顔が苦し気に歪む。

当然生きているものに、レイなどにこんなセックスをしたら呼吸が出来ずに酸欠で死んでしまうだろう。

だが吸血鬼であるクリムは違う。

アンデットであるため酸欠で意識は飛ぶがそれで死ぬ事はない。

とはいえ植物人間になる可能性はあるのでタレントで洗脳しパニツクに陥っている精神を沈めながら、時折止まって呼吸をさせる事でちゃんと安全は確保する。

「げほっ、こほっ、はっ、はあつ」

凜とした美しい声が俺とのセックスで濁る事に興奮しながらも、ギョウギョウ締め付けて伸縮する膣にそろそろ限界が近いなとスローセックスを止め、勢いよく腰を振っていく。

腰が尻に叩きつけられる度にパンッパンッという乾いた音が響き、唐突に慣れ始めていた挿入のタイミングをズラされた事でクリームが再び呼吸困難に陥る。

あれだけゴムの様に硬かったひだは最早時々コリツとした感触を感じる程度にまで柔らかくなっており、膣口からは白い愛液がぼたぼたと零れ落ちる。

締め付けてきていた膣の伸縮がどんどん早くなってきたことからクリームも絶頂が近いと察し、更にピストンを速めていく。

「んっ、ふっ、ふうっ！」

「そろそろ出すぞー！」

言ったとしても反応などしないというのに、いつもの癖で言ってしまった言葉に意識が無くとも本能で察したらしい。

さらに早まる伸縮に高ぶりが収まらなくなり、射精の瞬間に勢いよく突き込んだ。

「出るっー！」

「っあ……」

脆くなっていた子宮口を破り子宮内に直接精液を吐き出していく。

クリームはビクビクと体を震わせながら、びちゃびちゃと子宮内に吐き出されていく精液の感覚を味わうように目を細める。

そうして長い長い射精が終わると同時に目を瞑り、こてんと首を横に倒した。

少しして荒れた呼吸が戻るとクリームの秘所から男性器を抜き、その頬を撫でる。

タレントで見ても精神の乱れは完全に鎮火している。

恐らくは気絶したか眠ってしまったのだろう。

「ふうー」

「お疲れ」

「おーよ」

タオルとコップに入った水を差し出してくるレイにそう返し、タオルで顔の汗を拭いてコップの水を一気飲みする。

セックスをして乾いた喉を通っていく冷たい水が心地よい。

ある程度タオルで拭き終わるとレイがコップとタオルを回収し、置いてから再び戻ってくる。

「ありがとな」

「ううん。で、満足した?」

「うんにゃ?」

「え?」

呆けた表情をするレイの腕を掴み、ベットへと押し倒す。

「へ?」

「素敵なプレゼントありがとう。大変満足出来たよ。お礼にとつても気持ち良くしてあげよう。取り敢えず気絶は当然として、優しく、激しく、さっきやったスロー、どれがいい?」

そう言つてにっこり笑うと、レイは絶望したかのように頬を引き攣らせる。

大方クリームで射精して精液を吐き出しきれば激しくない甘々なラブラブセックスが出来るとでも踏んだんだろう。

だがレイは既に忘れてるようだ。

俺はお前と3日通して一度も休まずにセックスし続けた男だぞ?

「……余計な事したかしら」

法国出立の黄色い朝

「ふうー、さっぱりした」

体中に付着したクリームとレイの体液を備え付けのシャワーで落とすと新しい服に着替え、ベットに飛び込む。

この部屋にはベットが二つ存在し、一つは常用兼セックス用の天蓋ベット。

もう一つが天蓋ベットでセックスした時に使う予備ベットであり、今俺が寝ているのはこの予備ベットの方だ。

正直、こちらの予備ベットはあまり良い物ではなく―とは言っても、平民の5年分の生活費くらいはするのだが―其処まで使う事は無い。

基本的には天蓋ベットで寝ていて、なんならセックスして汚れた後の天蓋ベットのシーツ替えを自分で行ってまで天蓋ベットで寝る。

本来なら今もこちらのベットではなくシーツ替えをしてあちらの天蓋ベットで寝たいところではあるのだが、残念ながら今は使えない。

「あ、う……」

「すう、すう……」

絶頂に重なる絶頂で意識が天国に吹っ飛び、俺がシャワーを浴びて出てきても未だに体の痙攣が止まっていけないレイと天使のような寝顔を晒すクリームが占領しているからだ。

……なんだろう、二人とも裸で精液塗れなのは変わらないのにこの違い。

そんなレイも可愛いが。

「にしても、軽く散歩に出るだけで同類と出会えるモンなんだなあ」

そう、驚くべきはそこだ。

流石にクリムの様に従属神と遭遇なんて事は滅多に無いだろうが、俺の運が悪くて今まで出会えていなかっただけで意外と探せば居るものなのかもしれない。

最初にレイと出会った時の様に、実はすれ違っていたとしても気付

いていなかったという可能性もあるだろう。

同類を見つけたら保護、なんて事を考えている訳ではない。

既に俺みたくレイの様な大切な存在と出会えていたりする者もいるだろうし、秘境などに引き籠って関わってほしくない者だって存在するだろう。

そういう者達を含めて同類は皆保護するなど頭の湧いた事を言うつもりはない。

そう言っておきながらクリームは保護したじやないかって？ クリムの場合は単に洗脳されて放置していたら餓死していたから保護したに過ぎない。

これが洗脳されずに出会っていたのならば、多分最悪殺し合いに発展していただろう。

もしかしたら、これから会う同類はそういった殺し合いに発展するような物騒な奴しかいないかもしれない。

だが、それでも同類に会えるのならば会ってみたいと思うのだ。

しかし……

「この神都から出れないのが難点だよなあ」

別に外出全面禁止という訳ではない。

普通に外を出歩く事は許可されているし、城から出さえしなければ中庭でも図書館でも好きに過ごしてもらって構わないと言われている。

事実レイが部屋に来る前に読んでいた本は其処から持ってきたものだ。

まあ他の六色とはあまり関わるな、それと問題を起こすなどは言われているが。

そも軟禁と言っても、この部屋の中でなら自由にセックスでも何でもしてていいから、極力其処で閉じ籠って欲しいといったお願いに近い。

軟禁も、それに付随する条件という約束も最高神官長との口約束に過ぎないのだ。

破ったところで軽く眉を顰められるだけでとやかく言われる事も

ない筈だ。

しかし、恐らくこの部屋は二度と使えなくなるだろう。

俺が言うのもなんだが、この部屋はやり部屋としてはこの世界の中でも1、2を競う程高水準な物だと思っっている。

ぶつちやけてしまえば、この部屋を手放すのが惜しい。

手放したところで同類と確実に会えると決まった訳でもない。

そう考えると少し悩んでしまう。

そして、恐らくはそう考えている事を最高神官長も知っている。

この5年間一度も約束や刑罰、そしてこの部屋に関して何か言っ
こなかったということはそういうことだろう。

「……うし、行くか」

ぴよんつとベットから飛び降りるとレイとクリームに布団をかけて
部屋を出る。

目的地は城の最上階にある一室、最高神官長の部屋だ。

外は見えないが今までの傾向からしてレイがあ部屋に来る時間
は大体夜中、そこから数時間ほどセックスをしていたから今は多分早
朝の筈だ。

そのくらいの時間帯ならあの爺も起きてるだろう、なんせ爺だし
な。

階段を登りきりスレイン城一階に着くと、予想通り日が昇り始めて
いた。

それもだいぶ昇り切っている。

辺りを見渡せば忙しそうにメイドが走り回っていた。

その内の一人を呼び止める。

「悪い、地下一階の一番奥にある部屋のベットのシーツ替えといてく
んない？ 女が寝てっから起きてなかったらシーツ置いてくるだけ
でもいいよ」

「え？ あ、はい……」

そう言うときメイドは少しして顔を赤くする。

これだけで顔を赤くするほど何が起きたかを理解するとなると以
前に頼んだことがあるメイドかな？ 正直興味もない人間の顔なん

ていちいち覚えてないからよく分からん。

まあいいかとその場を去り、スレイン城の最上階を目指して歩く。

一度決めたのだし、パパッと話を済ませたい。

ぶつちやけちよつとでも躊躇うとあのヤリ部屋の魔力に負けそうになる。

「だからさ、そこ通してくんね？」

男なんだか女なんだがよく分からん顔をした人間、漆黑聖典第一席。

それが粗末な槍を携えこれ以上は進ませないと俺の前に立つ。

つていうか何あの槍、見てるだけで肌が粟立ってくるんですけど、壊しちやダメ？

「何処へ行くつもりだ」

「最高神官長室」

「目的は」

「あの部屋からの解放」

「……そうか」

立ち位置も体勢も変わらない。

しかしこちらを止めようとするかのような威圧が吹き荒れ、その中に一陣の殺気が混じる。

「で、通っても？」

「ああ……駄目だ」

大理石が砕けるほどの踏み込みと共に急接近してくる第一席。

恐らくは俺があつたヤリ部屋の誘惑を振り切って軟禁からの解放を望んだら止めるようにとでも言われていたのだろう。

けれどこいつでは俺を止められない事ぐらいはあの爺なら分かっている筈なのだが。

……ああ、そこでレイか。

けどあいつに俺に関する事を頼むのは悪手だと思っただがな。

事実そんなレイが連れてきたクリムの所為であつた部屋を捨てる決心が着いたんだし。

そんな思考に耽りながら振るわれる槍に手を添えて受け流す。

「今セックスしたばつかで気怠いんだけどー？」

途端、振られる槍に殺気以外の怒気が混じり、振られる槍の軌跡が第一席を包む光の玉の様に見える程に速度が上がる。

だがそれは技を捨てて振られるものだ。

となればこれほどあしらい易い物もない。

そう考えながらなぜ急にこいつが激高したのかを考える。

振るわれる槍に混じるのは殺気と怒気と……嫉妬？

「あー、お前レイ、番外席次に惚れてたのか？」

「何を、つぐ?!」

一瞬嵐の様な槍撃が止まる。

それは瞬き一つ無いほどの一瞬、それでも俺にとっては大きな隙だ。

がら空きの胴に向けて拳を振り抜く。

動揺していた第一席は踏ん張って耐える事も出来ず、受け身も頭からすっぽ抜けたのか無防備に攻撃を食らい並んでいる柱の一つに突っ込んでいく。

「そりゃ悪い事したな。お前がいつから番外席次に惚れてたのかは知らんが、今の彼奴は俺の女だ」

そもそも俺はレイの口から第一席の話題……というか、六色聖典の話題を聞いた事が無い。

偶に匂わせるくらいに話す事もあるが、ガッツリと話のネタにした事が無いのだ。

つまり、此奴は恐らく告白も何もせず、俺に抱かれに行くレイを止めることすらもせずにただ眺めていただけなのだろう。

せめてレイに告白していたり止めようとした事があったのならばレイを引っ張ってきて綺麗に振らせて終わらせるのだが、それもせずにただ八つ当たりをしてくるのならそれはもはや俺の知った事ではない。

「んじゃ、俺急いでっから」

「ッ、待て！」

「……はあ、なんだよもおー」

それなりに力を入れたから内臓にも少くないダメージがいつている筈なのだが、そんな事を気にした様子もなくふらふらと立ち上がる第一席に少しイライラしてくる。

「この先には進ませない」

「俺がこの城にいる限り番外席次はあの部屋に通い続けるぞ」

「だからといってお前を外に出せば彼女はそれに着いて行ってしまう」

「そんなに執着すんならさつさと告白でもしろよ。それにあいつが領くなら別にそれはそれでいい」

ただし、1年ぐらい寝込んで洗脳を解く事も無くクリームとヤケセツクスでもするだろうけどな！

「番外席次は私の憧れなのだ！ 彼女にそのような感情を向けるなど……」

「だったらさつさと諦めて其処を通せよ、うじうじうじとうざつてえ男だな！」

俺は恋愛相談所じゃねえんだぞこの野郎。

もういいよね？ 我慢しなくてもいいんだよね？ もうぶん殴つて押し通るよ？

「もうお前さつさと寝とけ」

つま足で大理石の床を蹴り、一步で第一席の横まで移動する。

気付いた第一席が槍を振るものの、槍とは中距離で突いたり払ったりして使う物だ。

この超至近距離で振るつたとしても通常の半分の威力も出はしない。

槍を持つ手を押さえ、その綺麗な顔を吹き飛ばす。

ゴオンという大砲の発射音のような轟音を立てながら吹き飛んだ第一席はそのまま壁にめり込み動かなくなった。

死なない程度に手加減はしたし生きてはいるだろう、死んだら死んだでその時だ。

この事を弱みにされそうになったら問答無用で逃げ出せばいい。全力で逃げ出す俺を止められるのはせいぜいレイくらいだ。

そのレイがこちら側となると止められる者などいないだろう。

「今レイは俺の部屋で寝てる、俺が戻ってくるまでにまだ何もしてなかったら、もう俺は知らん」

聞こえているかどうかも定かではないが、そう言っただけで俺はその場を立ち去った。

のそのそと立ち上がり、肩に着いた瓦礫や埃等を払って国宝である槍を拾うとゆつくりと歩き出す。

向かう先はスレイン城地下一階、その最奥の部屋。

すれ違うメイド達がみな驚き、その男が階段の奥に消えていくのを見送った。

スレイン城地下一階は非常に重要な施設が集まった場所だ。

転移管理室、宝物庫、そして一番重要な神の遺産の管理室。

殆ど知られてはいないが、地核聖典とはそういった地下にある重要施設を守る役割を持っている。

地下の構造は単純で、地下に降りて向かって右側に転移管理室があり、左側に宝物庫がある。

そしてその奥に現在唯一の地核聖典であるリビドー・ブレインの住む部屋が存在し、その部屋の更に奥に神の遺産が保管されている部屋がある。

彼に課せられた刑罰である軟禁とは名ばかりだ、彼に本来の仕事をさせているだけなのだから。

唯一の問題とも言えるのは休みが無いという一点だが、そこは好きに女を連れ込んでいいという契約で双方納得していた。

其処まで攻め込んでこれるような者がそもそも存在しないから仕事をしなくてもいいというのもあったのだろうが。

とはいえ彼は非常に選民思考が強く気紛れであるため、やっぱ止めるたと言っただけで仕事を放り投げる可能性がある。

だからそのストッパーとして最高神官長が番外席次と漆黒聖典第一席にもしも彼が逃げ出そうとしたらそれを止めるようにとお願ひしていたのだが……

扉の前に立つ。

彼の言う通りではここで彼女が、番外席次が眠っているらしい。

彼女を起こさない様に、ゆつくりと扉を開ける。

大体20畳ほどの大きさの部屋、その一角に置かれている天蓋ベツト。

そこで二人の天使が眠っていた。

つむじ部分で白と黒に別れた髪、幼くも大人の様に凜とした顔。

自身が想いを寄せる、何時もであれば他人を揶揄うような艶やかな目を見せる彼女がその目を閉じ、うつ伏せで寝ている。

その隣では滑らかな銀髪に幼い顔をしたまだ子供であろう美少女が猫の様に丸くなり、親指を吸いながら眠っていた。

二人の絶世と付けても誰も文句を言わないであろう美少女達の体には白い液体が所々附着しており、その幼い容姿からは想像もつかないような卑猥な事をされたのだろうとこちらに妄想させる。

布団に覆われていて二人とも肩から下は見えないが、それを退かせばどれだけの美しい花蘭が現れるというのだろう。

思わずごくりと息を呑んだ。

今ここで服を脱ぎ、眠っている彼女達の花卉を貫き自分の物とすればどれだけの快樂が得られるというのか。

ゆつくり、ゆつくりと彼女に手を伸ばし。

「んう、りび……どお……」

ぴたりと止まる。

眩かれた番外席次の寝言、その言葉で何故自分が今此処にいるのかを思い出す。

今自分は何をしようとした？ 憧れの彼女の裸体、それを見て自分は何をしようとしていた？

自分は彼女に告白を、出て行かないでくれと、俺と一緒にいてくれと言いに来たのではなかったのか？

欲に負けそうになった自分に嫌悪感が湧く。

だってそれは彼女への憧れが、恋慕が下賤な性欲に負けたという事ではないか。

くるりと踵を返し、音を立てない様に静かに部屋を出ていく。

自分に彼女へ告白する勇気どころか、資格さえも無かったのだと気付いて。

薄く開かれた赤と白の一对の瞳が、じつとそんな背中を見つめていた。

暫く歩いているとはつと気付いた。

(あ、やべえ。レイもクリームも裸じゃん)

まあ洗脳されて意識の無いクリームは兎も角、レイならば大丈夫だろう。

襲われそうになっても、彼女ならば簡単に撃退出来る筈だ。

出来なかつたらその時はその時だ、レイの力への信頼を一段下げた後に第一席を塵にすればいい。

正直老体には厳しいと思う長さの階段を上る。

まああの爺は《飛行／フライ》を使うから階段などあつて無いようなものなのだろうが。

最上階へ着くと同時に奥の方にある部屋の扉が自動で勝手に開く。どうやら監視されていたらしい。という事は俺の目的は理解しているという事なのだろう。

扉を潜り部屋に入ると再び扉が勝手に閉まる。

部屋の中では爺が紅茶を入れて歓迎の準備をしていた。

「うむ。まあ座りなさい」

「……おい、俺の目的は」

「よいから、ひとまず座りなさい」

「……」

これだ。

少し接すると分かるのだが、兎に角この爺は自分の意思を曲げない。

狂信者たるもの簡単に自分の意思を曲げてはならないとも言いたいのだろうか。

恐らく俺の話の先に聞け、でなければ殺すと武器を喉元に突き付けられてもこの爺は壊れた魔道具の様にひたすら着座を勧めてくるだろう。

この段階でそんな無駄な反抗をしても意味など無い、大人しく勧められるがままに置かれたソファに座る。

「うむ、確か君の好みはこれだったかな」

そう言っ出てされるイチゴ、それに思わず手を伸ばしそうになり止める。

かつて六大神が遺した無数のアイテムや知識。

このイチゴという果物はそのアイテムと知識をもって栽培された貴重なものだ。

買うとなれば10粒の一セットで金貨を5枚は出さなければならぬ。

なお平民であれば金貨3枚で一年を過ごす事が出来るため、事実上たった10粒の果実と平民の一年半が等価という計算になる。

俺はこの高級果実であるイチゴが好物であり、地下に軟禁される前はよく狂ったように買い漁り干しておやつとして持ち歩いてきた。

軟禁されている間は全然手に入れることが出来ずよく禁断症状も起こしかけたし、それとなくレイに入手出来ないか聞いてみたりしたこともある。

しかしそれを爺に言った事は無いはずだ。

「番外席次が言っていたよ、よく分からないが君はイチゴとかいう食べ物が好きらしいと」

なんというか、俺の情報が凄く漏れているような気がする。

しかも主にレイによる俺のどうでもいい情報が。

ってそんな事はどうでもいい。イチゴを一粒摘まみながら話を戻

す。

「監視してたなら分かっているだろうが、俺は神都を出てくぞ」

「うむ、じやろうな」

「多分それにレイ、番外席次も付いてくる」

「ふむ」

「……止めねえのか？」

「止めんよ。止めようとしても止められんだろうしな」

「なんだか拍子抜けする。」

俺がいなくなつたところで多少困る程度で済むだろうが、それに加えてレイがいなくなればそれは一大事と化す筈だ。

止めようとしても止められないのも事実、とはいえそれを加味しても疑問に思う。

何故この爺はこんなに冷静でいられている？

「なんか企んでんのか」

「企んでいるという程の事ではない。以前からこうなるだろうなと思っておっただけだ」

「……俺と番外席次が抜けた穴はどうする。俺とレイは法国の最大戦力だ。それが同時に抜けるってのは問題になる筈だ。それと番外席次の外出禁止令もあつたら」

「うむ、それに関しては考えがある」

「そう言う爺はおもむろに立ち上がり、何か魔道具を三つ持つてくる。」

「これは好きな時にこれを持っている相手と《伝言／メッセージ》が出るという魔道具だ」

「つまりなんだ、それでアンタが呼び出した時は、いついかなる状況であつても応えろつて事か」

「そうだ。まあそのような事態など滅多に起こらんだろうがな」

何かあれば魔道具を通して《伝言／メッセージ》が飛んできて、その時何をしていようが最優先でそれに応え依頼された事を達成しなければならぬ。

最大戦力が二人同時に抜けるための条件としてはかなり緩い方だ

ろう。

だが、だからこそ怪しい。

「で、他には？」

「番外席次の神都外での過剰な戦闘行為を禁止する。評議国の
ブラチナム・ドラゴンロード
白金の竜王に番外席次の存在が知られるのは不味いでな」

「その過剰の範囲は」

「第四位階以上の魔法の使用禁止、タレントの使用禁止だ。それに加えて探知阻害以外の宝具の持ち出し禁止、以上だ」

「意外と緩いのな」

「本来なら戦闘行為自体してほしくないんだが、そこまで縛っては逆に暴れだしてしまうだろう」

よく分かっているな。

「で、他には？ まだあるんだろ？」

「……うむ、出来ればいいのじやがな、抜けてしまった漆黑聖典第九席の補充とカイレの代わりとなるケイ・セケ・コウクを扱える人物を探ってきてほしい」

「あん？ カイレのババアは兎も角漆黑聖典なら死んでも蘇生出来るだろ？ それとも蘇生も出来ないほど吸血鬼に跡形もなく消し飛ばされたのか？」

「ふむ、脱走していた番外席次にでも聞いたか？ まあいい。第九席「疾風走破」は「えいじやのがつかん勳者の額冠」を強奪したのちに逃走、現在は風花聖典がその排除に向かっている。吸血鬼によって殺された者の蘇生は出来ておるよ」

レイめ、思いつきり脱走した事に気付かれてんじゃねえか。

流石に正面玄関から堂々と出て行ったって事はないだろうし、探知阻害の宝具を着てた事からして城を抜け出す時に姿を見られてたんだらう。

この調子だとクリムの存在も気付かれてると思った方がいいか。

「第九席の排除を俺に依頼はしないのな」

「確かに優先的にやってほしい事柄ではあるが、別に最優先というほどでもないからの。あれでも元漆黒聖典、風花聖典に追われている時

に派手に暴れて自身の存在を晒すような真似はせんだろう」

話は終わったとばかりに息を吐き、背凭れに背中を預ける爺。

ここで話を中断させるような事をするって事は条件はこれで終わりなのだろう、ならばもう爺に用はない。

最後のイチゴを摘まみながら立ち上がる。

「ああ、それと」

扉に手を掛けた瞬間、小さく呟く爺。

まだなんかあんのかと思いつつも振り返る。

「おぬしの部屋にいる吸血鬼、その血と爪が欲しい。何かの役に立つかもしれないからの」

その言葉を受けてやっぱり気づいてたかと思ひ、何故そんな大事な事を条件に含めないのかと疑問に思う。

「置いてけ、とは言わねえのな」

「あの部屋に連れ込んだ女は好きにしているいいと言ったのは儂だからな。その約束を破ったりはせんよ」

「俺はその約束を破り外に出ようとしているが？」

「はて？ おぬしは儂に依頼されてそれを遂行しようとしているだけだろう？ ついでに、今まで閉じ籠っていた分少しは旅を堪能してきても構わんよ」

つまり、この爺はこう言っているのだ。

こちらの依頼さえこなせば、レイもクリームも関係しないから好きにしているいいし、問題さえ起こさなければ好きだけ外を堪能してきてもいい。

あのヤリ部屋はそのままにしておくからこちらから呼んだり満足したら戻って来いと。

「……………クリムの血と爪は部屋に置いとく」

返事を聞かずにそのまま扉を開けて部屋を出る。

「くえねえ爺だ」

ビーストマンとポンコツ姫

「よし、それじゃあ点呼を取るぞ！ レイ！」

「ふぁ……ふ」

「よし、クリム！」

「……………」

「全員揃ってるな！ よし、行くぞ！」

「ちよつと待ちなさい」

意気揚々と歩き出そうとする俺の首根っこを掴んで止めるレイ。

その首からは例の条件の一つである魔道具がアクセサリーの様にぶら下がっている。

「起きたら突然旅に出るぞ、準備しろなんて言われたのはもういいわ。宝具も探知阻害以外の物は持つていけないというのもまあ良いでしょう。けどせめてどこに行くかくらいは教えて頂戴」

目をくしくしと猫の様にこすりながらため息を吐き、そう呟くレイ。

先ほどの点呼の時にもあくびをしていたしとても眠そうだ。

「それなんだがな、まずは俺も知ってる所に行こうと思う」

「知ってる所？」

「おう、竜王国だ」

五年前法国へ来る前にいた国であり、ぶっちゃけ行きたくない所でもある。

「竜王国って、あのビーストマンの国？」

「俺が五年前に結構ビーストマン減らしたし今頃はちゃんと人間の国だと思うがな」

「ふーん。で、何しに行くの？」

「冒険者登録をしに行くんだ。正直無くてもいいが、冒険者プレートは結構便利だからな。それを取りに行く」

法国に行く前はオリハルコン級冒険者として活動していたのだが、俺は法国に行くと言ってから五年もの間一度も冒険者として活動をしていないため恐らく俺は既に死んでいるものとして扱われている

筈だ。

プレートも気付けば何処かへと無くしていたため、それで証明する事も出来ない。

だから本来なら銅級カッパからやり直す事になるのだが、そんな面倒な事はしたくない。

そこで竜王国が出てくる。

あそこの国の女王とは顔見知りであるため、顔を出しに行けばプレートを再発行してくれる筈だ。

あの女王の事だから何か条件を付けてくるだろうが、あのポンコツの事だから其処まで面倒な事にはならないだろう。

「んじゃ、行くぞ」

「はいはい。ほら、行くよクリーム」

「という訳で着きました竜王国！」

んで今私にはとつても言いたい事が一つあります！

「このビーストマンの量はなんじゃああああ!? ふざけるなあああああ!!?」

叫びと共に振り抜かれた怒りの鉄拳で一度にビーストマンが三体吹き飛ばす。

「あのポンコツ姫は一体この五年間なにしてたんだオイ!? 明らかに五年前より増えてるじゃねえかああああ!!?」

「うるさいわねえ、どうせそのポンコツ姫とやらがなんかやらかした以外にないでしょう」

「……………」

そう言つて手に持ったミスリル製の剣でビーストマンを二つに分けるレイ。

その奥では立ち尽くしたまま襲ってくるビーストマンだけを殴り飛ばしているクリムの姿が見えた。

「チイツ、キリがねえ、魔法で一気に吹き飛ばして突っ切るぞ！」

「……ま、賛成しておくわ」

「うーし、《魔法効果二重拡大最強化》^{ツインワイデンマキシマイズ} かくらくのおく《エレクトロ・スフィア／電撃球》ア！」

宙に浮かせた一つのボール、それが魔法強化魔法を唱える度に二つに増えた後に大きくなり、ビジジと音を立てて稲妻を迸らせる。

それを行けと押し出せば、視界を埋め尽くしそうなほどのビーストマンの群れを呑み込みながらどんどん大きくなっていき、二つの巨大なドームを作り出す。

暫くその場に留まり続けた二つのドームが消えると、其処には塵一つ無い抉れた地面のみが残っていた。

呑み込み切れなかったビーストマン達はその威力に怖気づいたのか、遠くでこちらを眺めたまま動こうとしない。

「うし、行くぞ！」

クリムを抱きしめ、敵がない隙間を通って走る。

襲われそうになっては魔法を撃つことを繰り返す事数回繰り返すと、遠目に町を囲う壁が見える。

其処には大量のビーストマンが群がっており、這い上がろうとするビーストマンを衛兵や冒険者達が必死に突き落としている姿が見えた。

このまま走っても門からは入れそうにない……となると。

横を走るレイをクリムと同様に抱きしめる。

「《フライ／飛行》、レイ！ 何でもいいからあのゴミ山に魔法を落としまくれ！」

「はいはい、《魔法効果二重拡大最強化》^{ツインワイデンマキシマイズ} 《ファイアーボール／火球》
《ファイアーボール／火球》《ファイアーボール／火球》」

空から落とされるレイの爆撃は群がるビーストマン達を次々吹き飛ばしていく、が数が数であるために減らしても減らしても補充されていく。

だが一瞬でも十分だ。

登ろうとしていたビーストマン達が消えて安全になった歩廊へと着地し、抱き抱えていた二人を置いて振り返る。

「トリプレットワイデンデイステンジングマキシマイズ《魔法効果三重拡大延長最強化》《ドラゴン・ライトニング／龍雷》、そ
おら消し飛べエツ!!」

発生した先ほどと同じ雷で出来たボールを宙に放り投げ、上がった手を振り下ろす。

すると振り下ろされた腕と連結するかのように宙に浮かぶボールが形を変え三匹の龍となりビーストマンへと降り注ぐ。

それを指揮する様に腕を振れば、まるで意思があるかのよう三匹の龍が進行方向を変え、落雷から逃れたビーストマン達を逃がしはしないとばかりに追っていき消し飛ばしていく。

それが収まる頃には群がっていたビーストマンの大半が消滅しており、異変に気付いたビーストマン達が距離を取ってこちらの様子を伺っていた。

「んく、久々だからかちよつと弱いな」

大半は消滅させられた、しかし大半しか消滅させられていない。

五年前の俺なら一匹残らず消滅させた上でまだ魔法がこの場に留まっていただろう。

「まあいい、これで暫くは攻めて来ねえだろ」

振り返ればこれ以上ないほど驚いていると出張している顔で衛兵や冒険者達がこちらを見ていた。

取り敢えずそちらは無視し、胡坐を搔いて俺を恍惚とした顔で見ているレイと放り出されたままべちよーつと床に突っ伏しているクリムに手を貸して立たせる。

すると俺に向いていた視線がそちらに向き、二人の美貌に見惚れる。

おうおう俺の女達は美しいか、美しいだろうなあ、けど今それどころじゃないと思うんですけど？ パンパンと手を叩き視線をもう一度俺に集める。

「おう、取り敢えずドラウディロン出せ、ちよつと聞きたい事がある」

竜王国王城、その執務室にて豪華なドレスを着た幼女がFXで金を融かした様な顔をしてソファの一部と化していた。

その傍では宰相がパパッと書類仕事を終わらせて寛いでいる。

「なあ……」

「なんですか」

力の無い腑抜けた声。

それに宰相は何時ものやつかと女王、ドラウディロン・オーリウクルスの癩癩に備える。

「私、もうこんなヒラヒラした体が透けて見えそうな服着たくないじゃが」

「仕方ないでしょう、あのアダマントイト級冒険者が貴女のその恰好をぐっ所望なのですから」

「それが嫌じゃと言うとるんじゃ！ 分かるかおぬし!? あ奴の獲物を見るような視線が！ 割とマジで喰われると思うのじゃぞ!? 仮にも竜王のこのワシが！」

竜王国に攻め入るビーストマン、その数約30万。

因みにビーストマンという種族自体が人間の10倍近くの力を持っているため、対抗するには単純計算で約300万の兵が必要となる。

当然ながら竜王国にそんな兵力は無い。

戦う力の無い女子供まで含めて全て掻き集めたとして100万の大台に届くかどうかといったところか。

そんな命を投げ捨てる為にあるような戦いに参戦しようとするような奇特な存在など殆ど居らず、そんな中戦ってくれる力を持つ者となることも貴重であり生命線の一つでもあった。

ただし

「ロリコンですからね、あの人」

「それ以外はよい！ だがそれが全てを台無しにしておる！」

「顔はいいですし力もあるでしょう。彼の何が嫌だというのですか？」

「私を喰い物にしようとするその考えじゃ！ 本来の私はもつとこ

う、ないすばでえなのじゃぞ!? それをこんな私の子供の頃の姿をあらんな背筋が凍りそうな目で見てきおつて!」

「いいじゃないですか、今のところは見るだけで満足されておられるようですし」

「今のところはな!? あ奴の目を見てみる! どっからどう見ても性犯罪者一歩手前の奴の目じゃぞ!」

「それは賛同しますがね」

酷い言われようだが事実である。

現在竜王国ただ一人の最高位であるアダマンタイト級冒険者のセラブレイト、その正体はロリコンを拗らせたペドフィリアである。

因みに今現在彼はビーストマンを殲滅してくれば結婚してもいいというドラウデイロンの知らない内に結ばれ、そして今現在も知らない契約の元にドラウデイロンと結ばれることを夢見てビーストマンを狩っている真つ最中である。

「まあ悪い相手ではないでしょう。むしろ今すぐ結婚してやるから緊張れくらい言えばすぐにも突撃してくれるのでは?」

「私の貞操と引き換えにな! もう変装を解いて本来の姿でも見せてやろうか!」

「お止め下さい、陛下が保護欲を刺激される形態だからこそ、皆は頑張ってくれるのですから」

「形態言うな! ええい、この国にはロリコンしかおらんのか!」

ぶっちゃけてしまえばいい事もない。

ただしロリコンとの比率は絶望的な9・8:0・2だが。

だが待つてほしい、別に最初の頃からこうだった訳ではないのだ。

むしろ最初の頃はロリコンとの比率は半分程度で済んでいた。

それがこのようになってしまった事にはちゃんと原因がある。

その原因がこれだ。

『うう、本当に言うのか?』

『ええ、私の計算が正しければこれで今現在竜王国にいる者は皆陛下のために動いてくれます』

『ぐぬぬ、もしも駄目だった場合は覚えていろよ?』

『みんな！ いまりゆうおうこくはびーすとまんのせいできけんなことになってるの！ ほんとうはわたしひとりでどうにかしたいんだけど……ごめんなさい、わたしがちからぶそくだから……だから、みんなにもてつだってほしいの！』

『……おねがい？』

堕ちた。

艶めいた金髪を靡かせる自分たちの子供程度の年齢しかないであろう女王。

そんな彼女が顔を赤くして断られるかもしれない、国が滅ぶかもしれない恐怖に震える。

それでも逃げる事なく国を案じ、自身達を案ずるがためのおねだりをする。

そんな彼女の懇願に耐えられる者は誰一人として竜王国には存在しなかった。

今現在竜王国に居ながらロリコンでない者は依頼などで訪れた冒険者や商人などの外部からの来訪者だけであり、それすらも少しずつ竜王国の住民達による布教により駆逐されつつある。

非ロリコンが一匹残らず駆逐される日は近い。

「それよりもよいのですか、そろそろ彼が来る時間ですよ」

「ああ……今日も来てしまうのか。憂鬱じゃ」

ため息を吐き、気怠げに立ち上がる。

そんな姿を見て宰相はぼつりと呟いた。

「彼は」

「ん？」

「五年ほど前でしたか、突然現れ瞬く間にビーストマンを壊滅せしめた男。彼はいかがです？」

「ああ、奴か。だが奴にはこの変装は通じんと思うがな。ロリモードで迫ったらとんでもなく冷たい目で見られた事は未だに時たま思い出すわ。あ奴め、仮にも見た目幼女にあんな目向けるかフツ」

「おや？ あの時は特に何か言った覚えはないのですが、もしやご自分から行かれたので？」

「……まあ、番いとしても悪くはない男だったしな。だが最近は全くその名を聞かん。あれほどの男が有名にならん筈もなし、今頃は空に旅立っておるじやろう」

正直人格や人間としてどうかを見れば最低も最低のクソ野郎であつたとは思うが、自身に流れる竜の血ゆえかやたらとドキドキとさせられた男の事を思い出し、少し哀愁に耽る。

そこにコンコンと叩かれた扉。

入室を許可すればキィッと音を立て、部屋の扉が開けられた。

視線を向ければ其処には内政官が立っており、此方に向けて礼をする。

この男は、というか内政官などの城に務める者はほぼ例外なくドラウディロンの素を知っているロリコンであるためソファでべちりと溶けているドラウディロンを見ても特に反応する事は無く、むしろ微笑ましげに見ていた。

「失礼いたします。セラブレイト様御一行がいらつしやいました」

「そら、来たぞ。既にいない男の話をしてもしようがない。さつさと迎えてさつさと帰すぞ」

「いえ、少々お待ちを」

「なんだ？」

「いえ、今御一行と……」

「何？ そんな馬鹿な、もしやあれクラスのロリコンが更に増えるのか？ 終いにや私ボーイコットするぞ？」

宰相の疑問の声に上げかけていた腰が止まり、勘弁してくれという思いと共に再びぺたんとしてソファに座り込んだ。

柔らかいソファがふにふにとその小さな尻を包む。

「あー、セラブレイト以外には誰が来とるんじや」

「名前は不明ですが、とても美しい容姿をした少女二人を連れて男の計3名です」

「あーあかん、ロリコンじや。しかも自分のものにした幼女をどこに

でも連れ歩いて見せびらかすタイプのヤバいロリコンじゃ。私が行ったら即座にマツパにされた上で美味しく頂かれるわ。という訳でご丁重にお帰り願え。渋るようなら適当に私の絵でも包ませればええじやろ」

「おや、良いのですかな？」

「現実の私が穢されるのに比べれば虚像の私がどれだけ穢されようと構わんわい。なんかもう、今ロリコンの相手をしたら崩壊するぞ、主に私の何が？」

そう言つて頭を抱え、なんとか追い返してくれと手をひらひらと振るドラウディロン。

その耳にカツカツという大理石を叩く音と何かをズルズルと引き摺る様な音が届けられる。

「ぬ、もしや既に此処に向かつておるのか？」

「え、いえ、そんな筈は……」

「何やら近付いてくる足音が聞こえるが。というかなんかこの状況にデジャブを覚えるんじゃないか？」

そう、確か五年前もこうしてロリコン達により胃へのダメージを負いながら頭を抱えていた時に、ビーストマンの死体を引き摺って許可も無くこの執務室まで辿り着き、その扉を蹴り破った男がいた。

カツカツと響く足音が内政官と宰相の耳にも届くようになった頃、その足音がふと止まる。

思わず息が止まる。

何が来ようとしているのか、なぜ止まったのか、そんな疑問が止まらない。

それから少ししてカツツという一つの音が響き、再び歩き始めたかと気を引き締め、

ドゴオオオンという轟音と共に扉が吹き飛び壁に叩きつけられた。衝撃波で髪がふわりと靡く。

突然鳴り響いた轟音と計100kgはありそうな扉が軽々と吹き飛んだ事に思わず頬がヒクヒクと痙攣する。

ゆつくりと吹き飛んだ扉へと視線を向ければ、此処に居る者皆が知

るドラウデイロンの胃を痛めるためだけに存在する《幼女崇拜》というタレントを持つ男、セラブレイトが倒れていた。

よく見ればその頬はあれ、ブルーマンかな？ という疑問を持ちたくなるほど青く膨れ上がっていた。

「ドおラあウデイロおおオン……」

まるで深淵からの呼び声、死の宣告。

本能が言っている。そちらを見るなど。

それに従い意地でも入口には目を向けない。

そんなドラウデイロンの必死の現実逃避も空しくガシツと頭を掴まれる。

部屋にいる二人にさりげなく視線を向けて助けを求めてみれば、二人とも顔を逸らし下手ツクソな口笛を吹いていた。

(お、覚えておれよお主らあああ!!?)

掴まれた頭を起点にして持ち上げられ、反転させられる。

最早どうしようもないと諦め、自身の頭を掴む不届き者に視線を向けて睨みつける。

突然こんな事をして何のつもりじゃ、そつ首刎ねられる覚悟は出来ておろうなと言おうとして。

「ちよつとお話シマシヨ？ ドラウデイロンサン」

「すみませんでした殺さないでください」

そこにあった般若のような顔に白旗を上げた。

亜人軍と人の戦争

膝を曲げて太ももの下に畳み、床に直接座って震えているドラウ
デイロンを仁王立ちで見下ろす。

「別にね？ こんな事をしたくない訳じゃないんだよ。最初は観光でもし
ながら、お前に軽く声掛けにでも行こうと思ってたんだ」

「はい」

「でもね、流石にちよつとこれは無いんじゃないかなって思うわけで
すよ。なんだあのビーストマンの量。そこんトコどうなんだオイ」

「はい、すみませんでした」

「五年前、20万位いたよなビーストマン。で俺が頑張って大体1〜
2万くらいまで減らしたよな？ それでお前言ったよな？ ここか
らは自分達でも頑張れるって」

「はい、そうですね」

「で、俺はその言葉を信用したわけだよ。今度竜王国に来たときはよ
く頑張ったなって頭でも撫でてやろうかと思ってたんだ。これでも
少しは期待してたんだぜ俺？」

「ありがとうございます」

「それがなんで約30万近くにまで増えてんのか俺に懇切丁寧に説明
してくれませんかねえ!? ありがとうございますじゃねえだろこの
ポンコツ姫エー!!」

「びびびびびび!?!」

視点が合うように屈み、鼻がくっ付きそうな程に顔を近付け柔らか
い頬を掴んでムニムニと弄る。

おー、伸びる伸びる。

まあ実際そこまで怒っている訳でもない。

軽くイラつきはしたものの、ビーストマン程度なら適当に魔法を
撃つてればそれで十分なのだ。

30万という数は確かに脅威ではあるが、俺一人でも掛かって1カ
月、短くて1〜2週間で殲滅出来る。

今なんかレイは全力を出せないが、それでも従属神であるクリムが

いるし4日もあれば簡単に殲滅出来るだろう。

だから重要なのは其処ではなく、何故こんな事になったのかだ。いくらこのポンコツ姫とて簡単にここまでの増殖を許すほど愚かではない筈だ。

となれば別に原因がある。

それを考慮せずに殲滅してもまた同じ事になるだけだ。

最悪更に数が増えるかもしれない、そうすれば竜王国は終わる。

パツと手を離して立ち上がり、涙目で頬を摩っているドラウディロンを見下ろす。

「まあ、おふぎけはここまでにしてだ。なんでこんな事になった？」

「うう……実はだな」

そう言つて立ち上がるとソファのマットをひっくり返して手を突っ込み、少しごそごそと漁ると手を抜いて再び元に戻すドラウディロン。

何をしているのかと思えば、んつと言つて手を伸ばしてきた。

困惑しながらもその手の下に手を伸ばせば、ころんと何かを落とす。

見てみればそれはどうやら指輪の様だ。

豪華な猫の装飾がされており、その上になにやら文字が刻まれているが読むことが出来ない。

だがこんな感じの文字をレイと法国の宝物庫で成金ごっこをしている時に見た事がある。

……となるとこれは。

「ふれいやーの遺産か。何でこんな物をお前が持つてるんだ？」

「五年前お主がいなくなった後に少しずつ反撃していついたのだがな、途中でとある廃墟を見つけたのだ」

「廃墟？ そんなものあつたか？」

「ああ。といっても竜王国の領土というよりはビーストマン共の領土に半分足を突っ込んでくるくらいの位置にあつたからな。私から離れすぎるのは不味いと深追いしなかつたお主が知らんのは当然だ」

離れすぎるのは不味いから深追いしなかつたというか、あの時は

駄々を捏ねる幼い子供がごとく離れなしてくれとドラウデイロンが
縋り付いてきたんじやなかったか？

「で、その廃墟がどうした」

「うむ、廃墟へと入っていくビーストマンを追いかけていったらしい
のだがな、其処にいたのは先端がふわふわと膨らんだ植物を持つ銀色
の体毛をした通常のものより3倍はあろうかという大ききのビース
トマンだったらしい」

「で、そいつらは壊滅したと」

「うむ。命辛々生き残った者が言うにはその巨大なビーストマンが棒
を揺らすと際限なくビーストマンが湧き出てきたらしい。これは不
味いと慌てて逃げ出したものの生き残れたのはそ奴一人、その指輪は
そ奴がなんとか拾ってきたものだ」

「そいつ、よく生き延びれたな」

「今そこで伸びておるがな」

チラツと俺がぶん投げた男を見た後、此方を責めるような目で見る
ドラウデイロン。

だが知らん。

どうでもいいと言っているのに構わずひたすらドラウデイロンの
魅力語り続けるロリコンなんざ死ねばいい。

……まあその割にクリムに視線の一つも向けない所には少し好感
を覚えたが。

まあそれは今はいいだろう。

「ぶれいやーの遺産が取れる廃墟、ね」

多分その廃墟はぶれいやーの名残だろうな。

生きているのか死んでるのかは知らんがそのぶれいやーの物を
ビーストマンが使ってるってところか。

それとついでに分かった事もある。

召喚したのか呼び出したのか創造したのか、そこまでは今の所分か
らないがビーストマンを出せる数には限りがあるという事だ。

でなければあのロリコンは死んでるだろうし、既にこの国はビース
トマンのものとなっている筈だ。

とはいえ、逆に言えばその上限に届かない限り無限に召喚できるといふ事であろう。

となれば五年前みたいにこの王都に籠って戦っていても倒した傍から湧き続けるためキリが無いだろう。

正直もうちよつと情報が欲しい所だが……まあぶれいやーの遺産を使うとは言っても所詮はビーストマンだ、ここまで分かってれば十分だろう。

手に持った指輪を投げ返し、くるりと振り返って部屋の出口へと向かう。

「んじや、行ってくるわ」

「え、何処に？」

「その廃墟」

「はあ!？」

歩みを止め、半身になって振り返ればお前は馬鹿かとも言いたそうな視線を向けてくるドラウディロンが見える。

「お主は馬鹿か!？」

「お、当たってた」

「何がじゃ！ お主一人で行くつもりか!? 確かに今この竜王国は危機にある。だがだからといってそれを解決するためにお主を犠牲にするつもりなどない！」

「あんな雑魚共相手に死にやしねえよ」

「そんな言葉は聞き飽きたわ！ 戦いに出向く者達は何時私にそう言って笑う！ 大丈夫だ安心しろ必ず帰ってくる婚約者が待ってる！ 皆そう言って帰ってこない！ 私は、もう……もう私の国民が、知りあつた者が返ってこないのは嫌だッ！」

血を吐くような声、と言えはいいのか。

そんな声で叫ぶドラウディロンに思わず肩の力が抜け笑みが零れる。

半身になっていた体を直し、ドラウディロンへと近寄る。

「……泣くなよドラウディロン」

「うっさいわい、泣いてなどおらんわ」

その小さな頭に手を乗せて優しく撫でる。

「そっか、泣いてないもんな。女王様がそんな簡単に泣く事なんてあるわけないもんな」

「ぐぬぬ……きつきから思っておったのだがお主、なんかやけに優しいのう。五年前のあの冷たい目はなんじや」

んく？ あ、あの時か。

ストレスが溜まってたとはいえ縫り付く幼女にやる事ではなかったよなあ……あれは流石に少し反省している。

しゃがみ、ドラウディロンと頭の位置を合わせる。

ドラウディロンは俯いており視線は合わない。

「あの時は満足に戦えなくてイラついてたっていうかなんていうか……まあなんだ、好きな奴が出来ると人は変わるって事だよ」

「す、ふええ!!」

ドラウディロンが顔を上げる。

ぐりぐりと弄られていた長い金髪がふわっと持ち上がった事によりその赤くなつた端整な顔にぱらぱらと乗る。

「大丈夫だよ、俺の強さは五年前に既に見てるだろ」

「う、だ、だからだ！ だからこそ私は怖いんだ！ 頼むから私に希望を失わせないでくれっ。私の英雄を失わせないでくれ……私に勇気を、光を与え続けてくれ」

「ああ、すぐに与えてやるよ、救済を」

嫌だ嫌だと首を振り縫り付くドラウディロンにタレントで洗脳を掛ける。

乱れに乱れる恐怖の感情を沈め、意識を繋ぐ糸をスパツと切り気絶させる。

少し荒く切つたため、わざと起こそうとしない限り半日は寝たままだろう。

そしてプレイヤーの遺産を使うとはいえ所詮ビーストマン一匹、それだけあれば十分だろう。

膝から崩れ落ちるドラウディロンを抱き抱え、ソファに寝かせる。閉じられた瞳に溜まった涙を指の腹で拭うと、気絶したままの口リ

コンを回収し今度こそ振り返らず執務室を出る。

「もういいの?」

「ん?」

執務室を出た瞬間、腕を組んで壁に寄りかかっていたレイが話しかけてくる。

俺がクリムの手を掴んで引つ張るとレイも壁から背を離し着いて来た。

「同族相手でもないのにやけに優しくしてたし、法国に来る前にわざわざ国丸ごと助けてたみたいだし。てつきりお気に入りなのかなのかわざわざと思つて」

「うんにゃ、違うぞ」

「ふうん? にはしては随分と好かれてたみたいだけどね」

どうやら同族には基本的に駄々甘、それ以外には極端に冷淡になる俺にしては同族でもない相手にそこまで優しくしているという事に疑問を覚えたらしい。

けどなんか勘違いしてないだろうか。

「流石にあんな子供にまでそこまで冷たくするつもりはねえよ」

「ガワだけの疑似幼女でも?」

「正直精神が幼いと思うんだよな彼奴、少し助けただけであそこまで気に入られてるし。五年前に国を助けたとはいえ未だに顔覚えられてたし。ほら、刷り込みつてやつ?」

其処まではまあ義理堅いとかで片付けられるし良いにしても、あそこまで英雄視なんかされるか普通? 崇拜とかならまだしも、アレどう見ても依存の方向に突き抜けてたぞ。

てつきり自分の言つた事なんて手の平返しでなんで五年前に全て殲滅してくれなかつたんだとか責められると思つてたんだが……まあそんな事言われてたら冒険者プレートトの取り直しなんか気にもせず即刻竜王国を切り捨ててたけども。

「まあいい、さっさと此奴起こして廃墟の場所を知ろうか。なるべく早く帰つてきたい」

「……ホントに何でそんなに気に入ってるんだか」

面白くなさそうにしながらも軽くロリコンの腹を足で小突くレイ。それを見て反対側からもクリムが真似をして蹴りを入れた。

「げぼあ!!!」

「あーあー可哀そうに……」

レイはちゃんと手加減してたが洗脳されてるクリムはそんなもの出来ない。

咄嗟にクリムの手を引いて体勢を崩させていなければこのロリコンは死んでいただろう。

ボゴオとか鳴ってたし内臓のどっかに傷入ってないよな？

まあ結果的に死んでないしいいか。

「おい」

「な、なん、今のは君たちがやったのかね!？」

「んなのどうでもいいんだよ」

しゃがんでロリコンの髪を鷲掴み、視線を合わせてタレントを発動する。

「取り敢えず、その記憶読ませろや」

ビーストマンを断ち斬る。

魔法を使って消し飛ばしてもいいが帰りの時に《テレポーターション／転移》が使えないと困る。

別に魔法で強化した最大火力の《ドラゴンライトニング／龍雷》くらい100発撃っても魔力が残るが非常事態、予想外の事態というのはどんな時でもある。

それに1対1の時なら気にしないが今は戦争中だ。

そして戦争中の100発というのは思っているよりも少ない。

気にせずバンバン撃っていたら俺でも魔力切れになって戦えなくなる、撃つにしても60発までだ。

「隙ありイイイ！」

「何処に隙なんか見つけた？」

ジャンプして飛び掛かって来るビーストマンを剣で断つ。
例え隙があつたとしてもそんな大声出してちゃ駄目だろうに。

まあそうやって相手が完璧な存在ではない、勝てない敵ではないと自身や仲間の恐怖を和らげたいのだろうか。

上下に分かれたビーストマンの奥に更に大量のビーストマンが見えた。

こちらに背を向けていてその奥には小さく城が見える。

俺を放っておいて城を攻めようというのだろうか。

やらせんよ。

「《ドラゴン・ライトニング／龍雷》」

これで12発、魔法強化は使わない。

あれは確かに威力は跳ね上がるが魔力効率が悪い。

使わずとも時間がかかれば殲滅自体は出来るのだから出来るだけ魔力を取っておきたい今は使うべきではない。

ドラウディロンの話から推測した憶測通りならば相手はビーストマンをほぼ無限に召喚出来るのだから。

今この付近にいるビーストマンの数はおおよそ8万といったところか。

それが作る人海を一人で掻き分け消滅させていく。

いくら俺でもこの数を一切の撃ち漏らしなく殲滅出来るとは思っていない。

恐らく1〜2000程度は残るだろう。

そしてそれを竜王国の冒険者や衛兵が殲滅出来るかというと厳しいとしか言えないだろう。

事実聞けばそう言われた。

だからそれを食い止めてほしいという意味を込めてレイとクリムには城門前で待機してもらっている。

レイは暇だから嫌だと渋ったがキスを一つ落としてルビクキューを与えれば静かになった。

クリムは色々話したが気にした様子もなくボーっとこちらを見上げていた。

一応レイの指示に従って防衛するようには言っておいたが……まあクリムが動かずともレイだけでも十分倒せるだろう。

どうやら攻撃してくる奴には反撃するらしいので、なんならいざとなれば敵のど真ん中に放り投げろとレイに言っておいたし大丈夫な筈だ。

無理だったら無理だったでアクセサリーを起動して《メッセージ／伝言》を使うように言っておいたし心配はしていない。

断つ断つ断つ断つ断つ。

転がる死体を突き刺して敵に投げつけ剣に付着した血を血で洗う。

1万も殺せば手に持つミスリルの剣に付着した血と脂が拭い切れなくなりなまくらになり始める。

3万も殺せばひび割れて折れた。壊れたミスリルの剣を投げ捨て、落ちていく剣や槍を拾って使う。

全くもって斬れはしないが壊れた剣よりはマシだ。

筋肉のつなぎ目を見極め強引に引き千切っていく。

「いけいけ！ 魔法を放てええええ!!」

「『シヨック・ウェーブ／衝撃波』！』」

「チツ」

《ドラゴン・ライトニング／龍雷》には実体が無い。

衝撃波という実態が無い物に当ててもそれを貫通して通り過ぎてしまうのだ。

食らっても掠り傷を負う程度で済むだろうがその傷が何処で響くか分からない。

……流石に《ドラゴン・ライトニング／龍雷》だけを使いすぎたか、もう対策されるとは。

「《魔法三重最強化》《フローティング・ボード／浮遊版》！」

本来は物を運ぶために使う魔法であり、50kgまでのものなら何でも乗せられるという特性を持つ。

それはつまりそれだけの硬さを持つという事でもあり、盾に使えるという事でもある。

強化魔法を使ったのでおよそ一枚80kgほどか、それが三枚。

多少魔力の消費が増えるが、所詮は第1位階魔法である。

1・6倍に強化魔法を合わせて1・7倍。

それ×3の魔力を消費したが、この程度ならば素の《ドラゴン・ライトニング／龍雷》一発分どころかその半分の消費にすらならない。空中に浮かんだ3枚の半透明の板を操作して自分の前に並べる。

空間を歪ませて迫る魔法に一枚目は一瞬で割れた。

二枚目は割れるのに一瞬時間がかかり、三枚目はもう隙間が無いという程に罅が入る。

結果的に全ての板が割れたが、其処に残っていたのは髪を揺らす程度のそよ風のみだった。

「ば、馬鹿な……」

「……そもお前らビーストマン自体魔法が得意な種族でもねえだろうに」

呆けているビーストマンを首から股まで両断する。

頭からはこのなまくらでは斬れないだろう。

残った者達はそれに恐れを抱いたのか逃げ出そうとする。

その隙だらけの背中を斬り捨てた。

「ふう……」

休憩も兼ねて一度立ち止まる。

周りを見渡せば辺り一面にいたビーストマンはその数を大きく減らしていた。

残るは1万ほどか。

あと使える《ドラゴン・ライトニング／龍雷》は36発。

今からロリコンの記憶から読み取った廃墟まで向かう途中も戦う必要がある事も考えるとこれ以上は使わない方がいいだろう。

「だから、これが最後の一発だ」

手に魔力を込め、凝縮していく。

この一発で6発分の魔力を使う。

それで恐らくは3000残るかといったところか。

「魔法効果三重拡大延長最強化」《ドラゴン・ライトニング／龍雷》！
戦場を駆ける三匹の雷龍。

それは体を弾けさせて範囲外のビーストマンを含めて全てを呑み込んで消し炭にしていく。

転がる死体は燃え、更に被害は拡大していく。

消える頃には其処に残るは黒い炭だけ。

運よく巻き込まれなかったビーストマン達は腰を抜かし、うずくまっつて絶望の感情を露にしている。

この分ならレイ達の出番もなさそうだ。

一応置いてはいくが、暇になってしまうのは避けられないだろう。

これは後で補填しなきゃいけないと薄く笑う。

「悪いなレイ、任せたぞ」

虹色の自慰

ガチャガチャと立方体を弄る。

意識は此処にあらず、またいつも通り立方体が完全な姿を取り戻す事も無い。

「はぁ……」

冒険者や衛兵たちが怯えて動かないビーストマンを殺していく光景を視界の端に捉えながらため息を一つ零す。

理由はいろいろある。

暇になるから嫌だと言ったらキスされた事。

あ、これキスとルビクキュー与えとけば大人しくなると思われてるなど気付いた事。

悔しい事に事実その通りになったこと。

先ほどのいつそ美しいとすら言える腹が熱くなるような殺戮劇。

彼は正に一条の光と化していた。資格なき者が触れば即座に死に至る光。

「はぁ……」

再び一つため息が零れる、腹の昂ぶりが収まらない。

やろうとすればあの程度なら自分でも出来る、あの短時間で行う事も。

タレントを使えばそれより早く終わらせる事だって可能だろう。

だがあの殺戮劇を見ていて自分では出来ないと思わせられた事があった。

彼は約40発ほど魔法を撃っていたが、魔法で殺した数は最後の1撃含めておよそ3万。

残りの4万近くは自分の手で斬り殺している。

その間に受けた傷は0。

流石に自分でもその数と接近戦をして無傷でいられるとは思ってはいない。

戦う彼を目で追いながらその姿を何度も自分でトレースした。

結果は何度繰り返しても一つ二つのかすり傷。無傷で突破出来た事は一度も無い。

だが彼は違う。

つまり彼はこの戦闘で私に伝えたのだ。

お前よりも自分の方が上手く戦えると。

この私を戦いという分野で超えた瞬間を見せてくれたのだ、興奮が止まらなかった。

本当なら今すぐ彼を引き留めてこの昂ぶりをぶつけたかった。

実際にそうしようとした。

冒険者プレートなど、あの女が続べるこの国などどうでもいいから今すぐ私の体をぐちゃぐちゃにしてくれと。

だが出来なかった。

「……もう手を放してもらえないかしら？」

「……………」

これだ。

リビドーは此処で防衛をしてくれと言った。

どうやらそれが私達への命令として認識されたらしい。

それを放り投げようとした自分をクリムが止めたのだ。

その強く掴まれた手はどれだけ力を込めようと外れなかった。

諦めたフリをして壁に寄りかかって目の前でルビクキューを弄つてみたりもしたが騙されてはくれなかった。

そうして彼が視界から消えて4半刻、従属神との力の差を思い知らされた私はこれはもう抜け出せないなど諦めた。

ため息を吐きながらその当てを告げると視線が上がり、じっと見つめられる。

吸血鬼特有の赤い瞳。

少し濁ってはいえるものの、そんな事で曇ったりなどしないとも言わんばかりの見る者を狂わせる魔性の美。

そっちのケが欠片も無い私ですら思わず引き込まれそうな視線にこくつと息を呑む。

しばしそうして私が本当に諦めた事を理解したのか視線が逸らさ

れその手が外された。

「掴まれていた手首を回すとコキコキと音が鳴った。

不思議な事にあれだけ強く掴まれていたのに痛みは全くない。

「ん、はぁ……」

伸びを一つ。

今の所ビーストマンが攻めてくる気配は無く、残るは戦意を失ったビーストマンの駆除だけ。

であればこの腹の疼きは放置していても収まりはしないだろう。ならば晴らすしかない。

「少し離れる。特に何もなければ一刻で戻るわ」

「……………」

顔は前に向けたまま、一瞬だけ視線がちらりとこちらに向く。

その手は動かさず視線が再びこちらに向く事も無かった。

これは許可が出たという事でいいのだろうか？ 多分そうなのだろうと勝手に納得しその場を離れる。

場所はどこでもいい。

近くに人がいるという事も無し、であればそこら辺の路地裏でいいだろう。

適当な細道に入り人が居ない事を確認すると腰に帯びた剣を放り、認識障害の宝具があるためあまり意味は無いだろうが一応誰か来てもいいように《カモフラージュ／溶け込み》を使っておく。

「はぁ、ふう」

壁に背を預けて蹲り、黒のズボンの上から手を添える。

直接は触らない。

今はゆっくりと浸りたい気分だ、強い刺激でパツとやってパツと晴らすような事はしたくない。

ズボンとパンツが汚れるだろうが、その時は《オーダーレス／無臭》と《クリーン／清潔》を使って綺麗にすればいい。

普通の女は気にするかもしれないが、生憎その程度の事を気にするほど私は普通ではない。

それに思うのだ。

彼を想ってシタ行為で汚れるのならば、それは彼によって穢されたも同然ではないか？ と。

……流石にそこまでいったら引かれるかな、そんな彼の視線も一度くらい見てみたいなと思いつながら指に力を入れる。

聞き慣れたぐちゃりという湿った音がした。

「ん」

まずは何でやるか。

とは言っても私にはそれほど性知識というものが無い。

あるのは精々女の股間には穴、男の股間には棒がありそれを出し入れすると気持ち良く、そしてその結果子供が出来る事くらい。

なので自分の熱を沈める時の食材は何時も私を犯そうとする彼だ。

私という一人の女を、番外席次というこの世界でも一番に近い力を持つ女を男を求めるだけの一匹の雌にしてしまう行為。

そんな行為の始まりは大抵何時も最初に髪を触る事から始まる。

私を優しく、もしくは荒々しくベツトに引き摺り倒すと愛おしいものを見る目でこちらを見下ろしてくる。

その目は見ているこちらが恥ずかしくなるほどに甘く優しい。

永遠にその目を見ていたくなるような、思わず溺れそうになってしまいうような視線。

「あつ、んっ」

目に込められた感情は変わらぬまま、額か髪にキスを落とすとすりと私の肌の感触を確かめながらこれは自分の物であると主張をするかのように顔を擦り付けてくる。

それに合わせてふりふりと揺れる髪も相まって額を擦り付けて甘えてくる猫の様に思えてきて愛おしくなる。

撫でればそれこそ猫の様にゴロゴロと鳴いてくれるのではないかという考えと共に、ふざけてその頭に手を伸ばせば私を抱きしめる力はより強くなり彼に包まれる。

「ふあつ、んんんっ」

気の済むまで私の顔にマーキングをすると、彼は何時もその唇で私の唇を塞ぐ。

侵入してくる彼の舌。

初めの頃は翻弄されっぱなしだったが今は違う。

こちらもそれに合わせて舌を出し、彼の口内を舐め上げていく。絡まり合う舌を伝って侵入してくる彼の唾。

それに自分の唾を混ぜて彼の口内に送り返し、彼が飲み込んだのを確認すると私の口内に溜まる送り切れなかった分の唾をゆつくりと味わってから飲み込む。

それを見た瞬間彼の視線は変わる。

愛おしいものを見る暖かな瞳から一匹の雌を見る厭らしい目へと。

腰に手を回され、空いた手で手を握られる。

掌の皺を確かめるかのようにムニーっと何度も何度も揉み伸ばしてくるそれを楽しいのかな？ と疑問に思いながらも抵抗せずを受け入れる。

そうして暫く私の掌を楽しんだかと思うと今度は私の指先を纏めて握り、人差し指から薬指まで骨のコリコリとした感触を楽しむようにくにくに弄る。

骨の擦り合う感覚を楽しまれているため、当然痛い。

だがそれよりも湧き上がる謎の快感に戸惑う。

掌を、気持ち良くなる筈の無い場所を弄られているだけなのに少しずつ気持ち良くなっていく自分に困惑し、段々恥ずかしくなってくる。

これではまるで自分が淫乱のようではないかと。

「あ、あつ、ああつ」

ひとしきり私の手を蹂躪すると汗で柔らかくなった手を置き、私を押し潰すかのように体重をかけてくる。

私が与えられた快感から逃げない様に、しかしそれによって息苦しくもならない様に優しく。

腰にあった手は尻に移され、再び空いた手は背中へと行きすりすりと撫でられる。

その温かさに目を細めていると背骨のつながり目が押された。

上から下へとコリコリと。

押される度に衝撃が体を貫き、抑える事の出来ない下品な声が口から漏れる。

羞恥と快樂でびくびくと体が跳ね、しかし逃げようにも彼が邪魔で逃げられない。

ばんばんと彼の背中を叩くも向けられるのは情欲に濡れた視線一つ。

降参も甲斐なく行為は続けられ、剥き出しの脊髄を舐め上げられるかのような魂が抜けそうな快樂に段々と意識がぼやけてきて……

「っ、っ、っっっ!!」

頭が真っ白になる。

手は既に股から離され、堪え切れない快感に耐えるため自分を掻き抱くのに使われている。

体の震えが止まらない。

あの押される度に意識が飛びそうになる快感を思い出すだけでイキそうだ。

このままではイッてしまう。

流れる快樂の奔流にあらがえる気はしない。

せめて、せめて彼の声を聞きたい、あれを思い出したい。

あれが無いのにイクなんて嫌だ。

体を更に丸め、唇を噛みしめて堪える。

コリコリと押される度に意識に霧がかかる。

衝撃は一瞬で、晴れたり曇ったりする意識に次第に脳が混乱しパニックを起こす。

そうすると決まってあの大きな手が尻からズラされ、ももを厭らしくゆっくりゆっくりとこちらに摩られていると理解させるように撫でる。

まるでこちらの状態を把握しているかのように、そっちは危ないからこっちに来いとも言わんばかりに。

快樂が過ぎて恐怖を覚え始めた私に選択肢など無く、転がり込むようにそちらに意識を向ける。

すると彼は決まって罨にかかったなどとも言いたげな意地悪な顔

をして笑い、こう言うのだ。

『もうイクのか、番外席次』

「ツ~~~~~~~~つ!!」

視界がチカチカする。

体は痙攣し、空いたまま塞がらない口からは血交じりの唾液が零れる。

股からは潮が吹き出し、既に愛液でぐしゃぐしゃのズボンを飛び出して路地裏の地面を濡らす。

腕を掴む手には力が入り、服越しに刺さる爪が痛い。

「はっ、ひゅっ、ふうっ」

ゆっくりと深呼吸をして冷たい空気を入れて体を冷ます。

ゆっくりと息を吸い、同じくらい時間をかけて吐く。

ゆっくりと丸まった体を伸ばし、最後にため息を一つ。

「はあ……………もうトンじゃった」

ゆっくりと快樂に浸りたかったのだが、想像以上に早くイッてしまった。

ぐぬぬ、一人で遊ぶ時には役に立たない男だ。

だが、だいぶ冷めてしまったがまだ疼きは残っている。

というか、スッキリはしたものの疼き自体は更に増している。

実体験でやろうとするとすぐにイッてしまう事が分かったので今度は妄想で補完しよう。

彼がしそうな事で妄想すると実体験にシフトしそうなので、彼が普段しない事で妄想する。

彼があまりしない事……………そういえば彼はあまり私の胸に触ろうとしない。

乳首を吸ったり齧ったりとかはよくするので貧乳が嫌いとかそういう訳ではないと思うのだが……………よし、これでやろう。

胸を握られる。

力加減は少し強いくらい。

胸に手を添えて揉む。

ゆつくりと乳輪には触れず、撫でるようにふくらみを摩る。

ふにふにふにふにと……

「……気持ちよくない」

おかしい。

偶に触ってくれた時はこの時点で勝手に声が漏れる程度には良くなっているのだが……どうしてか全く気持ち良くなならない。

……もう胸はいい。

触っていても気持ち良くないし、彼の手が欲しくなる。

彼がないから自分でやろうとしているのにそれでは本末転倒だ。胸に当てていた手を下ろす。

彼とセックスした時の様な、少しずつ腹の熱が昂っていき頭が茹つて真っ白になる様なあの感覚に浸りたかったのだがこの調子ではおそらく何処を弄っても気持ちよくならず、逆に彼の熱が欲しくなり焦がれる羽目になるだけだろう。

そこら辺の男でもそれなりに同じ感覚は得られるだろうが、それでそんな弱者の子供が出来ても困る。

そも自分でやってもこの有様なのだ、彼にやってもらうほどの気持ち良さは得られはしないだろう。

「はあ、なあんか冷めちゃった」

あの幸せな感覚に浸るのを諦めて裸になり陰核をひたすら弄ればこの疼きを沈める事は出来るだろう。

再び彼にされた事を思い出して自慰をしてもいい。

だがそんな沈め方をして、後で何故彼は私に触れてくれない、何故彼は今私の傍にいないとイライラしてしまうのが簡単に想像できる。

ならばこの昂ぶりを抱えながら彼が帰ってきた時にどれだけ自分を幸福にしてくれるのかを考えていた方がよっぽど建設的だし幸せだろう。

放り捨てた剣を取り、《オーダレス／無臭》と《クリーン／清潔》を唱えて体と服を綺麗にする。

「よし、それじゃあ戻ろうかな」

そう言って立ち上がる。

腰は全く上がらず、ぷるぷると体が震えた。

……………?

腕を使って体を持ち上げる。

ぐぐぐと体が持ち上がり……一息ついた瞬間ぺたつと尻が地面に落ちた。

……………あれ?

「……立てない」

いつの間にか腰が抜けてしまっていたらしい。

タイミングとしてはさっきイッた時だろうか？ あれだけで腰が

抜けた事に少し驚き、面倒だなあと息を吐く。

腰が抜けるというのは分類で分ければ状態異常なのだが、毒に対する解毒魔法のようなそれに対応する専用の治癒魔法というものが無い。

なので治す方法などは無く、時間をかけて治るのを待つしかないのだ。

それはつまり再び動けるようになるまでに時間がかかるという事であり、それまではここから移動出来ないという事でもあった。

「はあ、まあいいか」

クリムに一刻で戻ると言って席を外してからは大体半刻くらいか。

時間はまだあるし、それまでには治るだろう。

治らなくとも後でクリムが探しに来るだろうからどちらにしる問題は無いです。

立つのを諦めて剣を放り捨てると壁に背を預けて横座りをし、上を見上げて空を眺める。

路地裏の汚い道からは鳥が優雅に飛び交う美しい晴天の空が見えた。

……暇だ。

体の疼きはリビドーにかしてもらうと決めたためやる事が何もない。

何かやることは……そう思いごそごそと自分の服をまさぐる。すると硬い物に手が触れた。

取り出してみれば六色のブロックが組み合わさった立方体。

「ルビクキューか」

何も考えずガチャガチャ弄っていられるという部分で考えれば割と良い暇潰しなのだ。今はそんな気分ではない。

というかルビクキュー自体かれこれ何十年と弄ってきたが一度も3面以上揃えられた事が無く飽き始めている。

最近在意固地になっている自覚もあるが、どうにも放り出すのは負けた気がして悔しくなり放り出せない。

「……………」

とはいえそれ以外にやる事が無いためやるしかないのだが。

無心になつてガチャガチャ弄る。

6面まであと一手という所まで揃えてこちらに投げ渡したりビドー曰く、何も考えずにやるから駄目なんじゃねえの？ とのことだがこちらから言わせれば考えてやっても考えないでやっても結果は同じであり6面は夢の彼方である。

まあ今まで殆ど2面を揃えられなかったのが10回やったら1回くらい揃うようになったので考えてやった方がいいのは確かなのだろうが。

その事に気付き嬉しさのあまり思わずリビドーに自慢しに行った時の事を思い出しつつガチャガチャと。

「あつ」

気付けば3色の面が揃った立方体が手元に転がっていて、気付けばその立方体はポケットの中に沈んでいた。

「……………後で見せに行け」

むふーと息を吐き達成感に浸る番外席次、その耳が彼方から響いてくる音を拾った。

「爆発音………？」

この近くではない。

どころかこの音の小ささとそれに反比例する重厚感ならば10 km

くらいは離れているだろう。

逆に言えば10 km以上も離れている場所の音が聞こえる程の爆発であったのだ。

そしてそれが出来る者は限られている。

「ふふふ、やっぱり彼の子供、欲しいわね」

自分の種族が種族であるためなのか、既に性行為の回数は500を優に越していて、そのほぼ全てを胎の中で受け止めているのにも関わらず子供が出来る兆しは無い。

しかしやらないよりはヤツた方が出来易いのは确实であり、今はそんなの関係なく彼の肉棒が欲しい。

こちらの弱い所を知り尽くしたあの肉棒でこの腹の熱を晴らされた時の快感はいかほどか。

疼きが強くなりだした腹を手で摩る。

そんな彼女の耳に届くもう一つの音。

「足音？」

遠くから近づく足音、それも一つ二つではない。

ザザザ、ガザザと幾重にも重なる足音の群れ。

その音にはまるで軍の行進のような威圧感がある。

あの冒険者達がこんな揃えられた足音を出せる筈も無く、それだけの数もない。

となればこの足音の下手人は一つしかない。

ビーストマンだ。

「丁度良いわ、一匹残らず殲滅してあげる！」

目標は彼同様無傷での殲滅だ。

剣と第3位階までの魔法だけで無傷殲滅する事が出来れば彼に貴方なんかまだまだ未熟よ！　と言える。

そうすれば彼は悔しがつてもっと頑張り更に強くなってくれるだろう。

そうすれば……ふふふ、笑いが止まらないわ！

そう考え意気揚々と放り捨てた剣を握り締めて立ち上がり……べしやつと顔から崩れ落ちた。

「あ、あれ……う？」

一瞬何が起きたのかを認識出来ずに呆け、そうして思い出した。私、腰抜けたままでまだ治ってない、と。

唐突だが、今現在竜王国で戦える力を持つ存在というのは大きく分けて3つに分けられる。

私、クリーム、冒険者達だ。

力の比率としては7:2:1といったところか。

冒険者達は間違いなく役に立たないだろう。

力もそうだが単純に数が足りない為だ。

クリームは命令を守るためにビーストマンを竜王国に入れまいと守ろうとするだろう。

しかし彼女一人で出来る事というのは限られている。

せめて洗脳が解けていればと思わなくもないが狸の皮算用をしていても仕方がない。

だから現時点での竜王国防衛戦における最大戦力が誰かと言えばそれは私であり、その私が動けないという事はつまり……

「ああー……これ、やばい奴ね」

慢心と油断、 勇気と蛮勇

殺戮に殺戮を重ねてまっすぐ目的地まで突き進む。

当然ながらビーストマンごときに止められる俺ではなく、身体強化も併用すれば半刻程でロリコンの記憶にあつた深い森の中に存在する廃墟に着いた。

……のだが。

「廃墟……廃墟？」

幾重にも四角く切られた石が重なった、上に行くにつれて細くなつていく巨大な四角錘状の建物。

大きさは竜王国首都の城と同じくらいか。

思っていたよりもデカかったが、その形はロリコンの記憶通りだ。だが記憶とは違う場所がある。

記憶の通りであればその外回りには苔や植物の蔓が巻き付いていた筈なのだがそれが無くなっており、黄金に近い美しい外装が見えている。

ロリコンの記憶で見た時はもうちよつと苔むしてた感じだったんだがなんか少し綺麗になつている。

そしてもう一つおかしい所があり、侵攻する俺を止めようとビーストマンが攻撃してきていたのだが、少し前から、具体的にはこの廃墟が存在する森に入ったあたりからビーストマンを見ていない。

今回の目的は銀毛のビーストマンを殺すだけだし都合は良いのだが……

「なんだか嫌な予感がするな、さっさと殺して帰るか」

閉じられた廃墟の扉、其処には暗号が書かれている。

どうやら扉を開けたければその暗号を解けという事らしい。

が、そも読めないし、ロリコンの記憶ではそも最初から開いていたため暗号の答えも分からない。

そんなものに時間をかけている暇もないため、《ショック・ウェーブ／衝撃波》で吹き飛ばす。

バゴオオオンという轟音と共に吹き飛ぶ扉に巻き込まれた埃が舞い上がる。

「……埃？」

埃というものは何処からでも湧く。

元となるのは髪の毛などが落ちたり服を着替えた時に繊維が解れて抜けたりしたもので、埃とはそれらが集まって塊になったもので、当然ながらそうやって出来る物なのだから埃の色も髪や服の色によって変わる。

この舞い上がった埃は赤や緑といった沢山の色が混じったものだ。それが示すのはつまり、つい最近まで服やそれに近いものを纏う者が沢山居たという事。

にも拘らずビーストマンは一匹もない。

血が飛んでいる訳でもないため、何かに殺戮された訳でもないようだ。

「ビーストマンは何処に消えた？ まさか全員攻撃に出てるって訳でもないだろうし……ぬう。駄目だ、分からんな」

考えるのを止めて先に進む。

道は上と下の上下に分かれているが下は瓦礫で埋まっているため上に進む。

それ以外の道はなく一本道のようなだ。

道の横には所々に砂が敷き詰められている砂場や何枚かの板と丸い棒を組み合わせて作られた小動物用の小さな建物、でいいのだろうか？ が置かれている。

そんな道を進めば開けた場所に出る。

「あいつか、銀毛のビーストマンってのは」

巨大な玉座、其処に座る通常の3倍ほどの巨体を持つビーストマン。

その毛の色は銀であり、手にはふわふわとした謎の緑色の植物が握られている。

コツツという俺の足音が響いた瞬間、ぎよろりとビーストマンの瞳が開きこちらを見据える。

「やはり来たか。お前が来るのを待っていたぞ」

「あ？ 待ってた？ 人違いじゃねえのか」

「いいや、お前で正しいぞ、竜王国の救世主」

はい？ 誰それ。

いや、俺の事なんだろうとは分かるけどなにその二つ名。

結局五年前は中途半端に壊滅させただけで救えてはいないし救世主は合っていないと思うんだが。

「まあいい、他のビーストマン共は何処だ」

「此処には一人もおらんよ。他の者は皆既に侵略に出ている」

「で、お前が此処で指揮してる訳か。つまりお前殺してさっさと戻れば全部解決か」

「いいや？」

俺の言葉にニタリと嗤うビーストマン。

「少し前、五年前颯爽と現れ我々を殺戮して消えた貴様が再び戦場に立ったという報告が来てな。一瞬我々の敗北が頭を過ったが……考えたのだよ、貴様が来たからこそ竜王国を滅ぼすいい機会なのではないかとな」

「俺が来たからこそその機会？」

「そうだ。あの女王は無能だが馬鹿ではない。五年前も侵略に紛れての暗殺をしようとしたが奴は常に貴様という抑止力を手放さなかつたし、貴様が居なくなつてからも殆ど外に出ておらず向かわせた者も帰っていない」

暗殺？ やけに城に侵入してきてるビーストマンが多いと思つたらそういう事だったのか。

あの時ドラウディロンはそれに気づいてたから俺を引き留めてたのか。

んで俺がいなくなつてからも暗殺は失敗してるって事はあのロリコンに代わりに守らせてたってトコか。

「そんな奴が貴様という駒を手に入れた今、真っ先に狙うのは誰か。この私だ。逃げられた時はイライラさせられたが、この時ばかりはあの時の冒険者に心からの感謝を覚えたよ」

「ロリコンの事か」

「それは知らんが、兎に角この私を真っ先に殺しに来る事は予測していた。現にどうやったかは知らんがこの短時間でここまで到着した。きつと貴様はまっすぐここまで進んできたのだろう。途中に存在する我が同志を悉く殺して。だが、進路外の同志はどうだ？」

「なるほどね、それで俺が来た事で気が緩んだドラウデイロンを一斉攻撃と」

なんかやけに対応が早いな。

俺が、竜王国の救世主が戻って来た時の為に訓練でもしてたのか？

存外ビーストマン共も暇人だな。

っていうか不味いな、ドラウデイロンが起きていれば逃げるくらいは出来ただろうが今は気絶している。

起きるにしてももう少しかかるだろう。

その頃には退路は無くなっている筈だ。

落ち着かせるために気絶させたのに完璧に裏目に出ってしまったな。

「貴様がこの森に入った瞬間から侵攻する様に言っている。既に王都は我が同志で占拠され始めているだろう！ フハハハハ！ 貴様の存在があああの国を滅ぼしたのだ！」

「ふーん」

「我は死ぬだろうな。だが同志が頑張っているのだ、我があつさりと殺されるなど恥ずかしくて生きていけんわ。せめて作戦が成功するまで、貴様を此処に足止めする」

そういつて手に持ったふわふわの植物を掲げるビーストマン。

それに合わせて魔力の波動が吹きすさび、建物に張り巡っている無数の蔦がうねうねと動き始める。

「聞け！ 我が名は獣王！ 貴様の時間稼ぎを担う者だ！」

「そーかい」

「ふん、名乗り返しもしせんか。だがまあいい」

うねうねと動いていた蔦がこちらを向いている。

ビーストマンが湧く事は無い。

「行くぞ、名も知らぬ英雄よ！」

「《集団標的》」

「マス・ターゲットイング」
スパツと空気を裂いて襲い来る無数の鳶、それに《ファイヤーレイ
ン／炎の雨》を放ち全てを燃やし尽くす。

すべての鳶がフアラフアラと燃えて落ちる。

その向こうには嘩然とした顔でこちらを見つめる獣王。

「で、次はなんだ。もうないか？　なら殺すぞ」

「ま、待てー！」

「悪いな、急いでなきやもうちよつと付き合つてやったんだが」

その胸に手を突き入れ、心臓を握り潰す。

これで無限湧きは潰せた。

後はドラウデイロンを狙うビーストマンを消してくだけか。

そう思い手を引き抜こうとした瞬間手が掴まれる。

見れば心臓を握り潰された筈の獣王がにやりと笑いながらはつき

りとその目で俺を見つめていた。

「なっ!？」

「フッフ、お前は想像以上に強かった。正直見誤っていたよ。だから
こそ言うぞ。我を、我らの誇りを舐めるなよ！」

獣王がその手に持つ植物に魔力が溜まっていく。

何を狙っているのかは知らないが、元より魔法を使うのに向いてい
る種族ではない此奴の放てる魔法などたかが知れている。

そんなものを放たれようが死にはしない。

だが、その衝撃で気絶する恐れはある。

何時もならその程度は自分の慢心の結果だと大人しく受け入れる
が今は不味い。

俺が竜王国前で殺した7万近くのビーストマンに、此処に来るまで
に殺した数を加えると大体13万程度。

殺せていない残り約17万のビーストマン、それが一斉に攻めてく
るのだ。

今俺が気絶したら最悪起きた頃には竜王国が減んでいる。

レイとクリムはいるが、全力が出せない2人では防ぎきる事は出来
ないだろう。

「《ドラゴン・ライトニング／龍雷》！」

「ガアア嗚呼アア!!」

掴まれたままの腕、そこから魔法を発動させる。体内という行先の無い密室に入れられた魔法はそのまま形を成す事無く獣王を焼く。

「ギッ」

そして0距離で電撃を放つという事は当然その電流が逆流する。逆流してくる超高压の電流によって与えられる体内のありとあらゆる内臓が焼き尽くされるかのような痛み。

それに耐えながらも更に魔力を込め、魔法を暴発させた。

ドパアンという甲高い音と共に弾ける獣王。

その体は血の一滴すらも残らず焼き尽くされて消滅し、灰となってこの世から消え去った。

「はあ、はあ……クソッ」

全身に走る激痛。

周囲に存在する植物までもが弾けて燃え上がる程の高压電流。

それで焼かれた体はとてつもないダメージを負っており、それを行った右腕は見事な消し炭となっていて、今も電流による高熱が炭となった右腕を焼いている。

一刻も早く切除しなければ最悪死ぬだろう。

「あー、馬鹿やったな」

腰に帯びるボロボロのなまくら、それを引き抜き、肩に当てる。

目を閉じ、歯を食い縛って痛みに備え……右腕を根元から引き千切った。

「ギッあアツ、《魔法上昇》^{オーバーマジック}《ヒール／大治癒》！」

引き千切られた肩に治癒魔法をかけ、素早く治す。

無くなった手は激痛と共に形を取り戻していき、少しすると元の完全な姿を取り戻した。

「あー、いってえ……」

ふりふりと治った腕を振るう。

特に違和感といったものは無く、きちんと治っているようだ。

他の電流によって焼かれた内臓などもついでに治っているようで、痛みなどは完全に無くなっていた。

そこまで自分の現状確認が終わったところでふと気付いた。

魔力反応が消えていない。

バツとそちらに首を向ける。

其処には獣王が立っていた……といった事は無く、謎の植物が一本転がっていた。

「あの植物は……」

確か獣王が持っていた奴だ。

ビーストマンを召喚したり植物を操ったりと色んな能力を持っていたが、結局あの植物はなんだったのか。

興味は尽きないが、それを知る事はもはや永遠に無いだろう。

何故ならば。

「はっ？・ちよ、まて、なんで魔法が発動してる!？」

普通魔法は詠唱者が生きていなければ発動しない。

例え発動しても、形を成す前に死ねば魔法ももろとも消えるのだ。

にもかかわらずこの謎の植物は未だに魔力を溜めていて、しかもその魔力が溢れそうになっている。

唐突だが、魔法というのはある一定の使用限界魔力といったものがある。

第1位階の《マジック・アロー／魔法の矢》に竜王国で使ったような魔法強化を使った上に6発分の威力を込めた第5位階である《ドラゴン・ライトニング／龍雷》クラスの魔力をつぎ込むとする。

爆発する。

一応魔法として発動はするがきちんと形を成す事無く爆発してしまふのだ。

当然だ、コップに湖の水を無理矢理詰め込もうとしても入る筈が無い。

で、当然ながらそのつぎ込まれた魔力が多ければ多いほど爆発の威力も高くなる。

そして今現在この謎の植物に溜め込まれている魔力は俺が使う全

力の《ドラゴン・ライトニング／龍雷》の約30発分ほど。

そしてこの膨大な魔力が弾けた場合の結果は明白であり……

「冗談じゃねえぞ!!？」

慌てて立ち上がり、出口に向かって走り出す。

そして世界は極光に包まれた。

「んう、ふわあ……んむう」

竜王国執務室、そのソファの上。

猫の様に丸まって眠っていた艶めく金色が美しい毛玉がもぞりと起き上がり、あくびをする。

その様子はセラブレイトが見れば即座にパンーになって飛び掛かりかねない程に美しい。

現時刻はリビドー・ブレインが竜王国を発ってからおよそ1刻と少し。

現代の時間に直せばおよそ2時間ほど。

タレントにより気絶させられ半日は寝たままであると予想されていたドラウデイロンは、その半分以下の時間で起床した。

だからといって半日は寝ているという予想が間違っている訳ではない。

恐らくはレジストされるために出来るかどうかはともかくとして、実際に番外席次に同じ事をしていれば4刻はぐっすりと眠っていただろう。

では何故ドラウデイロンはこんなにも早く起きれたのかというと、それはドラウデイロンに流れる竜の血が関係している。

ドラウデイロンの親は真なる竜王が産んだ子供の更にその子孫であり、8分の1ほど真なる竜王の血を引いているのだ。

その血は薄くなりすぎているものの、それでも竜王の曾孫である事に変わりはない。

そのため彼女の肉体は強力な治癒力を有しているのだ。

それが戦闘に使えるかと言われれば本人の気質もあり不可能だと断言するが。

ともあれ、その強力な治癒力があるからこそドラウデイロンは予測された時間の約6分の1の時間で目覚めることが出来たのだ。

そして幸運な事に、それはドラウデイロンの命を救う事へと繋がった。

「王女を見つけたぞ！ こっちだ！」

「へ？」

寝ぼけたドラウデイロンが声の元へと目を向ける。

「え？」

其処にはビーストマンが立っており、自分がこの部屋にいるという事を知らせるように大声を張り上げていた。

その手に持つ剣には血が付着しており、ぼたぼたと落ちて大理石の床を汚している。

「ひっ」

死ぬ。

このまま此処で呑気にしていたら確実に自分はあの剣によって殺される。

「い、いやだ、いやだ！」

転がり落ちる様にソファから立ち上がる。

だが逃げ道は無い。

唯一の逃げ道である出口はビーストマンが立っており、隙間を駆け抜けて行くものなら即座に自分の頭と首がお別れをするだろう。

だが他に逃げ道は無く、此処で迷ってうだうだしていれば更にビーストマンがわらわらとやってきて、それこそ完全に死しか残らなくなるだろう。

恐怖を飲み込み、走り出す。

目標はビーストマンと出口の隙間、剣を持っていない方だ。
手を握り締め、走る。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたく

マッチポンプ1本 恋の元

……

「……！」

何かが聞こえる。

声だ、誰の物かは分からないが。

「……っ……!?!」

うるさいな、今気持ち良く寝ていたのに。

いや、何で私は寝てるんだっけ？

「何……!?! ……起きて……!?!」

確か、何かから逃げようとしていて……あつ、

ビーストマン！

「い、生き返っただとお!?!」

「う、あ……?」

意識が目覚めて最初に聞こえたのは叫び声。

そしていつの間にか自分が倒れていた事に気付いた。

目を開ければ見えるのは口を開けて叫ぶビーストマン。

その口に見える鋭い牙に体が恐怖でぶるりと震える。

そうして自分が何をしようとしていたのかを思い出した。

逃げなければ！

何故自分が倒れているのかは分からない、だが急いで逃げなければ

自分が死んでしまう事だけは分かった。

慌てて起き上がり、走り出す。

何故だか分からないが、体が軽い気がする。

小さな足でととて走る。

後ろからはビーストマンの物であろう足音がして、少しづつ近

付いているのが分かる。

いくら体が軽く感じても走る速度にそれほどの違いがある訳ではない。

そして今のドラウデイロンの体は140cmほどしかない幼女ボディだ。

いくら速く走ろうとも足幅の差というものがあり、ビーストマンの1歩はドラウデイロンにとつての2歩である。

変身を解いて大人の体に戻れば逃げられる可能性も高まるだろうが、恐怖に支配された今のドラウデイロンにそんな事を考える余裕はない。

先ほど呼んでいた応援が来たのか、後ろから聞こえる足音が増えている。

このままでは追い付かれるのも時間の問題だろう。

頑張つて走れば走るほど死が近付いてくる感覚に泣きながら走る。

そんな彼女の決死の逃走劇も終わりが見えた。

「漸く捕まえたぞガキ！」

「ひっ、いやあー！」

首根っこを掴まれ持ち上げられる。

その体勢は奇しくも先ほどリビドーにされたものと同じであり、違うのはリビドーによる恐怖は尋問によるものであり、今は命の危機であるという事だ。

「安心しろ、痛くはしねえさ。目瞑ってれば終わる」

痛いのが嫌なのではない、死ぬのが嫌なのだ。

とはいえ自分を殺すのが目的なこいつらにそれを言っても無駄だろう。

もう逃げる事は出来ない、自分の死は確定した。

そう考えると逆に少し冷静になれた。

自分を守ると言ってくれたリビドーが今どこにいるのかは知らない。

恐らくは自分が説明した廃墟に向かっているのだらうとは思いますが、肝心な時に居ない奴めと心の中でペツと唾を吐きかける。

だがきつと奴は銀毛のビーストマンを倒してくれるはずだ。

そうして帰ってくる。

帰ってきて今現在竜王国に蔓延る憎きビーストマン共を皆殺しに

してくれるはずだ。

その時には恐らく私は死んでいるだろう。

だが、だからこそ奴が帰ってくるまでに一人でも多く竜王国の民が救われるように犠牲者を減らさなければいけない。

正直怪しい所だが痛みを与えない様に殺すと口で言うくらいだ、交渉も不可能ではないだろう。

掛け金は竜王国の存亡、ベツトは自分の命だ。

私の命をもって、民達を守るのだ！

覚悟を決め、いざ話しかけようとした瞬間、自分の首を掴んでいたビーストマンが吹き飛んだ。

それに合わせて自分の体も宙を舞うが、途中でふわりと何かに抱き留められる。

「……は？」

「大丈夫!?! 生きてる!! 生きてなかったら殺してでも蘇生して、ツ首……いえ、なんでもないわ。生きてるみたいね」

視線を上げ、物騒な事を叫びながら自分を抱きしめている相手を見る。

黒と白の別れた髪を持つ不思議な配色の女だ、記憶に無い。

「え、と。そもお主は誰じゃ?」

「番外席次、リビドーの仲間」

「あ奴の仲間!?! あ奴は何をしとるんじゃ!?!」

「知らない、《メッセージ／伝言》も繋がらないし」

「ぐぬぬ、役立たずめえ!」

私に救済を与えるとかカツコよく決めておいて、このザマは一体なんじゃ!

ブーメランであると分かってはいるが怒りを抑えられない。

だが、兎に角助けは来た。奴の仲間だというのなら同じくらいの力はある筈だ。

「私はいい、ある程度安全な場所に捨てておけ! それよりも皆を、私の国民達を救ってくれ!」

「無理」

「はあ!?!」

「ちよつと腰がね。今も割と結構無理してるわ」

そう言われて視線を下に向ける。

なるほど、それは事実なのだろう、思いつきり足がガクブルと震えていた。

ぶつちやけ恐怖に震えていた自分よりも震えが酷い。

「えー、何があつたんじゃ?」

「あー、ちよつとりビドーでね」

「またあ奴か!」

なんか足引つ張る事しか出来とらんのではないかあ奴!?

「ぐぬぬ、お主は今何が出来る!?!」

「目の前の奴らの殲滅。長距離移動は勘弁して欲しいわね」

「ならばお主はこの城内のビーストマンを出来る限り殲滅せよ! 私
は逃げ回りながらビーストマンをここへ連れてくる!」

「ああ、それなら良いわよ。精々捕まらない事ね、子猫ちゃん」

「うむ! (子猫?)」

「……何か不安だから魔法かけとくわ 《ギフトフルポテンシャル贈物全能力強化》」

「む、力が湧いてくるようじゃな……:礼を言う!」

これからする事は決まった。

自分を抱きしめている彼女、番外席次の腕から抜け出し走り出す。

後ろから聞こえてくる戦闘音を聞きながら死ぬなよと武運を祈る。

……大丈夫だよね? なんかドガアンとか明らかに剣で鳴る音
じゃない破壊音が聞こえるんだけど。

……:戦闘が終わる頃までに城が原型を留めるといいなあ……

「つと、それよりも! おい、こつちだノロマあ! お主達の標的は

こつちにおるぞー!」

走っている途中で見かけたビーストマンに挑発をかけて逃げる。

「ああ!?! うるせえぞチビ!」

「ち、チビじゃないし! 本当はもっと大きいし!」

……:挑発をかけて逃げる!

足音が聞こえてくるため、ちゃんと自分を追いかけているようだ。

少しずつ増えているし、これも丁度いい。

あとはこのビーストマン共を番外席次に送りつけに行くだけだ。幸い番外席次のいる場所は簡単に分かる。

思いつきりガゴオンとかボゴオンとか聞こえてくるし。

……ホントに大丈夫だよな？ 城崩壊したりしない？

「番外席次！」

「ん、よくやったわ。あっちから逃げなさい」

「分かった！ あともうちよつと静かに戦えんか!？」

「無理」

「……せめて城は壊さんでくれよ」

「頑張るわ」

頑張らねば出来んのじゃな……

それを真顔で言いきって見せる番外席次に呆れながらも言われた方向へと走り出す。

道の端にはビーストマンの死体が幾重にも重なっており、死臭が酷い。

鼻を抑えながらなるべくそちらを見ないようにして走る。

そうして死から目を逸らしつつ考える。

本来ならばこれをしなければならぬのは私だと。

死体の山を築き民の安全を確保する。

それは本来王である自分の仕事であり、それをこの国の冒険者ですらない番外席次達に頼っている。

悔しさに唇を噛む。

何故自分にはあれが出来ない。

自分だって真なる竜王、フライントネス・ドラゴンロード七彩の竜王の曾孫だ、竜の力を継ぐ者だ。

なのに何故私にはあの力が、国を守るための力が無い？

竜王としての力も使えなくはない。

だがその代償が本来守るべき民の命100万だ。

民を守るために国を守っているのにそれでは本末転倒だ。

真にして偽りの竜王、か。

自分の異名を思い出して笑う。
その通りではないか。

本当の竜王であればこんな獣畜生など一瞬で殲滅出来る筈だ。

……無い物を求めていても仕方ないと分かつてはいるがどうしても求めてしまうのはやめられない。

「悪い癖じゃな」

ぱつと気持ちを切り替える。

いつまでもうじうじしていても仕方がない。

今私がやるべきは逃げ回りながらビーストマン共を番外席次の元へと連れていき殺してもらおう事だ。

今はそれでいい。

「ごつちだぞごつち！ ついてこい獣共め！」

「ごつちだぞごつち、馬鹿なおチビちゃん」

「えっ？」

後ろから聞こえた声に振り返る。

目と鼻の先と言えはいいか、幼女モードのドラウディロンですら手を伸ばせば触れられるほどの距離にビーストマンが立っていた。

いつの間に？

考え事をしてたから？

振り下ろされる剣、それが当たった時の結果は分かり切っている。

自分の死だ。

避けられる？ 無理。

受け止める？ 私の力で？

出来る？ 筈が無い。

待つのは死だけ、変わりなく。

けれど、今死ぬ訳にはいかない！

「ッあああー！」

足を起点にして体を回転させる。

足に激痛が走り、直後腹に熱が灯った。

「ぎっし」

べしやつと背中から地に落ちる。

見れば腹に赤い線が一筋入っていた。
激痛が過ぎたのか逆に痛みは無い。

生きてる、まだ生きている！

痛みも無い傷を庇っている暇など無い。

急いで起き上がって走り出し、足に走った痛みを転びそうになる。

「ッ!？」

走りながら見下ろせば先ほど回転の起点にした足首が青く腫れていた。

不味い、捻ったかッ！ 何でよりによつて今!？ 運が悪いにも程があるだろう!？

自身の運の無さを呪いながら痛みを我慢して走る。

だが普段から怪我などをしていない自分が痛みの抑え方などを知っている筈も無く、段々と増していく足首の痛みが脂汗が噴き出る。

「クソッ、神は私に死ねとでも言っているのか!？」

しかしいくら痛くとも、足を動かせば動かすほど痛みが襲い掛かるとしても走るのを止める事は出来ない。

足を止めた瞬間2撃目が来る、そうすれば今度こそ死ぬと理解しているからだ。

正直今の腹の傷だってまだ死んでいないというだけで致命傷の類に違いは無いだろう。

だが覚悟は決めた、もう死は怖くない。

先ほど番外席次が言っていた、殺してでも蘇生すると。

という事は彼女には自分が死んでも蘇生する手段があるという事だ。

ならば死はもはや恐怖の先兵ではなく救国の為の一手だ。

正直今の自分を何時もの自分が見れば正気かお主と頭の具合を心配していたらとうとう確信がある。

そして同じ立場に据えれば他に選択肢があったとしても全く同じ行動をするだろうとも。

何も出来ないお飾りの女王の私だからこそ出来る事がある。

だから、そのためにいつでも死ぬ準備は出来ている。
だがそれは今ではない。

まだ死ねない。

私は女王なのだ。

私は竜王国の女王なのだ。

私は竜王国という一国の女王なのだ！

死ぬのならば華々しく、国を救うために！

こんな道端の石ころの様に無駄死になどしてはられないのだ！

「こつちに来いッ化け物共オ！」

そこら辺に転がっている番外席次が壁を破壊して作ったのだろう
瓦礫を掴んで投げつける。

適当に放り投げたが運良く瓦礫はまっすぐ飛んで行き、今も自分の
血で赤く濡れた剣を持つビーストマンの頭に直撃した。

こんな所で無駄に運を消費しているからこんな大怪我を負う事
になるんだと自嘲しながら今の内に距離を稼がねばと痛む足を引き
ずって走り出す。

とはいえ足を負傷している上に幼女モードのため一步一步は小さ
く、しかも今居る場所は執務室のある城の最上階だ。広くはあるが長
時間走り回っていらられるほどではない。

少し走ればすぐに行き止まりへと着いた。

城下町全てを見下ろせるテラス、その手すりにもたれかかり息を吐
く。

ぜひゅ、ぜひゅつという薄くも荒い息が止まらない。

そしてドラウディロンの足ですぐに着く場所ならば当然ビースト
マンならばもつと早く着く。

ドラウディロンが蹲り息を整え始めた数秒後にはもうテラスはド
ラウディロンを追いかけてきたビーストマンでいっぱいになっ
てた。

「ひゅーう……ひゅー……」

「おいおい大丈夫か嬢ちゃん」

「苦しいだろ、もう大丈夫だぜ」

「そーそー、俺達に任せてくれれば痛くないさ」

「首が一瞬でクピーっとな！」

「ハハハハハ！」

面白くない。

下品な笑い声がいちいち癩に障る。

視界が暗く、息が辛い。

感覚が鈍く、痛みを感じない。

気を抜けば眠ってしまいそうになる。

そんな感覚にああ、今私死にかけてるんだなあと理解する事が出来た。

逃げ場はもうない。逃げる力も無い。

そも今考えるべき事は逃げる事ではない。

此処でどうやってこいつらに屈辱を与え、国民に勇気を与えながら死ねるかだ。

このまま何も出来ずにゴミの様に死ぬ事だけは避けなければならぬ。

そこまで考えて、手すりの隙間から見える城下町が見えた。

……まあ、今出来る事といたらこれしかないか。

「ひゅふ、獣共よ」

「あ？」

「貴様らの好きには、させんよ」

入らない力を入れ血を吐きながら立ち上がる。

体のどこかで何か折れる音がする。

自分の生が消費されている。

命の灯が消えかけている。

一瞬でも気を抜けば、死ぬ。

唇を噛み、手を握り締める。

「私は、竜王国女王ドラウディロン・オーリウクルスだぞ」

そうだ、この程度何という事は無い。

今まで国民達に強いてきた苦痛に比べれば、こんなもの。

「国民を守るのは私の仕事だ」

でも私にはそんな力は無いから。
だからこそせめて

「ただ諦めない」

私が諦めるのは竜王国の死を意味するから。

「進み続けるんだ」

手すりの高さは幼女モードのドラウデイロンの腰ほど。

こんなの意味あるのかと常々思っていたが意外と役に立つこともあるものだ。

体重を後ろに預けた。

視界が傾いていく。

ふわっとした気持ち悪い感覚が身を包む。

まだまだ、まだ私の仕事は終わっていない！

「我が国民達よッー！」

全力で声を振り絞る。

私に出来る事はこれしかないから。

「諦めるなアー！」

まだ竜王国は死んでいない。

「進み続けければ、希望は見えるー！」

そう、諦めさえしなければあいつが来るから。

「英雄は、すぐそこだー！」

げぼっ、と血を吐いた。もう声は出せそうに無い。

この調子ならば地面にぶつかる前に死ぬだろう。

全く、結局あいつは最後まで来なかったな。

私に救済を与えるとか言っておいて、一体なんだこのザマは。

ホント、あの役立たずめ。

……幼偽造の私き女王ではなく、ドラウ本ウ当デイの私ロンを救ってくれるって言うてくれたこと、嬉しかったのにな。

「……嘘つき」

「悪い」

「！」

ふわりと、胃がひっくり返る様な気持ち悪い感覚が止んだ。

目はもう見えない。

言葉ももう喋れない。

痛みも感じない。

けれど、不思議と身を包む温かい感触だけは分かって。

「遅れた」

希望が来た事に安堵を覚えた。

白黒の反省と金の罪悪感、銀の衝撃

頬に当たる冷たい風に目が覚める。

途端、体中に走る痛みで自分が気絶していた事に気付いた。

むくりと起き上がり、周囲を見渡してみれば巨大なクレーターが広がっていて、ほんの少し前まで植物が生い茂っていた森であったとは思えないほどの荒野が広がっていた。

「つつう……」

二日酔いの様な気持ち悪い感覚が頭を襲う。

魔力が少なくなっているという証だ。

この状態になるまで魔法を使った事が殆ど無い為、正直かなりキツイ。

あの爆発の防御に魔力を使い過ぎたな。

だが、ここでぐだぐだしている時間は無い。

現在進行形で竜王国がビーストマンに襲われている為、急いで戻らなければ最悪国が減ぶ。

正直冒険者プレートなんてあればいいな程度で別に無くてもいい。

どうしても取る必要が出てきたとしてもそれこそ銅級カッパーからやり直せばいい。

ドラゴンの死骸でも持っていけばすぐにオリハルコンくらいまではランクが上がる。

それに竜王国が減ぼうと俺の知った事ではないしそれはそれで運命だったんだろうで終わるのだ。

今だって放っておけば滅びるのが分かり切っているのにレイとクリムは死なないだろうしそれでいいやとめんどくさくなり動きたくなくなっている。

だがドラウデイロンは別だ。

5年前のあの時、俺はあいつの事を認識してしまった。

レイのような、命を捨てても構わない程に大切な存在という訳ではない。

クリムの様に同類であるという訳でもない。

ただの知り合いだ、ピンチになったら助けてやってもいいかと思える程度の。

正直助けてやってもいいか程度で国一つの存亡がかかるのはちよつと重いが、逆に言えば死なれたら気分悪いし救国くらいならしてもいいかと思える程度には気に入っているのだ。

「それに言っちゃまったしなあ、救済を与えてやるって」

気持ち悪いのを我慢して立ち上がり、魔法を発動する。

転移する場所は竜王城の執務室、ドラウデイロンが寝ている場所だ。

「《テレポーターション／転移》」

空間に円形の歪が生まれる。

ぐるぐると渦を巻く転移門、あとはこれをくぐれば転移出来る。

渦の中に入ろうと足を踏み出し、立ち止まる。

少しだけやりたい事が出来た。

じゃんけんのチョキのように人差し指と中指を伸ばし、魔力を込める。

「《クリエイト・アイテム／道具創造》」

指先に作り出すのは小さな花の髪飾り。

何の品種かも分からないような小さなものだ。

そうして作り出した髪飾りを振り返る事なく後ろに向けて放り投げ、転移門を潜った。

潜った先は竜王城執務室、特に場所がズレているとかはないようだ。

「……ドラウデイロンはどこ行った？」

半日は寝ている筈なのだが姿が見えない。

ベツトルームにでも移されたのか？

そう考え執務室を出ようとして、床にあるものに気付いた。

どうやら俺が思ってたよりも気絶していた時間は長く、そして事態は悪い所までいったらしい。

床に着いた血痕、しかもよく見れば壁などにも血が飛び散っている

為、この執務室で誰かが殺されたらしい事が分かる。

いや、死体はないから致命傷だったか？

「ドラウディロンが死んでなきやいいが」

執務室から出るとまずどこに行くかを考え、漂ってくる濃い血の匂いに眉を顰め、そちらへと向かう事にした。

道の端に転がるビーストマンの死体、進めば進むほど増えるそれに頭が痛くなってくる。

全ての死体が一太刀にて屠られている事からしてこの先にいるのはレイだろう。

この国の冒険者や衛兵にこれは出来ない。

問題は殴られて死んでいるビーストマンが一匹もない事だ。

レイの事だからわざわざクリームを連れ回して行動する様な事はしないとは思っていた。

だがこの様子だと恐らく連れ回す様な事をしないどころかクリームを城門前に放置したのではなからうか。

正直今の洗脳されてるクリームは自分で思考する事が出来ない時点で役に立たない。

なので今のクリームが出来る仕事、向いてる仕事は防衛だろうと考えた。

守っててくれと言っておけばそれだけで命令を果たそうとしてくれるだろうから。

考える必要が無い仕事だから。

しかし考える必要が無いと言っても臨機応変に対応はしなければならぬ。

だがそれすらもクリームは出来ないだろう。

なので城門前でクリームに言っておいたのだ、レイの指示に従って動け。

レイに言ったのだ、いざとなったら敵のど真ん中に放り投げると。つまり、いざとなったら放り投げられるくらいの距離にいてくれと。

「そこまで言ってなかった俺が悪いな、こりや」

なんだかんだで箱入り娘であったレイにそこまで期待をしたのが間違いだっただろう。

当然だ、分からない事は出来ない。出来ない事をやらせようとしても出来ないに決まっているのだ。

だからこれはそこを考慮しなかった俺のミスだろう。

「悪かったな、レイ」

「……なにが？」

壁に寄りかかって蹲り、少し荒い呼吸をしているレイに謝罪する。

唐突に謝罪されたレイは少しイラついているように見えた。

「いや、俺の伝達ミスの所為でこうなっちまったからさ。今度から気を付けなきゃなって」

「……違う」

「？」

「これは、貴方の所為じゃない。私が……」

そう言っただけで俯くレイ。

どうやらイラついていたというよりも落ち込んでいたようだ。

屈んでその頭に手を乗せ、優しく撫でてやると目だけをこちらに向けて見上げてくる。

「うし、それじゃあ両方悪いって事で！ また今度何かあったらその時に気を付けようぜ？」

「……なにそれ」

「いいんだよ、無駄に失敗を引き摺って怖がってたって仕方ねえだろう？ 楽に行こうぜ」

「……ふふ、そうね」

固く嚙んでいた唇を緩ませて微笑を浮かべるレイ。

同時に肩の荷も下りたようで、体から力が抜けてリラックスし始めた。

「つと、そうだ、ドラウディロン知らないか？」

「どら……？ あ……あっちに逃げてったわ」

そう言っただけで指さすレイ。

一瞬の間とその後の反応から察する。

完全にドラウデイロンの事頭から抜けてたな？ まあいいけども。

「どれくらい前に行ったんだ？」

「んー、そんなに前じゃないわ、5分もないわね」

「それなら急げば間に合うか」

頭に置いていた手を離し、立ち上がる。

あ……つと残念そうに声を上げるレイの誘惑をなんとか振りほどいて走りだし、言っておくべき事を思い出して振り返る。

「レイ、クリム回収しといてくれ！」

「……今腰が辛いんだけど」

腰？ 何で腰？ どっかで打ちつけたのか？

疑問に思いながらも言葉が続ける。

「まあそれが治ってからのでもいいさ。どうせビーストマン殲滅するまでに1時間くらいかかるしな」

「それなら、まあ」

「頼んだぞー！」

そうして今度こそ走り出す。

方向は分かったが何処に逃げたのかは分からない為なるべく急いで見つけなければならぬ。

ドラウデイロンが死んでも蘇生出来るか分からないからだ。

蘇生は生命力というものを消費して行われる。

そしてその生命力は戦闘をしたり鍛錬したりといった自分を鍛える行為で増えていく。

そして蘇生した時に蘇生された側の生命力が足りなかった場合、その者は灰となって消えてしまう。

竜王とはいえ、ほぼ引き籠ってゴロゴロしてるだけで運動をしていないドラウデイロンが蘇生されて生命力を残しているかは分からないのだ。

だからなるべく死ぬ前に回収したい。

かといって特にヒントも無く見つけられる筈も無く……と思ったその時、一匹のビーストマンを見つけた。

何処かへと向かって走るビーストマンと記憶にある5年前の城の

構造を思い出しながら、あのビーストマンが何処へ向かっているのかを考える。

確かあの先は……

(テラスか！)

大理石の床を砕く程の踏み込みで通り際にビーストマンを殺し、そのまま続けて加速する。

テラスへはすぐに着き、屯っているビーストマンを見てここにドラウディロンがいると確信する。

「邪魔だッ！」

背を向けているビーストマン共を容赦なく切り捨て突き進む。

途中で流石に気付かれたが、だからといってビーストマン如きに止められる筈も無し。すぐにテラスの端が見え、ドラウディロンの姿も見えた。

……後ろに傾いていくドラウディロンの姿が。

「んなっ!？」

馬鹿な、自殺するつもりなのか!?

そう思い一瞬混乱し、直後聞こえてきた声に冷静になり後を追ってテラスから飛び降りた。

「我が国民達よッ！」

声を張り上げるドラウディロン。

その目には俺の姿が映っていて、しかしドラウディロンは何の反応もしない。

(目が見えていないのか！)

「諦めるなア！」

そんな重体でもなお民に向けて諦めるなど発破をかけるドラウディロンにこのポンコツ姫は5年前から変わってないかと苦笑する。

「進み続ければ、希望は見える！」

落ちていくドラウディロンに手を伸ばす。

だが駄目だ、間に合わない。

このままではドラウディロンが地面に落ちる方が早いだろう。

「英雄は、すぐそこだ！」

げぼつと吐かれた血が俺の右目にかかる。

ッ、くそ！

手を後ろに向け、しかし掌はこちらに向ける。

「《シヨックウエーブ／衝撃波》！」

放たれた魔法は俺の背中に当たり、体が勢いよく弾かれ落下の速度が速まる。

(ギッ)

背骨が折れそうな痛みが走り、しかし今度こそ間に合うと手を伸ばす。

そうして肩に手をかける事に成功し、抱き寄せようとして

「……嘘つき」

その声に一瞬思考が止まり、俺の事を言っているのだと即座に理解した。

「……悪い」

「！」

今度こそ止める事なく抱き込み、体をひねる事で自分の体を下にした。

「遅れた」

直後ゴツつと、全身の内臓がひっくり返ったかのような激痛と共に衝撃が走った。

ドラウデイロンを抱き抱えている為受け身をとる事も出来ず、しかなるべく手の中のあるものに衝撃が行かない様に細心の注意を払う。

「~~~~アあッ」

意識が一瞬飛びかけ、即座に気絶している場合ではないと気力で引き留める。

「ガッぐ、はあ、ドラウデイロンは……まだ生きてるか」

痛みを堪えながら腕の中に収まる傷だらけで死にかけのドラウデイロンを見下ろし、目を細める。

こうなったのは俺の所為なのだという事を突き付けられている気がして罪悪感が湧く。

「悪いな、助けてやるって言ったのに……」

既に魔力は枯渇気味だ。

吐き気は収まらず脂汗が滲む。

それでも無理矢理魔力を回し、発動させる。

「オーバードマキシマイズ魔法上昇最強化」《ヒール／大治癒》

少しだけ範囲を広げた治癒魔法で自分とドラウデイロンの傷を治す。

ドラウデイロンを見れば穏やかな寝息を立てて静かに寝ていた。

その事に安堵し、同時に落下音に引き寄せられて集まり始めたビー
ストマンを見て立ち上がる。

使える魔法は少ない。

《ドラゴン・ライトニング／龍雷》でも使おうものなら即座に気絶するだろう。

どうするか悩み始めた時、袖を引かれた。

バツと振り返り下手人を見る。

「……………」

「く、クリム……？」

未だ城門前で防衛戦を続けていると思っていたクリムが其処にいた。

命令を無視した？ 何故？ まさか自分で考えて行動しているのか？

混乱する俺をよそにクリムは俺の腕の中で眠るドラウデイロンを

奪い取り、俺の服の襟を掴んで引き寄せる。

そうして屈まされた俺にキスをした。

《マジック・トランス／魔力譲渡》

「！」

キスをされた唇から魔力が流れ込んでくる。

まるで血液が逆流するかの様なその感覚はとても気持ち悪く、しかし吐き気と脂汗は静まっていく。

そうして魔力がおよそ3分の1ほどまで溜まった所で唇が離され、銀色の橋がかかった。

「助かったが……何で」

「……後で話があるのであります。さっさと終わらせて来なんし」
「!?」

あまりの衝撃に思考が停止し、即座にフル回転しました。

喋った!?! え、今クリム喋ったよな!?!

「そのアホ面はなんでありんすか? ほら、ぼけっとしてないでさっさと片付けて来なんし!」

そう言っつて尻を叩いてくるクリムに後で話をしなければいけない
など考えながら、ビーストマンへと突撃するのであった。

従属の在処

ツンと重力に逆らうように上向いたまつ毛がふるりと震える。

ぱちりと開かれた瞼の奥、薄い涙の膜で覆われた蛇科特有の細長い瞳孔をした碧色の瞳はとろんとしていてまだ寝足りない事を主張していた。

手を猫の様にしてくしくしと顔を擦り目脂や涎の痕を拭い背筋を伸ばしてぷるぷる震える。

「んうあ……」

無駄に艶めかしい声を発して起き上がり、寝惚け眼のまま周囲を見渡して其処が自分の部屋だと理解すると少女は再び横になり眠りに着いた。

すやすやと母の手の中で眠る赤子の様に温かく穏やかな眠りに……

「じやっない！」

もふもふとしていて温かい代わりに少し重量のある布団を起き上がると共に放り投げて叫ぶ。

まるでギャグ漫画の様な起床をかました少女、ドラウディロンは頭を抱える。

なんで私は呑気にベットで寝てるんだビーストマンはどうしたというかそもそも私は

城の最上階から飛び降りて死んだはず。

背中に氷を入れられたかのようなゾクツとした感覚に鳥肌が立ち、自らの腕を掴んで蹲る。

そうして腹の痛みを感じない事に気付いてバツと服を捲り上げる。

そこにあつたのはビーストマンに斬られ血に濡れてぐしゃぐしゃになったお腹ではなく、つるりとした起伏の無い綺麗なお腹であった。

「傷が無い……足も」

瓦礫などが転がる場所を走り回った筈の足裏に傷や汚れは一つも無く捻った足首も痣の一つも無い。

軽く動かしてみるが動作に支障は無く、痛みも無い。

むしろ前よりも肌のハリや艶などが良くなっている気がするのは気のせいだろうか。

「そういえば」

意識が途切れる直前、リビドーの声を聞いた気がした。

耳を澄ませても人々の悲鳴や戦闘音が聞こえてきたりはしない。

という事はもう王都に侵略してきたビーストマンは全て殲滅されたという事でいいのだろうか？

……どうかそうであってほしい。

もう私以外の国民が……なんてそんな最悪の想像が現実でない様に祈る。

ベットから降りて靴を履き、扉をゆっくりと少しだけ開ける。

廊下は瓦礫が転がり、壁や床にはまるでバケツをひっくり返しながら歩いたかのような赤いシミが広がっている。

しかし廊下の端っこで山のように積み重なっていたビーストマンの死体は消えており、影も形も無い。

足音は無く危険はなさそうだと確認して部屋を出た。

最初から意識はあった。

何が起きて何をしているのか理解は出来なかったけど、それでも意識は最初からずっとあった。

全ての記憶がぼんやりとっていて曖昧だった。

女に手を引かれて歩いた記憶もある。

そうして辿り着いた場所で何か大事にしていた物が奪われた感覚も。

ただ、大事な物が奪われた筈なのに何故か不快には思わなかった。

少しずつ体の熱が昂り薄らぼんやりとした意識が更に薄れると共に腹の中に生まれた熱、それに好ましさすら感じた。

この時点で大分頭の霧は晴れていた。

ただ、はつきりと自分の意識が覚醒したのはその後の事だ。

防衛を命令された。敵は毛むくじやらの毛玉。

命令した男はその後何処かへと去っていったがその命令を守る事こそ自分の使命、存在価値だと思えた為にただ命令に従い黙って立っていた。

暫く立っていると向かってくる毛玉の大群、これを後ろの門より先に進ませないのが私の仕事だ。

ただ私は1対多には向いていなかったらしい。

私が10を相手にしていると1は通られてしまう。

周りで突っ立っている者達は約に立たないがこれらも守らなければいけないのだろう。

しかし既に手一杯だというのにそれらを守っている暇など無い。

一緒にいたレイとかいう女は何処へ行つたのやら戻ってこない。

こういう時の為にあの男は私の傍に居ろと言っていたのに何処へ行ったのだろうか。

私が9、あの女が1倒せば解決するというのに。

そう考えている間にもまた倒しきれなかった分が通り過ぎていく。

なるべく早く排除して侵入された分を殺しに行かなければならないというのに現実は無常に私一人では無理だ、このままでは任務の失敗だと告げる。

任務の失敗は嫌だ。

失敗をする者は役立たずだ。

役立たずは捨てられる。

私はまた、置いていかれる？

私を置いていかないで。
そんなのは絶対に嫌だ。

「なら、こうするしかないでありんすな」

気付けば視界にかかっていた靄は消えていた。

手には鏢に水晶が嵌められた身長程もある巨大な槍があり、柄部分からは細長いチューブが纏う鎧の背中へ向かって伸びていた。

深紅の鎧は全身を隙間なく覆う全身鎧であり、鳥の羽の様な装飾の付いた顔が見えているヘルメットの様な兜を被っている。

肩には兜と同じ様な鳥の翼をイメージした装飾が付いており腰からは股間部分を見せない貞淑さを示すかのような真紅のスカートが巻き付いていた。

そんな槍と鎧には身体能力を強化する効果が付いているのかどこから湧いてくる力が全能感をもたらず。

記憶はぼんやりしていて細かく思い出せない。

しかしこれならば後れを取る事は無いだろう。

唐突に光の粒子が集い鎧の体を成した私に毛玉共が侵攻を止めて警戒している。

このまま此処で立ったまま守りに入れば一匹として通さずには済むだろう。

だが問題は既に侵入された分の毛玉達だ。

そこら辺で突っ立っている塵粕共と同じ程度の力しかないとするればそうして守っている間に中にいる塵粕共が全員死ぬことだろう。

それでは駄目だ、それではどちらにしろ命令は達成出来ない。ならばどうしなければいけないか。

「さっさと一匹残らず殲滅してやらあアあ!!」

「と、いう訳でありんす」

「いや、気負いすぎだろ」

ぶっちゃけ軽い気持ちで命令したからそこまで失敗に怯えられてもお、おうとしか言えないんだが。

今居るのは竜王国王城のどこかの部屋だ。

魔力を分けられて王都に入り込んだビーストマンを殲滅した後にはドラウデイロンを城の中でも一番豪華だった部屋に適当に寝かせ、レイとクリムを回収して適当な部屋に入り込んだ。

レイは抱かれたような顔をしていたがそれよりも疲れが勝ったのか、ベットに潜り込んでやすやとその綺麗な寝顔を晒していた。

今はそれに混ざろうとレイに向かってダイブしようとしたクリムを空中キヤッチし何故喋れるようになったのかを聞いている所であったのだ。

「で、なんか思い出せたのか?」

「んー、とても崇高な存在である至高の御方に付き従っていた筈でありんすのに、御方の名前も姿も帰るべき場所すら思い出しんせん」

「うーん、ちよい記憶覗いていいか?」

「勝手にするでありんす」

ほんじゃ勝手に読むわ。

何時もの気色悪い工程を経てクリムの中へと入りこみ記憶を読む。

以前あった鎖はだいぶ無くなっていて血の滴る赤い鎖の割合が増えていた。

引っ張ってみればぶるぶると震えて血をまき散らして触れるなど伝えてくる。

それを無視して更に引っ張ってみれば血が結晶化して棘の様に鋭く尖り反撃をしてきた。

これは無理に手を出したら現実の方でクリムに攻撃されかねないなど判断し手を放す。

鎖は少なくなっているとはいえ、それでも密集具合にそう大した違いは無く隙間が出来ていたりはず覗き込む事が出来ない。

試しに血が滴っていない方の鎖を引っ張るがこちらはこちらでピクリとも動きはしなかった。

(収穫は無しか)

感情へと対象を変え観察を続ける。

以前見えたのは吸血衝動とぼやけたぶれいやーであろう人物であった。

今回は何が見えるかなと覗き込んでみれば見えるのは一面のピンク色。

(……はい?)

一瞬呆けたがよくよく見てみると少しだけ色が違うピンクが混じっている。

内容を確かめてみれば私の目を覗き込むために屈んで見えるようになった鎖骨がエロいだのその綺麗な首筋に噛みつきたいだのこの目の前にある唇に吸い付いていい？ 駄目？ いいよねだのと煩惱塗れであった。

なんだか身の危険を感じるので即座に退散し、タレントも切った。身を起こしてクリムから少し距離をとり、首に手を置いて壁に背を預ける。

「んあ、もういいでありんすか」

「おう、もういいよ、何も見えなかったから」

「ああ、わらわの至高の御方、どちらにいらっしやられるでありんすか……」

お前の記憶の奥底じゃないかな。

ぶっちゃけ予想が当たってるとしたらその至高の御方とやらは死んでいる。

もし死んでなかったとしたらそいつはまず人間じゃないぷれいやー、スルシャーナと同タイプのぷれいやーだろう。

人間のぷれいやーが吸血鬼含めたモンスター^の従属神を伴っていた事は無いらしいしな。

ただ気になるのは六大神も八欲王も従属神は全て滅ぼされた筈であること。

弱い従属神であるなら逃げられた事に気付かなかったとかはあるかもしれないが、レイの予想が当たっていればクリムの実力は俺よりも上だ。

そんな力を持つ従属神を特に人類を守る事もせず規律だけは強いてくる評議国の白金^{ブラチナム・ドラゴンロード}の竜王が見逃すかと聞かれると無いだろうと答える。

そして計算してみると分かるのだがぷれいやーが現れる周期である1000年、それが近付いている。

そう考えるとクリムは六大神や八欲王ではなく新たに現れたぷれ

いやーの従属神ではないかという予想が出てくる。

もしこの考えが当たっているとしたらそのぷれいやーはモンスターの姿をしたぷれいやーである。

そしてそういったぷれいやーはスルシヤーナを除き全て極悪な性質をしていたらしい。

となると最悪の場合は……

「八欲王の再来、か」

前ならばむしろ喜んでいただろう。

俺を殺してくれる存在が来てくれたと歓喜に震えながら特攻していた筈だ。

だが今は違う。

すう、すうと可愛らしい寝息を立てながら眠るレイを見やる。

俺はこいつに出会って変えられちゃったからな。

不快感は何一つなく、逆に満足感を感じながらその頭を撫でる。

寝るのに邪魔だと言いたげに眉を顰めて呻るレイに思わず笑みが零れた。

「おんしはそ奴が好きなんでありんすか？」

「おー、好きだよ、大好きさ。こいつさえいれば他の物は何一つ要らないくらいにはな」

「……ふうーん？」

ギシツとベットが軋む音がした。

見ればクリームが腰掛けていたベットから立ち上がり自分の服を弄っていた。

何がしたいのかと思っていると胸パットが無くなった事により少し胸元が緩くなっているポールガウンがはらりと落ちた。

何故か下着姿になったクリームを呆然と見ているとそのままやたらくねくねと腰を大きく動かしながらこちらに歩いてくる。

「……何してんだ？」

「そっちこそなににしてるでありんすか、裸の私が此処に居ると言うのに」

「あー、それは襲えと言ってるのか、つまり？」

どうやら先程の謎のくねくねダンスは俺を誘っているつもりだったらしい。

ぶつちやけ見た目の幼さと動きの奇怪さの対比に少し引いていた。

「お前の言う至高の御方とやらはいいのか」

「私の処女を奪っておいて今更でありんすよ」

「……まあいいならいいんだけどよ。あ、他の部屋でやるからな。ここでやったらレイが起きる」

「ぐぬ、むしろ叩き起こして見せつけたいくらいでありんすのに」

「……なんだ、レイに嫉妬でもしたのか？」

「嫉妬？ わらわが？ ハッ、笑えない冗談を言わないで欲しいでありんす」

「じゃあ何で急に」

「おんしのそ奴を見る目が気に入らなかつただけでありんす。その目を私に向けるようになったおんしの姿を見たそ奴はどんな表情をするか……キキツ」

ちよつと捻くれてるけどそれを嫉妬って言うんじゃないすかね。

歪んだ笑みを浮かべて喉を鳴らすクリームを見てそう思う。

まあ可愛い部類かとそれに乗る事にした。

布団ごと抱き抱えた所為で芋虫みたいになったレイをソファに移動させベツトに腰掛ける。

それを見てこのままこの部屋でやろうとしている事に気付いたクリームがぱあつと顔を輝かせた。

……そこまでレイを煽りたいのかと少し呆れると共に違和感を感じる。

俺だけじゃなく、レイもクリームの大事なものだとか催眠を掛けた筈なんだがな。

「まあいいや。じゃ、やるか」

好き嫌いの感情

胸パットが無くなりサイズが合わなくなったことでブラが付けられなくなった今のクリームは綺麗なピンク色の乳首を晒してパンツ一丁だ。

そんな状態で何故か笑みを浮かべて突っ立っているクリームの腕を掴みベツトへと寝かせる。

……なんかこれだけ聞くと全くエロさを感じないな。

というか駄目女の介護にしか聞こえん。

「俺が進めるか？」

「わらわが握るでありんす」

そんな主語が無い言葉で意思を確認し合うと互いの位置を変えた。

俺が上でクリームが下の状態から俺が下から見上げ、クリームがそんな俺に跨り見下ろす体勢に。

まな板に乗った食材をどう調理するかを迷うかのように血よりも赤い舌で唇を濡らす。

そんな彼女が可愛らしく、髪に手を入れればばむふうー！ と背を反り、頭を押し付けてくる。

まるで猫の様だと思えば満足そうに目を細めて息を吐く様子も猫っぽく見えてきた。

案外獣人なりきりセット猫バージョン（定価金貨1枚）でも買って付けてやれば似合うかもしれない。

なんならレイも猫っぽいし思い切って2セット買うのもいいだろう。

最初は嫌がるだろうが押しに弱いレイの事だ、5分ほど粘ればなんだかんだで付けてくれツたいア！

急に横腹に感じた痛みに見てみればクリームが不機嫌そうな顔でこちらを見下ろしていた。

先程まで頭を撫でられて上機嫌だった癖に急に一体どうしたのだろうか。

そう考えて戸惑い交じりにクリームを見るとふんっ、と鼻を鳴らして答えた。

「情事中に他の女の事を考えるからでありんすえ」

「え、なんで分かった」

「そんな露骨にニマニマしてたら分かって当然でありんす。どうせあの女の事を考えていたんでありんしょう」

そういつてこちらを見下ろしたまま顎だけをレイの方へ向けるクリム。

どうやら俺の表情を見て誰の事を考えているのか察したらしい。

「悪かったよ」

「ふん、本当に反省してるでありんすかえ？」

「だから悪かったって。ちゃんと反省してる、よ！」

「ふきやあ!？」

股に手を伸ばし、パンツ越しに小さく浮き出た突起を親指で押す。処女だったくせにやたらと敏感なクリムの体はそれだけでビクンと跳ね、腰砕けになる。

少しくにくにと突起に触れない様に弄ってみれば湿り気を帯びた温かい感触が指に触れた。

そんな俺に何か言いたげにしながらも喘ぎ声を出さない様に眉を顰めて歯を食いしばるクリムに可愛いなあと思いつつその頭をよしよしと撫でる。

それが不満なのか歪んだ笑みを浮かべて涙目でこちらを睨みつけてきた。

「……仕切るのは私よ」

「お前の反応が可愛らしいのが悪い」

「そう、反省する気は無いつて事ね」

額に青筋を浮かべながら口調を変えたクリム。

そんな反応に少しやり過ぎたかと謝ろうとした瞬間、バツと手が掲げられた。

その手には魔法陣が浮かんでいる。

「おま、そこまですんのか!？」

「所詮人間ごときが私を見下すからよ、おほほほほ！」

「見下しちやいねえ！ ただ反応が可愛いと思っただけだ！」

「~~~~~《パラライズ／麻痺》ツ!!」

「おおおおお!?!」

魔法名を叫ぶと共に掲げられていた手が振り下ろされる。

俺の胸に叩きつけられた魔法陣は、掬い上げた手から零れ落ちる砂の様にサラサラと宙に溶けて消えた。

まるで長時間座り続けた時の足に走る痺れのような感覚、それが全身を包む。

そんな感覚に反射的に起き上がろうとして、胸にパンツと手が叩きつけられた。

その衝撃が体に走る痺れを介して全身に広がっていく。

「~~~~~!?!」

「ふん、ミイラにしてあげるからそのまま黙って横になってなさい」

そう言っただけで嘲るように嗤い、ズボンの上から俺の股間を握った。

優しさも何もない力の入った驚掴みに、まさか潰す気じゃないだろうなど股間が縮み上がる。

再生は出来るが今の体中に痺れが走って敏感な状態だと普通に一発でシヨック死しかねない。

いざとなったらタレントで無理矢理止める事も考慮しなければならぬだろう。

「……頼むから、優しく触れよ」

「あら？　もしかして潰されたかったでありんすかえ？」

そう言っただけでズボン越しに球を掴み、指先でコリコリと弄るクリーム。またあの変な喋り方に戻ってる事からしてもう怒ってはいないようだ。

なので、これは私が攻めだから暴れるというアピールにすぎないのだろう。

「ぐ、ぬ……」

とはいえそれを受ける側からしたらシャレになってないが。

「そないな顔せんと、安心しななし。精々出なくなるくらい搾り取る

程度でありんすえ」

驚掴むのを止めてズボンの中にそろそろと侵入してきた指の冷たさに目を細める。

もう片方の手でズボンを脱がされ、既に弄られて勃起していた肉棒が空気に触れた。

俺の太ももを持ち上げるように腕を回し、顔を近付けてすうーと息を吸い込み匂いを嗅ぐ。

まだ汚れを落としていないのでかなり臭う筈だが、彼女はそれを嗅いで逆に満足そうに笑みを浮かべた。

「ふふ、くっさいでありんすねえ」

天を向く肉棒が掴まれ裏筋に舌が這う。

ザラザラとした感触に体が跳ねた。

普段ならこの程度何という事は無いのだが、痺れて敏感になっている体が反応してしまう。

股間から骨を、筋肉を、神経を伝って腰、腹、胸と昇ってくる衝撃が脳を揺らす。

「あつ、があつ」

駄目だ。

確かに気持ちが良い。

だが本能が叫んでいる。

この快楽を受け続けたら廃人になると。

「それっ、やめっ、死ッ！」

「あら、そんなに気持ちよさそうなの？」

「頭、飛ぶッ、ぐううっ！」

「別に廃人になってもいいでありんすよ？ そうしたらわらわが永遠に飼ってあげるでありんす」

そう言つてこちらの言い分を無視して美味しそうに肉棒を舐め続けるクリーム。

ある程度のは受け入れるつもりであったがこれは流石にやりすぎだ。

どうにかして止めたいが、とめどなく襲い来る衝撃に集中を乱され

て魔法が使えない。

「ふふふ、ぴくぴく動いてるでありんす」

ぱくりと、舐めていた舌が離され、亀頭を啜えられる。

にゆるにゆると動き回る舌がエラを舐め回して綺麗にすると、亀頭とエラを唇が行き来する。

脳が襲い来る痺れに屈服し始め視界がぼやけてくる。

気持ちいいんだか痛いんだかよく分からなくなってくる感覚が怖い。

口が離され、クリームが一息つく。

ようやく一旦落ち着けると俺も息を吸い、直後走った快感に射精しそうになって気を締めた。

見れば亀頭の手先、鈴口に舌が伸ばされ、まるで飴玉を舐めるように漏れ出す我慢汁を拭われていた。

そうして我慢汁を吸いつくすと、今度は蛇の様にうねうねと舌を動かしながら、出ないなら吸い出すとでも言いたげに尿道を抉られる。

出ない様に閉めた蓋をこじ開けられていく。

「出そうでありんすか？」

その言葉にこくこくと返事もせずに頭を縦に振る。

それを見て笑みを浮かべるクリームにもういいかと締めていた気を抜く。

蓋が外れた事により昇ってくる熱の塊、その全身を焦がす様な気持ちの良い感覚に目を細め

「でも、だあくめ♡」

「っ、ツ、っゝゝツ!？」

肉棒の根本に指が回され、締めるように力が入れられた。

登り始めていた熱が無理矢理塞ぎ止められ、射精して快楽から逃げられなかった事に絶望する。

思わず何故と睨みつければクリームは恍惚とした表情で俺を見下していた。

「うふふ、楽しいでありんすねえ」

がぱっ、と口が開かれる。

尖った八重歯の目立つ綺麗な歯並びにそれを包む赤、その奥に見えるピンク色の舌が口内でうねる。

そんな口の中を俺に見せつけながら、ゆっくりと肉棒を呑み込み始めた。

まるで見せつけるようにゆっくり、ゆっくりと勃起しすぎて脈が浮き出た肉棒を口に収めていく。

時間をかけて入れたり出したりを繰り返して少しずつ深く深く呑み込んでいくクリーム。

「うあ……」

「むふー」

長い肉棒が全てクリームの口に消える。

小さな口で無理矢理呑み込んだ所為で口は埋まり喉は膨れ、息など出来ていない。

だがそんな少しずつ苦しくなっていく感覚すらも楽しんでいるのか、笑みを湛えた目が満足そうに細められる。

そうして舌を動かそうとしたのか口をもごもごとさせ、肉棒が邪魔で動かせない事に気付くと、今度は頭を縦に振りだした。

ぐぼぐぼと音を立てて抽送され、それに合わせてざらざらとした舌が裏筋を擦っていき、ガジツと龟头を齧られた。

「あつ、がつ、出ツー！」

指で止められている事など関係ないともいうようにクリームの口の中へと熱の塊を送らせた。

抑えられていた精液が一斉に飛び出す。

龟头だけを口の中に入れていたクリームはその勢いに喉を打たれ、飲み込む事も出来ずに咽て吐き出す。

抑えが無くなった肉棒はそれでも気にせず精液を吐き出し続け、クリムの銀を白で染めた。

「ハアツ、ハアツ、ぐう……」

「うふふ、濃いでありんすねえ」

「も、いいだろ」

「あら、何を言ってるでありんすかえ」

射精した事により少し萎びた肉棒が掴まれ、ぐにぐにと擦られる。すぐに元気を取り戻した肉棒を鼻歌を歌いながら眺めるクリーム。その体は肉棒の上であり、勃起した肉棒を楽しそうにクチャツと膣口に押し付けていた。

「おい、冗談だよな、せめてちよつと休もうぜ、今敏感でそれどころじゃ」

「そーにゆーでありんす!」

「!!!!」

躊躇いなく下ろされた腰に合わせて肉棒が呑み込まれていく。

既にドロドロに濡れていた膣は一切の抵抗感を与えることなく、しかしねつとりと絡みついて肉棒を迎え入れた。

そのままドチツと子宮口に当たるまで挿入され、クリームの小さな膣では呑み込み切れずに余った部分がクリームの体を宙に浮かせた。

「む」

「いつあツ、で、ああアツ!」

それが気に入らないのか不満げな顔を浮かべたクリームは俺の腹に手をつき、足に力を入れた。

徐々に腰を下ろし、メリメリと入ってはいけない場所へと無理矢理入れていく。

射精した直後で敏感になった肉棒がそんな感覚に耐えられる筈もなく、ぴゅっぴゅっぴゅっとして射精したのか漏れ出したのかさえも分からないような小さな絶頂を繰り返す。

そうして出てきた尿だか精液だかも分からない液体がクリームの膣に塗り込まれていく。

「はっ、ふう、これは、思った以上に、キツイでありんすねっ」

「ツ、だったら、終わらせてどけ!」

「やーでありんす! うふふ」

そう言っつて無邪気に笑うと手を後ろにやり、陰囊を掴んで揉み始めた。

ふにふにと拙く触るその手は小さく柔らかい。

その小さい身長からして幼い子供にしか見えないクリームが子供の

様な笑みを浮かべて肉棒を呑み込み精液をねだる姿はとても性欲を煽られる。

「クソツ、ならせめて麻痺を解け！」

そう言うのと浮かべていた楽しい笑みを引つ込めて不満げにする。

「どうせそない言つて上に立つ気でありんしょう！ わらわが仕切るでありんす、黙って射精して気持ち良くなつてなんし！」

「立たねえからこれを解け！ もう気持ちいいを通り越してひたすら痛えんだよコレ！」

「ふん、そんな嘘を言つても無駄でありんすよ」

叫ぶ俺にべちつと腰を叩きつけて肉棒を締め付けた。

「この通り、肉棒は正直でありんす！」

「痛くても気持ち良くても男は勃つんだよ！」

「さつきからうだうだとうるっさいわねえ」

叫びの応酬に入り込んだ新たな声。

思わずそちらを向けば芋虫状態のレイが寝惚け眼でこちらを睨みつけていた。

「やるならやるで静かにしなさいよ……ふわあ……ふ」

そう言つてあくびをするレイを見ていると顔を掴まれ、ぷくーつと頬を膨らませて不機嫌さをアピールするクリームと目を合わせられた。

「今セックスをしているのはわらわでありんす！」

「……ホントになんてお前そんなレイの事嫌つてんだよ」

「フン！ 任せられた仕事を放り出す役立たずなどいらぬでありんしょう」

どうやらレイが防衛を放り出した事で憤つていたらしい。

そもそも俺は命令したつもりも仕事として任せたつもりもないんだが……

「まあその事に関しちや俺もレイも反省したからいいだろ？ そもそも俺がレイにちゃんと事細かく言つてなかつたのが悪いんだしな」

「命令を受ける者として言われぬとも察して動くのが当然でありんす。しかもそれだけならまだしもあの女は呑気に自慰をしてたでありんすえ!?! 股間から漂つてくる雌の匂いでわかるでありんす！」

「あー、まあそれはどうかとは思いますが、そも俺とレイは上司部下の関係じゃないしな」

正直そこまで気負われても困るし、俺的には防衛自体はどうでもよかったからな。

俺にとつてのクリム的な位置に置いてるだろうから出来るだけ守っておきたかったというのは確かにある。

ただ、俺が守りたかったのはあくまでもドラウディロンであり、竜王国はサブのそのまたサブだ。

ドラウディロンさえ生きていれば別に竜王国は滅びていても構わなかったのだ。

……ついでにぶつちやけて言えば、そのドラウディロンすらも正直サブだ。

俺的にはレイとクリムが生きているのがメインであり、それ以外は全てがサブだったのだ。

だから例えレイが自慰をしている間にドラウディロンが死んでいったとしても別にそれはそれでよかったのだ。

だってレイが自分のしたい事をしながらちゃんと怪我一つ無く生きていたのだから。

「だからそこまで怒る事でもない。それでも収まらないなら俺が代わりに謝るからさ、許せ」

「……ふん、おんしは少々あの女に甘すぎるでありんす」
クリムがくるくると指を宙で巻いて魔法陣を描き、それを握り潰した。

それと同時に体の痺れが解け、クリムが肉棒を抜きにかかる。
「ん、どうした。もうやらないのか」

「……どうせあの女とするんでありんしょう。ならわらは邪魔でありんす。……それに、少し冷めてしまいいんした」

「別にいいわよ、そのままヤッてて」

そんなクリムを精液が付いて汚れる事も気にせず後ろから抱きしめるレイ。

その手は腹に回されており、クリムの小さな可愛らしい臍に指を入

れてぐにぐにと穿っていた。

「んなつ、いつの間にッ」

「ふふん、油断しすぎね従属神サマ？」

「ツ離すでありんす！」

そう言つて暴れだすクリームを気にせず抱きしめながら陰核をぐにぐと押し潰した。

途端、背をピンツと伸ばして目を白黒とさせ、顔を歪めて倒れこんでくるクリームを抱き留める。

「んうう、あつ、グつ、このクソ女ア……ッ」

「ふふ、怖い怖い。嫉妬してる女によがらせられるのはそんなに嫌かしら？」

「嫉妬お？」

「んな、黙ッふああ!？」

文句を言おうとベツトに手をついて体を起き上がらせ始めたクリムの陰核が潰され再び崩れ落ちた。

羞恥と快樂に震えながらきゆうきゆうと締めてくる膣は格別なほどに気持ちがいい。

「そう、嫉妬よ。私を嫌ってるのは間違いないけどね」

タレントを使つてみる。

其処に映るのは【友好度】 98 / 100 という文字。

確かに繰り上がりまであと少しではあるが、未だに友好度である事からしても別に嫉妬へと繋がる要素は無いと思うのだが。

そう思いながらふふんと面白そうに笑うレイを見て首を傾げる。

「ようするにこの娘はね、自分の主が自分以外を見てるのが嫌なのよ」

「主？ クリムの主はぶれいやーだろ？」

「前はね。でも考えてみなさい、この子は主に仕える事が使命な従属神よ？ 主の事を欠片も思い出せない所に主の様に命令をくれる存在がいれば、ついていくでしょう？」

「そんな雛鳥みたいな事があるか……？ 大体それは寄生先としてであつて主として見るのとは違うだろ？」

「あら、この娘だつて十分子供じゃない。私への怒りだつて、ようする

に自分の思い通りにいかなかったから憤ってる訳でしょう？ 確かに正論だし耳が痛いけれど、その内情は可愛いものよ。主として見るのは私もよく分からないけど、強大な力を持つふれいやーに従うという従属神の本能じゃない？」

んな馬鹿な、大体レイの見立てでは俺よりクリームの方が強いんだろう。

その時点でその推測は破綻してる。

というかそもそも俺はふれいやーじゃないし、その血を引く神人でもない。

もしそうならばレイを主として見る筈だ。

そう思いながら俺の胸に顔を埋めてピクリとも動こうとしないクリームに目を向けた。

俺の上に跨り顔を伏せたままなのは変わらず、きゆうつと握り締められた手だけがふるふると震えている。

試しに横髪をかき上げてみれば真っ赤になっている耳が顔を覗かせた。

「……俺はお前の主じゃないぞ」

「……ふん、そないな事は知ってるでありんす。ただ、何故かわらわの主を思い出しんすと、まるで記憶が弄られんしたように朧げに浮かぶその姿がおんしの姿になりんすから……」

「んーと、それは何時からだ」

「……おんしに瞳を覗かれた時からでありんすえ」

瞳を覗く……まさか俺のタレントか？ 血の滴る鎖を無理に引く張ったから少し影響が出たか？

そういえばその直後にやたら思考がピンク色になっていたり、タレントを解いた時に熱い目で見られたな。

そういう事なら、不思議でもない……のか？

「理解出来たみたいね。それじゃあ」

「ふきやあう!？」

「主として、そんな可愛い雛鳥を犯してみない？」

三度クリムの陰核を潰し、レイが嗤った。

関係悪化

絡みつく膾肉の感触を味わいながらクリムの肩を押してレイに寄りかからせ起き上がる。

「どうする、レイも混ざるか?」

「私は……いい、疲れてるし」

「俺がやりたいんだがな。それに寝る前はやりたがってたろ、んな顔してた」

「……激しくしないでね?」

そう言つて精液の付いた服をパパッと脱いで投げ捨てるレイ。

そんな色気のないストリップショーを眺めていると不機嫌そうにこちらを睨みつけるクリムと目が合った。

思わずレイに視線が行つていた事に気付き、軽く謝罪して何処を責めようかと考える。

服を脱いで戻つて来たレイが片手で俺の玉袋を捏ねながら、もう片方の手でクリムの秘所を弄っている。

残る俺が弄れる場所と言ったら足と腹と胸と顔と腕の計5か所。

ならばと目の前にあるピンク色の豆へと吸い付いた。

「ッ、ふああっ!!?」

強く吸い付けば立った乳首がこちらの口へと入り、緩めればゆるゆると元へ戻っていく。

歯を立てればぷにっとな弾く弾力のある乳首はまるで果物を齧った時の様な飽きさせない食感を与えてくれた。

とはいえ齧つてばかりではこの綺麗な乳首に傷がついてしまう、それは勿体ない。

そう思い舌を伸ばして労わる様に舐めればぷるぷる弾む乳首が淫猥に揺れた。

「んっ、ふう……っ」

レイが手を動かせば身を震わし、俺が舐めれば噛み殺した喘ぎ声が漏れる。

イキそうなのか、段々と締めりが強くなり震え始めたクリームを見て乳首から口を離す。

「レイ、ちょいどいてくれ」
「ん」

それだけで俺が何をしようとしているのかを把握したレイが手を放し、そのままクリームの足首を掴む。

そうして掴んだ足首を持ったまま後ろへと下がっていくと、体勢を崩してひっくり返りそうになったクリームが慌てて抱き着いてきた。

それを気にせず更に引っ張っていくレイを邪魔をするなどでも言いたげな目で睨むクリームに、まあ理解出来ないよなと苦笑しながら倒れていくクリームに合わせて俺も起き上がって膝立ちになる。

そうしてベツトに横たわりながら、足だけが頭と同じ位置にまで上げられたクリームは自分の体勢を見てようやく理解出来たのか俺の背中に回していた手を秘所へとやり、俺が突きやすい様に両手で引っ張って広げた。

「言ってくれば自分でしんすのに」

「そうすると一旦抜かなきゃいけないくなるだろ。ならこっちの方がいい」
「……………んっ」

その言葉に何とか難癖をつけられないか考えながらもごもごも口を動かすクリームであったが、結局思いつかなかったのか腰を少し上げた。

このレイ嫌いはどうにかなんねえかなあと思いつながらも、出された可愛らしい要求に応えて腰を振る。

「んっく……………はあっ」
「おお、締め付けが更にキツくッ」

ただでさえ小さいクリームの膺が更にみっちり逃がさない様に吸い付いてくる。

エラや裏筋などが抜き差しする度に擦られとてつもなく気持ちいい。

先程短時間で何回も射精したばかりという事もあり敏感になった

俺の物では耐えられそうにない。

「あ、あつ、んっ、ああッ!？」

「クソッ、もう出そうだ」

折角体勢を変えたのだからもう少し楽しんでいたい。

そう思いながら気を逸らすために、レイに捕まれたままの足、その膝の裏に舌を這わす。

ゆっくりぴちやぴちやと音を立てながら舐め、時には吸いながら股間を刺激する快感から目を逸らす。

くすぐったいのか気持ちいいのか、それともただの反射か。

膝の裏を刺激され赤くした顔を隠しながらぶるぶると震えるクリムはとても可愛らしい。

「そこ、恥ずかし、舐めなっ」

「そんな甘い声を出しながら言っても意味は無いぞ」

むしろこちらの心をくすぐる良いスパイスである。

そう思いながらも一つ突けば全身を痙攣させながら大きな喘ぎ声が漏れた。

そろそろクリムもイキそうであることを理解して尻に手を置き勢いよくピストンする。

「あつ、あああ、っひッ」

「奥に、出すぞー!」

「あつ、あつ、ああ〜っツ!!」

奥まで突き入れ、どくどくと子宮の中に精液を吐き出していく。

痙攣しながらキツく締め付ける膣肉の感触を味わいながらもピストンを続け、漏れ出る出しきれなかった精液を刷り込んだ。

そうして出し切って一物が少し萎えたのを実感して一息吐き、自分の胸を抱きしめながら快感に震えるクリムを見て即座に再び勃起した。

レイに目配せして手を放してもらい、膝ごと抱えて対面座位に移る。

びくびくと快感に身を震わせながらも落ちない様に慌てて抱き着いてくるクリムに思わず奥まで突き込む。

「っ、ああっ」

「はっ、はっ、くっ、続けるぞ」

「あ、まっ、くくくく!?!」

腰は動かせないで腕の筋力だけでクリームを持ち上げ、再び落とす。

レイの半分、いや、それより少し重い程度のクリームとはいえ、全体重が秘所の一点にかかっては快感よりも痛みの方が強いらしく少し顔を歪める。

だが今となつてはそんな痛みすらも無いよりはいいのか快樂から目を逸らすように目を閉じた。

それを見てため息を一つ吐いたレイがしゃがみ込み、交わっている肉棒と秘所の接合部分に舌を這わせていく。

そうして舐めながら、あまりにも色が付いていないのが気になったのかすすんと鼻を鳴らした。

「……一切匂いがしないわね」

「なっ、嗅ぐな!」

レイの言葉と鼻を鳴らした場所から何処の匂いを嗅いだ感想なのかを察したクリームが慌てて手で隠した。

「そのうちそつちに入れるのもアリかもな」

「なっ、嫌でありんすよ!?!」

「ふーん、レイとはした事あるんだけどな」

「ッ……そのうち、でありんす」

忌々しそうに顔を歪めて心底嫌そうにぼそつと呟く。

レイを比較に出したら何でも言う事を聞きそうだなと苦笑していると、いい事を考え付いた。

「ちよいそこで横になつてもらえるか、レイ」

「いいけど、なにをするの?」

「ちよつとな」

「?」

不思議そうにしながらも素直に横になるレイ。

その上にクリームを乗せてくるりと回転させ向き合わせた。

「……ふーん？　なるほどね」

それだけで理解したのか楽しそうに笑って足を曲げ、クリームが足を伸ばせない様に足の付け根に被せた。

同じく理解出来たらしいクリームであったが、一步出遅れた事で立ち上がれず、そのまま力業で逃げようとしたので逃げられない様にクリムの尻を手で押さえた。

「ツとに、邪魔しかしないクソアマでありんすねえツ」

「あら、この体勢を望んだのは彼よ？」

「……チツ、これが終わったら覚えておくでありんんつあ!？」

「ん、んんっ、ふっ」

逃げられない事を悟ったのか、抵抗を止めてレイに喧嘩を売りに行くクリム。

そんな二人の秘所が上下に重なった場所へと肉棒を割り込ませた。

二つの感触の違うひだが触れている肉棒を呑み込もうと両側から吸い付いてくる。

前後へとピストン運動をする度にクリトリスを亀頭が擦り、ビクビクと腰を跳ねさせる様子がこちらの征服欲を満たす。

だが目的は射精する事ではないのである程度満足した所で腰を止めた。

「ほれほれ、仲良くしろーい」

「私は別にどうも思っていないわよ」

「ぐぬう、この女があー!」

「そんな会話を聞いている俺の方が嫌になって来るんだがな……まあ、そんなに嫌なら嫌がらせでもしてやれ」

「……嫌がらせ？」

「嫌いな女が情けなく喘いでる姿、見たくないか？　それを晒させてやれ、俺も見たい」

「……そういう事ではないでありんすが……」

暫くむぐぐと呻っていたクリームであったが、何かを思いついたのか歪んだ笑みを浮かべ、手を後ろに回して俺の肉棒を掴む。

そうしてゆつくりと喘ぎ声を漏らしながらもなんとか引き抜くと、

それを手探りでレイの肛門へと押し当てた。

「ふう、ふう。……ク、ククク、これならいいでありますよ?」

「ん? どういう事だ?」

「この女のくっつき尻穴を穿られて情けなく喘いでる姿、見せてくれたらいいと言ってるであります」

「んなつ、臭くない!」

「どうでありますかねえ? 生きとし生けるものは全てみな等しく命を呑み込み、そして出すでありますよ? ……どうでありますかねえ?」

「ぐっ、ぬううう……ッ! どいて!」

「おっと」

顔を顰めて嫌がるレイが起き上ろうと足を上げる。

それに気付いたクリームがその上がりかけの足を両手の脇で挟み体重をかけて動けなくした。

「せめて出させて! トイレに行かせて!」

「やであります。その汚い尻穴を穿られるからわらわが妥協してやると言うのに行かせる訳がないでありますしょう?」

「っ、りびどお……」

「はあ、指を入れるぞ、レイ」

「へ、んんん!」

涙目になりながら懇願してくるレイの尻穴の周辺を撫でてしっかりほぐし、一気に指を穴の中へ突っ込んだ。

つつこんだ指には触れていないためどれだけ詰まってるかは知らないが対処自体は簡単だ。

「《クリーン／清潔》」

魔法一発で解決する。

こういう時にこういつた清掃用魔法はとても役に立つ。

例えば小便を漏らしたとしても、それが服に着いたとしてもこれ一発で解決するのだから。

……ただ今回は少し例外的である。

「おっぷ……うえっ」

体内で魔法が発動して魔力の奔流で満たされる。

これを体は上手く認識出来ず、異常事態であると認識して吐き気を催してしまう。

それに加えて唐突に体内の廃棄物が消え、空いた場所に何かを詰め込もうとお腹が減ったような感覚に襲われる。

実際排泄がめんどくさくなって自分で試した事があるから分かるのだ。

気持ち悪そうに口を抑えるレイには悪いとは思う。

しかし流石にレイの排泄物にまでは興味は無い。

ついでにクリームもこれで妥協するというのだから可哀そうだがレイには犠牲になってもらおう。

だから最初にやったつきりなんだか気持ち悪いからもう嫌だと拒否したレイと久しぶりにアナルセックスが出来ると考えてウキウキしていたとかでは断じてない。

断じてないのだ！

「んあっ!？」

入れている指を曲げて腸壁を擦る。

ゆっくりと撫でてあげたりトントンと叩いてあげれば、普段は味わえない不思議な感覚にレイが体を震わす。

「おおお、つほお、ぎゆう……」

ぎゆうぎゆうと力強く締め付ける尻穴が少しずつ緩んでくるのを感じて指を抜き性器を押し当てる。

入れる前にとレイの顔を見れば人差し指の関節を噛んで襲い来る快楽を堪えていた。

この状況を望んだクリームはといえば、そんなレイの顔に歪んだ笑みを浮かべながら舌を這わせていた。

一番この状況を楽しんでいるのはクリームなのかもしれんなど思いながら少しづつ肉棒を尻穴の中へと沈めていく。

「あああッ、おおお……」

ずぶずぶと侵入していく肉棒を迎え入れる尻穴。

一番深くまで突き入れても突き当りが無く、すべすべとした引つ掛

かりの無い滑らかな感触をされていて、膣の様に搾り取られるような快感は無い。

しかし好きな女の一番人に見られたくない場所を犯していると考えると背徳感と征服欲で背筋が震える。

「あ、あああッ、ッおお」

唐突に消えた内容物の代わりに求めるかのように少しでも休憩するとぴったりと俺の肉棒の形に張り付いてくる腸壁が愛おしい。

きつく圧迫しながらもあふれて止まらない腸液が摩擦を和らげ、滑らかなその感触でぬめりぬめりと擦ってくる。

ぴっちりと閉じた尻穴を俺の肉棒の形に変えていく。

完全に自分の色に染めたと思っていた女の体、その隠されていて手を出せていなかった部分すらをも自分の物にしていく。

「んあ、お腹、くるじっ、んんう」

そうして何回もピストンしていると大体何処が弱いのがか分かってきた。

入れる時は苦しくなるくらい深く突き入れその状態のまま子宮を裏側から刺激してやる、するとレイは思わずといった様子で声を漏らす。

そしてその後すぐに抜くのではなく、少しその状態で軽くぐりぐりと押してやればクリームに抑えられたままの下半身がビクンと跳ねて背を反った。

荒い息が吐かれ乱れる呼吸は戻らない。

「あああああああッ、っぎゅううッ」

ずぶずぶと抜いていけば肛門が肉棒に吸い付いたまま引き摺られるようにめくれ上がっていく。

まるで絶対に離さないと言っても言いたげなそれはこちらの亀頭を的確に攻めていく。

「物欲しそうに吸い付いてくるなあ」

「あッあッ、あああああああ!?!」

「聞こえてないでありんすよ?」

「そんなレイも可愛いから良し」

先程から遠慮など無く本気で抽挿をしているが特に痛みを訴える事も無く快楽を享受しているレイ。

もはや叫びに近い喘ぎ声がとても艶っぽく、聞いているだけで肉棒が跳ねる。

痙攣が激しくなってきた体にそろそろ俺もイキそうだと更にピストンを速めた。

「はひゅ、はひっ、い、イク、イツちやう！ お尻の穴でイツちやううッ！ やだ、嫌だあ!？」

「……嫌いにやなんねえよ、安心してイけ」

「ッ、あ、ああああああ!？」

足をピンと伸ばして舌を出し体を震わせる。

尻穴全部で肉棒を圧迫しこちらの精を絞ろうとしてくるレイ。

その感覚に逆らう事はしない、全てを任せて登ってきた熱を全て奥へと吐き出した。

突き当りなど無い尻穴の奥へびちやびちやと吐き出す。

逆流してこない精液はどんとどんと腸を遡る。

「は、はふ……お腹、熱う……」

虚ろな目でお腹を撫でるレイを眺めながら射精して少し萎びた肉棒を抜き出した。

開いた尻穴はぽっかりと開いたまま閉まらず、しかし精液が溢れてくる事は無い。

そんな尻穴に手を添えて魔力を練る。

「《軽傷治癒／ライト・ヒーリング》」

もしも今ので尻穴に傷がついていたら困る。

しかし《大治癒／ヒール》では今レイが感じている快感やその残照まで消し去ってしまうので簡単な回復魔法で応急処理をする。

すると少しずつぽっかりと開いていた尻穴がゆるゆると閉まっていき、小さな窄まりへと戻っていった。

「……で、満足したか？」

「まあまあでありんすね」

「手を出してなかったのは？」

「だっておんし、邪魔してたら怒ってたでありんしょう?」

「別に傷をつけないなら気にしないぞ」

「……へえ?」

キランと目を輝かせたクリームを見て嫌な予感がした。

具体的には俺のたのし……苦労が無かった事になりそうな予感だ。

そんな俺に気付かないクリームはニヤニヤと笑みを浮かべながらレイへと手を伸ばした。

「……ねえ」

ぽつりと声が零れる。

俺のではない、当然クリームでも。

となると残るは一人だけ。

レイだ。

「調子に乗ってんじゃないわよ、クソガキが」

「……は?」

パシッと伸ばされた手が掴まれた。

掴んだ手の持ち主はといえば青筋を立てて眉をヒクつかせている。

どうやら思っていたよりもお冠だったらしい。

先ほどまで掴まれていた足を腹に回して腰を上げ、クリームの腰を俺の腰の位置に合わせた。

「リビドー、やりなさい」

「あいあいさー」

「え、ちよ、まつ、アー!?!」

お膳立てされた膣に遠慮なく肉棒をブチ込む。

先程のレイの痴態を見て興奮していたのか、その小さな膣はあつさり肉棒を奥まで呑み込み、びくびくと震えた。

それを察したレイがすうっと目を細める。

「ふうん、私の犯される姿を見て興奮したの? 女まで対象とか、救いようのない変態ね」

「んなつ、そこまで言われる筋合いはないでありんすよ!」

「元々貴女の勝手な暴走でしょう。それに私を巻き込んで……」

チラッと視線を寄越され、その指示通りにクリームを抱き上げる。

足は俺の足を絡ませて動けなくし、両手を後ろに引っ張り楽に犯すための支えにする。

そうして動けなくなったクリムの乳首がカリッと噛まれた。

かなり強く噛んだのか血が流れ、しかしクリムは気持ちよさそうに目を細めて身を震わせる。

「あ、ああっ!？」

「あら、これで興奮したの？ とんだマゾね」

「ち、ちがあ」

「リビドー、洗脳。発情ね」

指示に従いクリームと目を合わせてタレントを発動する。

暫く目を合わせているとそれだけでプシッとクリームが潮を吹いた。

「あー、おおー……ああー?」

目からは光が消え意味の無い声を漏らす。

膣はほろほろと崩れ子宮口すらも簡単に突破して子宮の奥まで龟头が届く。

嬉しそうにビクビクと蠢く膣がとても心地よい。

「ちゅ、ん、んん、じゅ」

乳首から口を離しクリムの唇へと合わせるレイ。

舌を入れて歯を、舌を、涎を吸いくちゅくちゅと口内で混ぜて返しそれを飲ませる。

止めるための意識が飛んでいるクリムの体が際限無くビクビクと跳ねた。

「ああー! ああー! あああー!？」

快楽を求める機械になったクリームが腰を振る。

俺のピストンに合わせて俺が引いたら引き、俺が挿れたら腰を出す。

ぱちゅつぱちゅつと水つぽい音が部屋に響き耳を犯す。

頭も秘所も蕩け切ったクリームにこちらも限界が近い。

「イグ、イグ、イグウウウ!!」

「俺も出すぞー!」

振られる腰に合わせて子宮の奥まで突き込む。

同時に亀頭を呑み込むように子宮口が閉まりえらを刺激する様に痙攣が走った。

ぶるぶると震える体にこちらも応える。

もはや水っぽくなつた精液が子宮を満たし亀頭を温めた。

「ふうー、出した出した」

萎びた肉棒を抜く。

子宮口に挟まれて中々抜けられないそれを強引に引き抜けばどばつと精液が溢れベットのシーツを汚した。

立ち上がる気力も湧かずそのまま座り込む。

レイを見れば汚いものに触れたとでも言いたげな顔をしながら唇を腕で拭っていた。

「で、どうっ？」

「こいつ嫌い」

「あらあ……」

どうやらクリムの一方的な嫌悪から対立の構図へと変化してしまつたらしい。

その真ん中にいるのが俺で両端にいるのが絶世と付く事確実な美少女達である事に喜べばいいのか止めればいいのか悩むがまあ実害が出ない限りは問題ないだろうと傍観に徹する事にした。

流星に両腕が千切れそうになれば止めるつもりである。

「……で、その覗き見さんは誰かな？」

「?!?!」

ガタツと扉が揺れた。

特に反応は無かったがレイも気付いていたようで軽くチラツと視線を送り、興味を無くしたようにペタツと横になった。

暫く無言で扉を見つめていればキイツと音を立てて開かれていく扉。

居心地悪そうに顔を出したその女はぼそりと一言呟いた。

「……覗き見はしとらんよ」

「そうだな、盗聴をしてたんだもんな」

「ギクツ」

凶星を突かれて体を震わすそいつにため息を吐けば怯えたかのよ
うに体を縮こまらせた。

「別に怒ってやしねえよ」

「ほ、ほんとか？」

「ほんとほんと、だから早くこっち来いよ、ドラウデイロン」

竜の礼

コツツ、コツツと小さな音が響く。

普段ならば明かりが点いて仄かに明るい廊下に光は無く、窓から入る月の光が廊下を照らしていた。

辺りに死体は無く、しかし壁や床に染みついた赤黒いシミがここで起きた惨状を物語る。

壁に触れば染みついて乾いた血がポロポロと崩れ落ち手に張り付いた。

「……」

この血がビーストマンの物か人間の物か、匂いが混ざり過ぎてそれは分からない。

しかし、なんとなくその欠片こそ自分の非力の象徴、罪の証だと言われているかのような気がして目を背け、服に擦り付けて落とした。

床に落ちた欠片が紅に染まる大理石の床に落ちる。

なんとなしにそれを見つめていると血の跡が一つの方向に向かって伸びている事に気付いた。

確かこの先は……

「テラス……」

何も分からない今の自分にその跡は道しるべの様に思えた。

血の道を歩み跡を辿る。

少しづつ強くなつていく血の匂いに、何かが焼ける臭い匂い……死の香り。

テラスに積み上げられた山の様なそれは確かに自分を、竜王国を脅かしたもので、今はただの物だった。

赤く染まった毛皮にぐちゃぐちゃになった体、手が無いものがいれば足が無いものもいて、頭が吹き飛んでいるものもいれば肉の塊にか見えないものもいた。

それは確かに、自分を殺そうとしていたビーストマンの群れだった。

「あ、あ、ああ……」

まるで嵐に巻き込まれた案山子、ぐったりと動かないそれに本能が見る事を拒絶する。

それでも動かない視界がそれを捉え続け、一つの目と視線が合った。

コロコロと本体から外れた目玉が其処に転がっていて、ソレがこちらを見ている。

死んだそれが見せる空虚な怨嗟の感情に思考が止まり、喉奥から込み上げたそれを吐き出す。

「うぷっ、おえええええ」

何も入っていない胃から絞り出された胃液が喉を焼き、床を跳ねた。

吐瀉物とも言えないようなそれを吐き出し切り、ソレから目を逸らす。

視界に入るのは黒い煙が立ち上る崩れた城下町。

しかしそこに戦争特有の死の匂い、今まさに横で積みあがる死の香りは嗅ぎ取れなかった。

そんな城下町で動いているものを見て慌てて駆けだし、手すりから身を乗り出して目を研ぎ澄ませた。

そうして見えたものに思わず膝をつき、手で顔を覆う。

自身の龍種特有の優れた瞳、それは復興を始める我が竜王国の民をしっかりと捉えていた。

もちろん丸太やノコギリを担ぎ、復興に勤しもうとする者達だけではない。

頭に包帯を巻き膝を抱える者がいる、泣き叫ぶ子供を抱きしめる母がいる、見えないだけで死者も数えきれないほどいるのだろう。

それでも、生きている。

私の宝は、今も消えることなく強く生きようとしていた。

それが何よりも嬉しくて、流れる涙が止まらない。

彼は、意識を失う前に感じたあの温かい希望は夢や気のせいなどではなかったのだ。

鼻をすすり、立ち上がる。

礼を言わねばなるまい。

国を救ってくれた、その対価は何でもいい。

富を求めるならば宝物庫を開けて望む物全てを捧げよう、王になりたいのであればその座を用意しよう、私を望むのであればこの体の全てを明け渡そう。

兎に角なんでもいい、今は彼の、リビドーの顔を見たかった。

我が竜王国の救世主、その顔を。

身を翻し城内を駆ける。

どこにいるのかは分からない、しかし城という物は常に攻められやすい場所と攻められ辛い場所を用意して築かれる。

攻め入られないに越した事は無いが、もし攻め入られた時に何処で待ち構えればいいのか、何処へ逃げればいいのかを分かりやすくするためだ。

そこから逆算しておおよそ汚れていないであろう部屋を回ればいい。

血で汚れた部屋に自ら入りたがる様な奇特な者はいないだろう。

そうして探し回り7個目の部屋、そこに探し人はいた。

ただ……

「あ、あつ、んっ、ああッ!？」

「は、はわわ……」

流星におっぱじめているのは想定外だった。

しかも声からして3P。

「あああッ、おおお……」

お相手の一人はあの番外席次だろう、声に聞き覚えがある。

「ッ、あ、あああああああ!？」

そんな彼女の獣の様な喘ぎ声に思わず体が跳ねた。

一体彼女は今何をされているのか、気が強く自分に自信のある女といった印象だった番外席次が一体何をされればこのような声を上げるのか、そんなあれやこれやが脳内を駆け巡る。

顔に熱が昇っていく感覚に、今鏡を見たら揺れる炎よりも赤く染

まった顔が拝めるだろうという自覚があった。

「あー、おおー……ああー？」

問題は此方の女、一体誰なのか、少なくとも聞き覚えは一切無い声だった。

声の印象からして今の幼女モードの自分とそう大差ない年齢の少女だとは思われる。

しかし問題は一体この女が何処の誰かという事だ。

「ああー！ あー！ あああー!？」

声に嫌がるような素振りは無く、快樂だけを享受しているように聞こえる。

という事は我が民を無理矢理連れ込んでといった、そういう事は無いだろう。

最初に私に会いに来た時には番外席次もいなかったし、恐らくはその時一緒に席を外していたのだろう。

まあ其処に関しては我が民が無理矢理されているとかでないならばそこまで興味は無い。

問題は……

「イグ、イグ、イグウウウ!!」

「は、はわわわわ……」

気まずくて部屋に入れない。

正直この溢れ出さんばかりの感情を今すぐ彼にぶつきたい。

しかし性行為をしている男女、しかも今回は変則的な男女女だ、経験無しで右手が彼氏の自分では気まずいやら恥ずかしいやらでとても突撃出来ない。

例えここで無理に突撃したとしよう、そのタイミングで男の一物と女の花弁がキスしているとしよう。

気絶する。

まず間違いなく羞恥に耐えきれずに意識が飛ぶ。

泳ぐ魚がない所為で羊水が腐り始めた腐女を舐めてもらっては困るのだ。

扉に耳を当て、入るタイミングを見計らいながらそう思う。

(む、静かになった)

喘ぎ声もベットの軋む音も聞こえない。

一時的な休憩か性行為が終わったのか、どちらであるのかは分からないがこれはチャンスだといえるだろう。

ドアノブに手をかけて捻り……

「……で、その覗き見さんは誰かな？」
「?!?!」

丁度入ろうとしたタイミングで声を掛けられ、驚いて思わず肩を震わす。

それに合わせて手を添えていたドアノブから振動が伝わり扉が揺れる。

気付かれた、気付かれた……気付かれてた!?

音は立てていなかったはず、何故!?

ぐぬう……既にバレているのなら隠れる意味も無いか。

ゆっくりと扉を開けて性行為をしていないかを確認しながら入る。

まず目に入ったのは番外席次だ。

番外席次は力なくベットで横になっており、その体勢のまま横目でこちらを見ている。

特に悪感情を感じない事から性行為時の声を聞かれて怒っているなどはなさそうだ。

というか視線に何の感情も感じず、それはそれで逆に怖かった。

もう一人、私が知らなかった謎の女。

そ奴は予想通り今の私と同じくらしいの背丈の少女であった。

白蠟よりも白い透き通るような肌に、月光を反射して煌めく星屑の様な銀の髪。

顔の造形はその横顔を見ただけで思わず息を呑み、同性であるにもかかわらずいけない感情が湧きそうなるほどに整っている。

そんな少女は気絶しているのか、こちらに視線の一つも寄越す事無く目を閉じて小さな呼吸を繰り返していた。

二人の絶世とも付きそうな美少女達の股からは白く濁った液体が漏れ出しており、情事の余韻を匂わせる。

見ているだけでこちらの意識を飛ばそうとしてくる二人から視線を逸らし、彼の方へと向けた。

当然ながら情事の直後、裸である彼の一物を見ぬように気を付ける。

「……覗き見はしとらんよ」

「そうだな、盗聴をしてたんだもんな」

「ギクツ」

なるべく気付かれぬよう、音を立てぬようにしていたのだが所詮は素人の小細工であり、まるで意味など無く全て気付かれていたらしい。

表情からは特に感じないが、一応恐る恐る視線を上げ、彼と目を合わせる。

そんな私の表情から怯えを感じたのか彼はため息を一つ吐き、優しく声をかけてきた。

「別に怒ってやしねえよ」

「ほ、ほんとか？」

「ほんとほんと、だから早くこっち来いよ、ドラウディロン」

私を気遣う優しい声に心臓が高鳴るのを自覚しながらも気付かなかった振りをしてその声に従う。

ゆつくりと彼の元へと歩みを進め、ベットに腰掛ける彼の足元で足を止めた。

私よりも頭3つほど背の高い彼だが、ベットに座っていれば軽く見上げる程度で済む。

「それで、用件はなんだ？」

その質問に何故、自分が此処にいるのかを思い出し、慌てて頭を下げた。

「此度の戦において、我が国を救ってくれたことに心からの感謝を捧げる」

「おう」

「それで、なのだがな。それに対する対価を私は払わなければならぬ……いや、私が払いたいのだ。何か望むものはあるか？」

「それってなんでもいいのか？」

「ああ、なんでもだ。財が欲しければ宝物庫を開けよう。王になりたければ用意しよう。私が欲しければ今この場で抱いてくれてもいい。なにかあるか？」

どうなんだと首を傾げるリビドーに用意していた返事を返す。

さりげなく最後の物を少し強調して伝えたが、それに気付いた様子も無く彼は少し考え、返事をした。

「冒険者プレートくれ、アダマンタイト」

「うむ、それで？」

「……………いや、それだけだが」

「それだけえ!？」

冒険者プレートとは冒険者としての力を証明するものだ。

そしてアダマンタイトプレートとはその中でも最上位の存在であるという事を示す。

この国で言えばあのロリコンセラブレイトがそれにあたる。

だがよく考えて欲しい、そのアダマンタイトであるセラブレイトが数年かけて解決できなかったこの国のビーストマン問題を一日にも満たない時間で解決したのが目の前で座るリビドーという男なのだ。

その時点で彼の実力は既存のアダマンタイト冒険者を遙かに超えている事になる。

そうでなくとも彼が殺したビーストマンの数は約30万、一般人換算で約300万人。

単純計算で彼は一般人約300万人を超える力を持つことになる。

そして竜王国の住人は100万より少し多い程度、一人で竜王国3つ分の戦力だ。

この事が冒険者組合に知られればアダマンタイトどころかその上の新たなランク、ほぼ彼専用となる特別なランクを作られ与えられることだろう。

つまり何が言いたいかと言うと、それではこちらの気が済まないし、なんならこの事を他国に知られれば竜王国は恩知らずの厚顔無恥な馬鹿の集まりとして見られるのだ。

「ほ、ほかに、他に何かないのか!？」

「そう言われてもなあ」

「なんでもいいんだぞ!？」 この国の王になる事も出来るのだぞ!？」

「いや、俺法国所属だし」

「なら宝物庫は!？」 ゴミと化していた金銀財宝がたんまりあるぞ!？」

「旅するのに邪魔だろ」

「ぐっ、ぬううううう!？」

憎い、こ奴の無欲さが憎い。

いや、頭を抱えて呻っている私をベットで横になってニヤニヤ笑いながらこちらを見ている性悪コンビからして無欲という事はないだろう。

ただこちらが彼が欲しいものを提供できないだけだ。

どちらにしる竜王国は無能として舐められ馬鹿にされることになる、それだけは避けなければならない。

「……なら、私はどうだ。自分で言うのもなんだが容姿はそれなりに整っているし、初物だぞ」

「んー、それもなあ……二人がいるし、別にいらないうつていうか」

「……………っ」

自分の体を賭けても領いてはくれなかった。

その事に強い悲しみが胸を襲い、涙がこぼれる。

もう竜王国に出せる物など無い、王も財宝も女も駄目とくれば国としては負けだ。

これから竜王国は救国の英雄に報酬の一つも出さない厚顔無恥な国として、私はそんな英雄に振られるがして振られた阿保王女と呼ばれることになるのだろう。

そしてそんなことよりもなによりも……私は女として、現地妻の様な、そんな妾としての価値すらも無いと言外に言われたことに、一番の悲しみを覚えた。

「……あー、リビドー、抱いてあげたら?？」

「そうは言ってもな、王女とのセックスとか後がめんどくさいだろ」

「そこはほら、婚約的なあれでいいんじゃない?？」

「それだとレイが妾つてことになるだろう、それは嫌だ」

「私はそれでもいいんだけどねえ……」

俯き、声を殺して泣いている私を見て流石に哀れだと感じたのか、番外席次がフオローに回る。

「まあいいじゃない、それに得もあるわよ」

「得？」

「そう、今のリビドーは救国の英雄、当然取り入ろうとする娘たちがいるでしょうね」

「なるほど、それは面倒だな。そこで婚約か」

「そう、流石に国の王女、しかもこの見た目。結構愛されてるみたいだし、流石にそんな娘の初恋の人を盗ろうとする馬鹿も早々出ないでしょう」

「……でもな」

「いいのよ、別に。だって……」

「？」

「一番は私だからね」

「……そうだな。よし、ドラウディロン」

話がついたのか、立ち上がって私の腋に手を入れて持ち上げる彼。

唐突に視点が上がり、驚いて顔を上げれば薄く笑みを浮かべる彼と目があった。

「やるか！」